Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0

日常的な管理 － Web 手順ガイド

Part No.: E23665-01
2011 年 7 月、Revision A

Copyright © 2008, 2010, 2011 Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

リサイクル
してください

Adobe PostScript

目次

このマニュアルの使用法　ix

▼　製品ソフトウェアおよびファームウェアをダウンロードする　xi

Web インタフェースの概要　1

Web インタフェースについて　2

ブラウザおよびソフトウェアの要件　2

サポートされている Web ブラウザ　2

Oracle ILOM で許可されるネットワークアドレス　4

IPv6 アドレスの入力例　4

CMM とサーバー SP の Web インタフェース接続　5

Oracle ILOM 開始画面　5

サーバー SP の Web インタフェースのコンポーネント　6

CMM の Web インタフェース　7

Web インタフェースナビゲーションタブ　10

ナビゲーションタブの説明　10

ジャンプリンク　15

Oracle ILOM に対するログインとログアウトおよびバナーメッセージの表示 (Web)　17

初回ログインの前に　18

▼　root ユーザーアカウントを使用してログインする (Web)　19

▼　ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインする (Web)　20

▼ Oracle ILOM からログアウトする (Web) 21
▼ ログインページにバナーメッセージを表示する (Web) 22

ネットワーク、Secure Shell、ローカル相互接続を設定する (Web) 23
ネットワーク設定を構成する (Web) 24
ネットワーク設定要件 (Web) 25
▼ IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する (Web) 26
▼ IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する (Web) 28
▼ IPv4 または IPv6 のネットワーク設定をテストする (Web) 31
▼ ホスト名とシステム識別子を割り当てる (Web) 32
▼ DNS の設定を表示および構成する (Web) 33
▼ シリアルポートのボーレートを表示および設定する (Web) 34
▼ x86 ホストのシリアルポート所有者を設定する (Web) 35
▼ HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする (Web) 36
▼ SSL 証明書をアップロードする (Web) 37
Secure Shell の設定 38
▼ SSH を有効または無効にする 38
▼ 新しい SSH 鍵を生成する 39
▼ SSH サーバーを再起動する 39
ローカル相互接続インタフェースを設定する (Web) 40
ローカル相互接続の設定要件 40
▼ ローカル相互接続インタフェースを設定する (Web) 42

ユーザーアカウントを管理する (Web) 45
ユーザーアカウントを設定する (Web) 46
▼ シングルサインオンを設定する (Web) 46
▼ セッションタイムアウトを設定する (Web) 47
▼ ユーザーアカウントを追加して役割を割り当てる (Web) 47
▼ ユーザーアカウントを変更する (Web) 50

▼ ユーザーアカウントを削除する (Web) 51
▼ ユーザーセッションを表示する (Web) 52
SSH 鍵を設定する (Web) 52
▼ SSH 鍵を追加する (Web) 53
▼ SSH 鍵を削除する (Web) 55
Active Directory を設定する (Web) 55
▼ Active Directory 設定を表示および構成する (Web) 56
▼ Active Directory テーブルを設定する (Web) 60
▼ Active Directory 認証および承認をトラブルシューティングする (Web) 64
Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を設定する 66
▼ LDAP サーバー設定を構成する (Web) 66
▼ LDAP 用に Oracle ILOM を設定する (Web) 67
LDAP/SSL の設定を構成する (Web) 68
▼ LDAP/SSL 設定を表示および構成する (Web) 68
▼ LDAP/SSL テーブルを設定する (Web) 72
▼ LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング (Web) 75
RADIUS を設定する (Web) 78
▼ RADIUS 設定を構成する (Web) 78

コンポーネント状態と保守作業を管理する (Web) 81
▼ コンポーネント状態の情報を表示する (Web) 82
▼ コンポーネントの取り外しを準備する (Web) 83
▼ コンポーネントをサービスに復帰させる (Web) 84
▼ コンポーネントを有効または無効にする (Web) 84
▼ Oracle ILOM が検出した障害をクリアする (Web) 85

システムセンサーの監視とイベントログの管理を行う (Web) 87
▼ センサー測定値を表示する (Web) 88
▼ システムインジケータを設定する (Web) 88

▼ クロック設定を構成する (Web) 89
▼ タイムゾーン設定を構成する (Web) 90
▼ イベントログ出力をフィルタリングする (Web) 91
▼ Oracle ILOM イベントログを表示およびクリアする (Web) 92
▼ リモート syslog 受信側の IP アドレスを設定する (Web) 94

ストレージコンポーネントおよび Zone Manager の監視 (Web) 95
ストレージコンポーネントの監視の要件 96
▼ RAID コントローラの詳細を表示および監視する (Web) 96
▼ RAID コントローラに接続されているディスクの詳細を表示および監視する (Web) 98
▼ RAID コントローラのボリュームの詳細を表示および監視する (Web) 100
SAS-2 ストレージデバイス用の Zone Manager を有効または無効にする 101

システム警告と電子メール通知の管理 (Web) 103
警告ルール設定を管理する (Web) 104
警告ルールの設定要件 104
▼ 警告ルールを作成または編集する (Web) 105
▼ 警告ルールを無効にする (Web) 106
▼ 指定した警告ルールのテスト警告を送信する (Web) 106
電子メール通知警告用の SMTP クライアントを設定する (Web) 107
▼ 電子メール通知警告用の SMTP クライアントを有効にする (Web) 107

電力監視およびハードウェアインタフェースの管理 (Web) 109
電力管理機能の更新の概要 (Web) 110
システムの消費電力を監視する (Web) 112
消費電力の監視の要件 (Web) 112
▼ システムの消費電力を監視する (Web) 113
▼ 個々の電源装置の消費電力を監視する (Web) 114
▼ 電力履歴統計情報を監視する (Web) 114

サーバーの電力使用量を管理するための電力ポリシーを設定する (Web)　116

電力ポリシーの設定要件 (Web)　116

▼　消費電力ポリシーを設定する (Web)　117

▼　電力上限に対するサーバー電力ポリシーを設定する (Web)　118

消費電力通知しきい値の設定 (Web)　120

▼　Web インタフェースを使用して通知しきい値を表示および設定する　120

コンポーネント割り当て配電を監視し設定する (Web)　121

電力割り当て配電の要件 (Web)　121

▼　サーバーコンポーネントの電力割り当てを表示する (Web)　122

▼　Oracle ILOM 3.0.8 でサーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)　123

▼　CMM コンポーネント電力割り当てを表示する　125

▼　Oracle ILOM 3.0.6 で CMM のブレードスロットの許容電力を設定する　128

▼　Oracle ILOM 3.0.10 で CMM のブレードスロットの許可制限を設定する　130

サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)　132

▼　サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)　132

CMM 電源冗長性プロパティーを監視または設定する (Web)　135

▼　CMM の電源装置の冗長性プロパティーを表示または設定する (Web)　135

リモートホストのリダイレクションの管理と Oracle ILOM リモートコンソールのセキュリティー保護 (Web)　137

リモートホスト KVMS リダイレクションの Web 手順　138

リモートホストの電源状態を管理する (Web)　139

リモートサーバー SP または CMM から電源状態を制御する (Web)　140

▼　サーバー SP を使用してリモートホストサーバーの電源状態を制御する (Web)　140

▼　CMM Web インタフェースを使用してリモートシャーシの電源状態を制御する　141

x86 システムの起動デバイスのホスト制御を管理する (Web)　142

ホスト起動デバイスの要件 (Web)　142

▼　ホスト起動デバイスを構成する (Web)　142

SPARC サーバーでの TPM と LDom の状態を管理する (Web)　145

SPARC サーバーの TPM の状態を制御する (Web)　146

▼　SPARC サーバーの TPM の状態を制御する (Web)　146

SPARC サーバーで LDom 設定を管理する (Web)　147

SPARC LDom 設定の要件 (Web)　148

▼　SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 設定を表示する (Web)　148

▼　格納されている LDom 設定に対してホストの電源を設定する (Web)　149

▼　格納されている LDom 設定に対してホストの電源を指定する (Web)　150

IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断　151

Oracle ILOM 接続に関する問題の診断　152

ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動設定ガイドライン　153

ホスト OS での内部 USB Ethernet デバイスの設定　154

索引　159

このマニュアルの使用法

この Web インタフェース手順ガイドでは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の日常的な管理機能をサポートする Oracle の Sun ラックマウント型サーバー、サーバーモジュール、および CMM に共通する、Oracle ILOM 3.0 の Web インタフェース機能について説明します。

このガイドで説明する機能の詳細については、このガイドとともに Oracle ILOM 3.0 ドキュメントライブラリのその他のガイドを参照してください。このガイドは、技術者、システム管理者、承認サービスプロバイダ、システムハードウェアの管理経験があるユーザーを対象としています。

この章では、次の項目について説明します。

- x ページの「ドキュメントとフィードバック」
- xi ページの「製品のダウンロード」
- xii ページの「Oracle ILOM 3.0 のバージョン番号」
- xiii ページの「ドキュメント、サポート、およびトレーニング」

ドキュメントとフィードバック

Oracle ILOM 3.0 ドキュメントライブラリを、(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19860-01&id=homepage) でダウンロードできます。

用途	タイトル	形式
オンラインドキュメントセット	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 HTML ドキュメントコレクション	HTML
クイックスタート	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 クイックスタートガイド』	PDF
リモート KVMS	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 リモートリダイレクションコンソール − CLI および Web ガイド』	PDF
日常的な管理機能	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 日常的な管理 − 概念ガイド』	PDF
日常的な管理 − Web 手順	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 日常的な管理 − Web 手順ガイド』	PDF
日常的な管理 − CLI 手順	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 日常的な管理 − CLI 手順ガイド』	PDF
プロトコル管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 プロトコル管理 − SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN ガイド』	PDF
CMM 管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) CMM 管理ガイド − Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』	PDF
保守と診断	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 保守と診断 − CLI および Web ガイド』	PDF
最新情報	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 機能更新およびリリースノート』	PDF

このドキュメントについてのフィードバックを、(http://www.oraclesurveys.com/se.ashx?s=25113745587BE578)

製品のダウンロード

Oracle ILOM 3.0 ファームウェアの更新は、Sun サーバーまたは Sun ブレードシャーシシステムごとに My Oracle Support (MOS) Web サイトからダウンロードできる、スタンドアロンのソフトウェア更新を通じて入手できます。これらのソフトウェア更新を MOS Web サイトからダウンロードするには、次の手順に従ってください。

▼ 製品ソフトウェアおよびファームウェアをダウンロードする

1. (http://support.oracle.com) に移動します。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページ上部の、「Patches and Updates (パッチと更新)」タブをクリックします。
4. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで、「Product or Family (Advanced Search) (製品またはファミリ (詳細検索))」を選択します。
5. 「Product? Is (製品)」フィールドで、Sun Fire X4470 のように製品名のすべてまたは一部を、一致リストが表示されるまで入力します。対象の製品を選択します。
6. 「Release? Is (リリース)」プルダウンリストで、下向きの矢印をクリックします。
7. 表示されるウィンドウで、製品フォルダアイコンの三角形 (>) をクリックして選択した内容を表示してから、対象のリリースを選択します。
8. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで、「Search (検索)」をクリックします。

   製品ダウンロードのリスト (パッチとして一覧表示されます) が表示されます。
9. 対象のパッチ名 (Sun Fire X4470 SW 1.1 リリースの ILOM と BIOS 部分の Patch 10266805 など) を選択します。
10. 表示される右区画で、「Download (ダウンロード)」をクリックします。

Oracle ILOM 3.0 のバージョン番号

Oracle ILOM 3.0 では、サーバーまたは CMM で実行しているファームウェアバージョンを識別しやすいファームウェアバージョン番号方式を採用しています。この番号方式では、5 つのフィールドがある文字列を使用しています。たとえば、`a.b.c.d.e` となります。

- `a` − Oracle ILOM のメジャーバージョンを示します。
- `b` − Oracle ILOM のマイナーバージョンを示します。
- `c` − Oracle ILOM の更新バージョンを示します。
- `d` − Oracle ILOM のマイクロバージョンを示します。マイクロバージョンは、プラットフォームまたはプラットフォームのグループ単位で管理されます。詳細は、使用しているプラットフォームの製品ノートを参照してください。
- `e` − Oracle ILOM のナノバージョンを示します。ナノバージョンは、マイクロバージョンの増分反復です。

たとえば、Oracle ILOM 3.1.2.1.a の意味は、次のとおりです。

- Oracle ILOM 3 は、Oracle ILOM のメジャーバージョンです。
- Oracle ILOM 3.1 は、Oracle ILOM 3 のマイナーバージョンです。
- Oracle ILOM 3.1.2 は、Oracle ILOM 3.1 の 2 番目の更新バージョンです。
- Oracle ILOM 3.1.2.1 は、Oracle ILOM 3.1.2 のマイナーバージョンです。
- Oracle ILOM 3.1.2.1.a は、Oracle ILOM 3.1.2.1 のナノバージョンです。

ヒント – Sun サーバーまたは CMM にインストールされている Oracle ILOM のファームウェアバージョンを識別するには、Web インタフェースで「System Information」-->「Versions」をクリックするか、コマンドラインインタフェースで `version` と入力します。

ドキュメント、サポート、およびトレーニング

これらの Web サイトでは追加リソースを提供しています。

- ドキュメント (http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html)
- サポート (https://support.oracle.com)
- トレーニング (https://education.oracle.com)

Web インタフェースの概要

説明	リンク
Oracle ILOM の Web インタフェースの使用要件を確認する	• 2 ページの「Web インタフェースについて」 • 2 ページの「ブラウザおよびソフトウェアの要件」
Oracle ILOM のサーバー SP と CMM の Web インタフェースコンポーネントを比較する	• 5 ページの「CMM とサーバー SP の Web インタフェース接続」
Oracle ILOM の Web インタフェースタブと、そこから実行できる機能について学習する	• 10 ページの「Web インタフェースナビゲーションタブ」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、Oracle ILOM の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、CLI の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、SNMP の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、IPMI の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 保守と診断』、保守および診断の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 機能更新およびリリースノート』、新規または更新された機能

Web インタフェースについて

Oracle ILOM Web インタフェースはブラウザからアクセス可能で、標準のインタフェースを使用しています。Oracle ILOM Web インタフェースを使用すると、ローカルおよび遠隔システムを監視および管理することができます。Oracle ILOM のもっとも強力な機能の 1 つに、サーバーのグラフィカルコンソールをローカルのワークステーションまたはラップトップシステムにリダイレクトする機能があります。ホストのコンソールをリダイレクトすると、ローカルシステムのキーボードおよびマウスを、サーバーのキーボードおよびマウスとして動作するように設定することができます。さらに、リモートシステムのフロッピーディスクドライブまたは CD-ROM ドライブを、Oracle Sun システムに接続した仮想デバイスとして設定することができます。これらの機能には、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用してアクセスできます。

ブラウザおよびソフトウェアの要件

サポートされている Web ブラウザのリストや、Oracle ILOM Web インタフェースで許可されるネットワークアドレスについては、次のトピックを参照してください。

- 2 ページの「サポートされている Web ブラウザ」
- 4 ページの「Oracle ILOM で許可されるネットワークアドレス」

サポートされている Web ブラウザ

Web インタフェースは、最新リリースの Mozilla Firefox および Internet Explorer Web ブラウザで正常に動作することがテストされており、他の Web ブラウザとも互換性がある場合があります。

Oracle ILOM は、次の表に示すブラウザをサポートしています。

表: サポートされている Web ブラウザ

オペレーティングシステム	Web ブラウザ
Oracle Solaris (9 および 10)	• Mozilla 1.4 および 1.7 • Firefox 1.x 以降
Linux (Red Hat、SuSE、Ubuntu、Oracle)	• Mozilla 1.x 以降 • Firefox 1.x 以降 • Opera 6.x 以降
Microsoft Windows (98、2000、XP、Vista)	• Internet Explorer 5.5、6.x、7.x • Mozilla 1.x 以降 • Firefox 1.x 以降 • Opera 6.x 以降
Macintosh (OSX v10.1 以降)	• Internet Explorer 5.2 • Mozilla 1.x 以降 • Firefox 1.x 以降 • Safari すべて

注 – Oracle ILOM は Sun のシステムにプリインストールされており、リモートコンソールアプリケーションも含まれています。Oracle ILOM リモートコンソールを実行するには、Java Runtime Environment 1.5 (JRE 1.5) またはそれ以降のバージョンの JRE ソフトウェアがローカルクライアントにインストールされている必要があります。JRE ソフトウェアをダウンロードするには、`http://java.com` にアクセスしてください。Oracle ILOM リモートコンソールでサポートしている Web ブラウザとオペレーティングシステムのリストについては、『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール – CLI および Web ガイド』を参照してください。

Oracle ILOM で許可されるネットワークアドレス

Oracle ILOM 3.0.12 以降では、次のネットワークアドレスが Oracle ILOM インタフェースで許可されます。

注 – IPv6 アドレスまたはリンクローカル IPv6 アドレスが正しく機能するためには、アドレスの入力時にそのアドレスを角括弧で囲む必要があります。

- **IPv4 アドレス** – `10.8.183.106`
- **IPv6 アドレス** – `[fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64]`
- **リンクローカル IPv6 アドレス** – `[e80::214:4fff:feca:5f7e/64]`
- **DNS ホストドメインアドレス** – `company.com`

IPv6 アドレスの入力例

Web ブラウザの使用時に URL 内で IPv6 アドレスを使用するときや、ファイルを転送するときは、IPv6 アドレスを角かっこで囲む必要があります。SSH 接続を使用して Oracle ILOM にログインするために IPv6 アドレスを指定するときは、IPv6 アドレスを角かっこで囲まないようにします。

次に例を示します。

- Web ブラウザで URL を入力するときは、次のように入力します。

  `https://[`*ipv6address***`]`**

- SSH とデフォルトの Oracle ILOM `root` ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM CLI セッションを確立するときは、次のように入力します。

  `ssh root@`*ipv6address*

  SSH 接続を使用して Oracle ILOM にログインするために IPv6 アドレスを指定するときは、IPv6 アドレスを角かっこで囲まないよう注意してください。

- CLI の `load -source` コマンドと `tftp` を使用してファイルを転送するときは、次のように入力します。

  `load -source tftp://[`*ipv6address***`]`***filename.extension*

  IPv6 アドレスの入力の詳細については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』を参照してください。IPv4 と IPv6 の接続に関する問題の診断のヘルプについては、151 ページの「IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断」を参照してください。

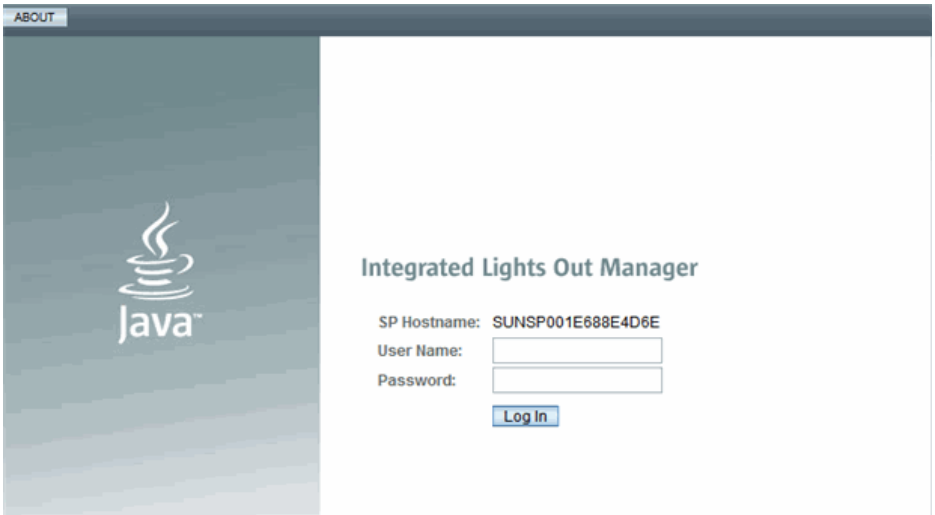
CMM とサーバー SP の Web インタフェース接続

この節で説明するトピックは次のとおりです。

- 5 ページの「Oracle ILOM 開始画面」
- 6 ページの「サーバー SP の Web インタフェースのコンポーネント」
- 7 ページの「CMM の Web インタフェース」

Oracle ILOM 開始画面

CMM またはサーバー SP の Oracle ILOM への Web インタフェース接続を確立するには、Web ブラウザで CMM またはサーバー SP の IP アドレスを指定します。ユーザー名とパスワードを入力するように求める開始画面が表示されます。

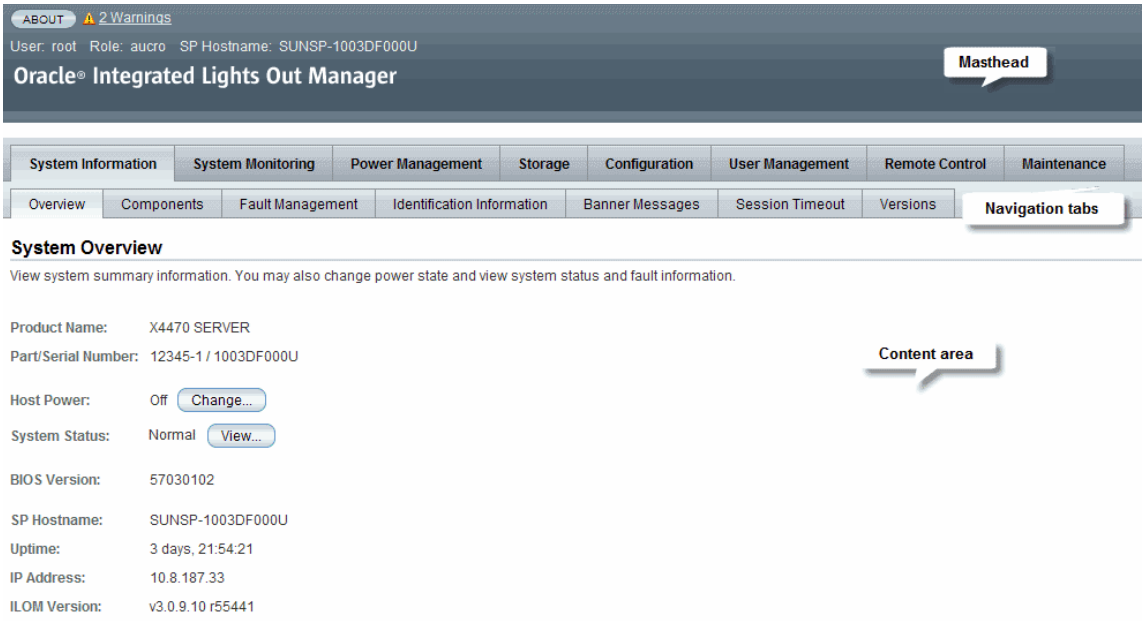


サーバー SP の Web インタフェースのコンポーネント

サーバー SP の Oracle ILOM のメイン Web ページでは、次の例に示すように、表示または構成できるそのサーバーの設定がページの上部に表示されるタブにまとめられています。CMM の Oracle ILOM Web インタフェースについては、7 ページの「CMM の Web インタフェース」を参照してください。

注 – Oracle ILOM Web インタフェースのナビゲーションタブは、特定のプラットフォームに実装されている Oracle ILOM の機能およびシステムに現在インストールされている Oracle ILOM のバージョンによって多少異なります。このため、この節で説明するタブとは異なるタブにアクセスできる場合があります。使用しているシステムの Oracle ILOM インタフェースに関する詳細は、お手持ちの Oracle ILOM の補足マニュアルまたはプラットフォームの管理ガイドを参照してください。

図: Oracle ILOM Web インタフェースのメインページ



Web インタフェースの各ページには、マストヘッド、ナビゲーションタブ、およびコンテンツという 3 つのメインエリアがあります。

マストヘッドには、Web インタフェースの各ページにおいて、次のボタンと情報が提供されます。

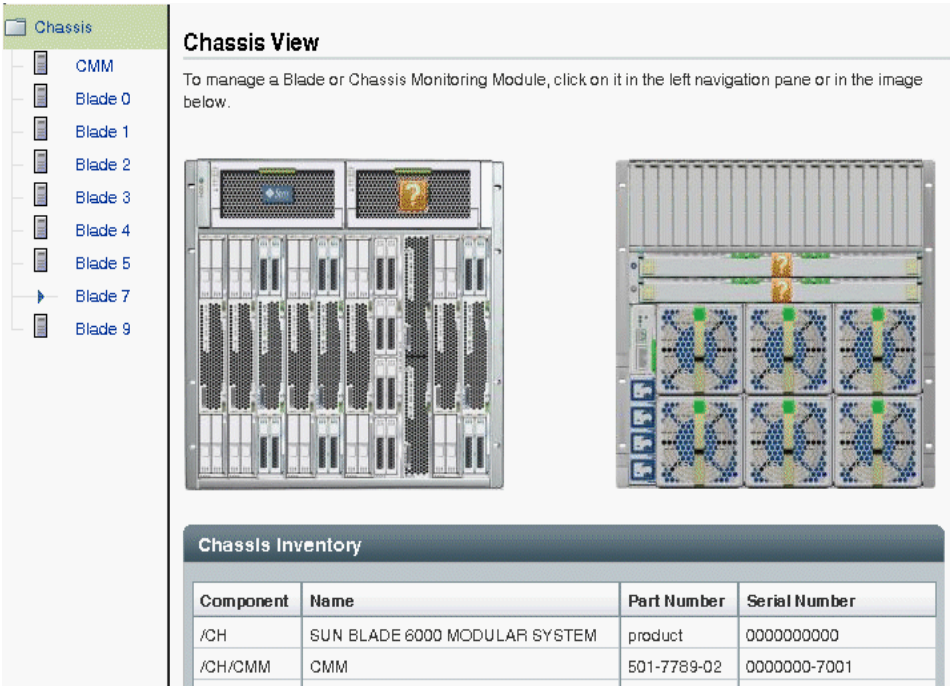
- 「About」**ボタン** − クリックすると、製品情報および著作権情報を表示します。
- 「User」**フィールド** − Web インタフェースの現在のユーザーのユーザー名とユーザーの役割を表示します。
- 「Server」**フィールド** − Oracle ILOM SP または CMM のホスト名を表示します。
- 「Refresh」**ボタン** − クリックすると、ページのコンテンツエリアの情報を再表示します。「Refresh」ボタンでは、ページで入力または選択した新しいデータは保存されません。
- 「Log Out」**ボタン** − クリックすると、Web インタフェースの現在のセッションを終了します。

Oracle ILOM Web インタフェースのナビゲーション構造には第 1 および第 2 レベルのタブがあります。これをクリックして特定のページを開くことができます。たとえば、第 1 レベルのタブをクリックすると、さらにオプションを指定できる 1 つまたは複数の第 2 レベルのタブが表示される場合があります。コンテンツエリアは、特定の機能または操作に関する情報が表示される場所です。

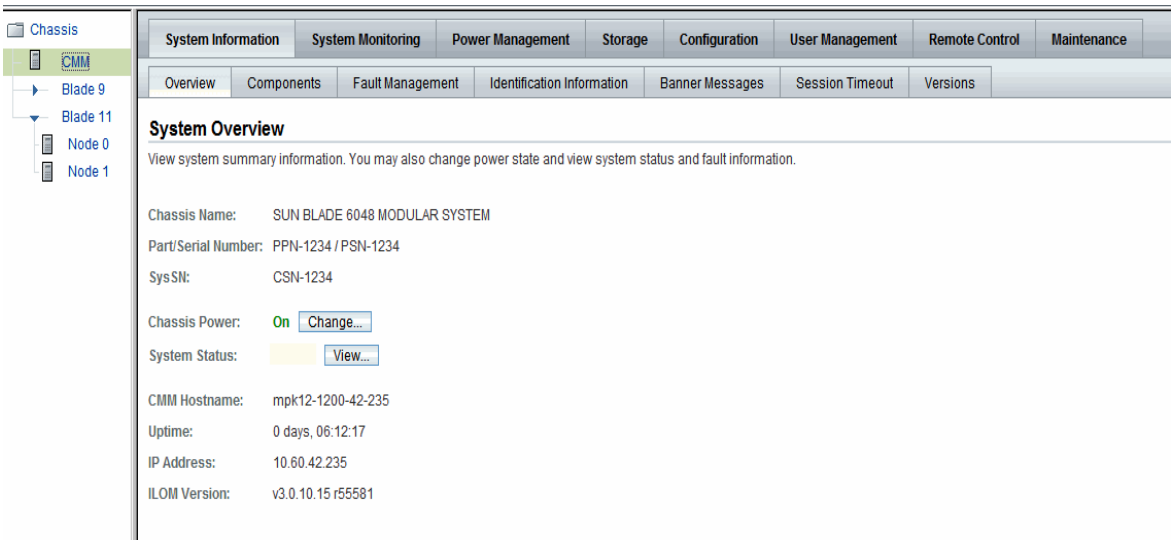
CMM の Web インタフェース

CMM の Oracle ILOM Web ページは次のエリアで構成されます。

- **ナビゲーション区画** − 画面の左側に表示され、シャーシに含まれる管理可能なコンポーネントの表示可能なエントリのみを一覧表示します。
- 「Chassis View」と「Chassis Inventory」**テーブル** − ナビゲーション区画でシャーシエントリを選択すると、画面の右側に表示されます。「Chassis View」には、シャーシの正面図と背面図が表示されます。「Chassis Inventory」テーブルには、シャーシに含まれる管理可能なシャーシコンポーネントに関する情報が表示されます。

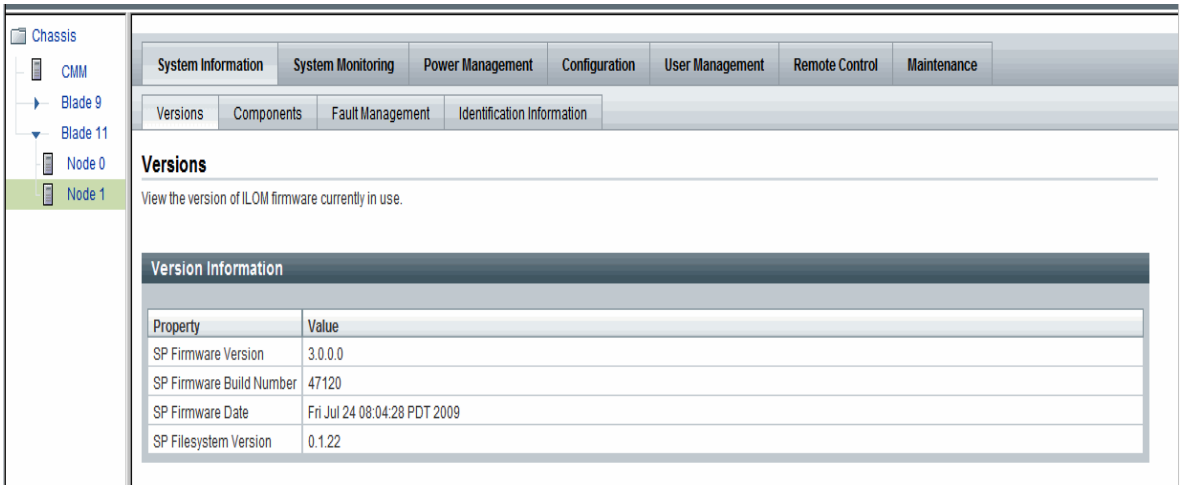


- **CMM 管理設定** – ナビゲーション区画で CMM エントリを選択すると、画面の右側に表示されます。次の例に示すように、表示または構成できる CMM の設定が、ページの上部に表示される 8 つのタブにまとめられています。



注 – Oracle ILOM 3.0.10 から使用できる CMM のゾーン管理機能の詳細は、『Oracle (ILOM) CMM 管理ガイド – Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』を参照してください。

- **ブレード管理設定** – ナビゲーション区画でブレードエントリを選択すると、画面の右側に表示されます。複数のサービスプロセッサ (Service Processor、SP) を搭載したブレードを管理している場合は、次の例に示すように、各専用 SP の「Node」エントリがナビゲーション区画に表示されます。



前の例に示すように、表示または構成できる個々のブレード SP の設定が、Oracle ILOM Web インタフェースページの右側に表示される 7 つのタブにまとめられています。

この節で説明したタブの詳細は、10 ページの「Web インタフェースナビゲーションタブ」を参照してください。

Web インタフェースナビゲーションタブ

この節で説明するトピックは次のとおりです。

- 10 ページの「ナビゲーションタブの説明」
- 15 ページの「ジャンプリンク」

ナビゲーションタブの説明

次の表で、Oracle ILOM 機能へのアクセスで使用できる Web インタフェースのタブを説明します。

注 – Oracle ILOM Web インタフェースのナビゲーションタブは、特定のサーバープラットフォームに実装されている Oracle ILOM の機能およびシステムに現在インストールされている Oracle ILOM のファームウェアバージョンによって多少異なります。このため、次の表に示すタブとは異なるタブにアクセスできる場合があります。使用しているシステムの Oracle ILOM インタフェースに関する詳細は、お手持ちの Oracle ILOM の補足マニュアルまたはプラットフォームの管理ガイドを参照してください。

第 1 レベルのタブ	第 2 および第 3 レベルのタブ	可能な操作	適用対象
System Information			
	Overview	製品名、パーツまたはシリアル番号、ホストの電源状態、システムの状態、BIOS のバージョン、SP ホスト名、システム稼働時間、IP アドレス、および実行中の Oracle ILOM のバージョンを表示します。 • 「Host Power」の状態では、システムの電源状態を制御できます。 • 「System Status」の状態では、障害が発生したハードウェアを表示できます。 • 「SysFW Information」(SPARC のみ) は、サーバーに組み込まれているシステムファームウェアのバージョンを示します。	サーバー SP CMM
	Components	Oracle ILOM が監視しているコンポーネントの名前、種類、および状態を表示します。	サーバー SP CMM
	Fault Management	障害状態にあるコンポーネントに関する情報を表示します。	サーバー SP CMM

第 1 レベルのタブ	第 2 および第 3 レベルのタブ	可能な操作	適用対象
	Identification Information	ホスト名またはシステム識別子を割り当てることにより、サービスプロセッサの識別情報を入力または変更します。	サーバー SP CMM
	Banner Messages	ユーザーのログイン前に表示されるメッセージとログイン後に表示されるログインメッセージを表示および設定します。	サーバー SP CMM
	Session Timeout	セッションタイムアウトを表示したりセッションタイムアウトパラメータを変更したりします。	サーバー SP CMM
	Versions	SP ファイルシステムのバージョン、SP ファームウェアのバージョン、SP ファームウェアのビルド番号、および SP ファームウェアの日付を表示します。	サーバー SP CMM
System Monitoring			
	Sensor Readings	センサーの名前、種類、および測定値を表示します。	サーバー SP CMM
	Indicators	インジケータと LED の名前および状態を表示します。	サーバー SP CMM
	Event Logs	イベント ID、クラス、種類、重要度、日時、イベントの説明を含む、特定の各イベントに関するさまざまな詳細を表示します。	サーバー SP CMM
Power Management			
	Consumption	実電力と許容電力の消費電力基準値を表示し、電子メール警告または SNMP 通知を生成するための消費電力しきい値を設定します。	サーバー SP CMM
	Allocation	容量計画のためにシステム電源の要件を表示します。 このタブは、Oracle ILOM 3.0.10 より前では「Distribution」という名前でした。	サーバー SP CMM
	Limit	サーバー電源の制限を表示または設定します。 このタブは、Oracle ILOM 3.0.8 より前では「Budget」という名前でした。	サーバー SP
	Settings	SPARC サーバーの消費電力のポリシーオプションを設定します。	SPARC
	Redundancy	CMM 電源装置の冗長性オプションを表示および設定します。 このタブは、Oracle ILOM 3.0.6 から使用できるようになりました。	CMM

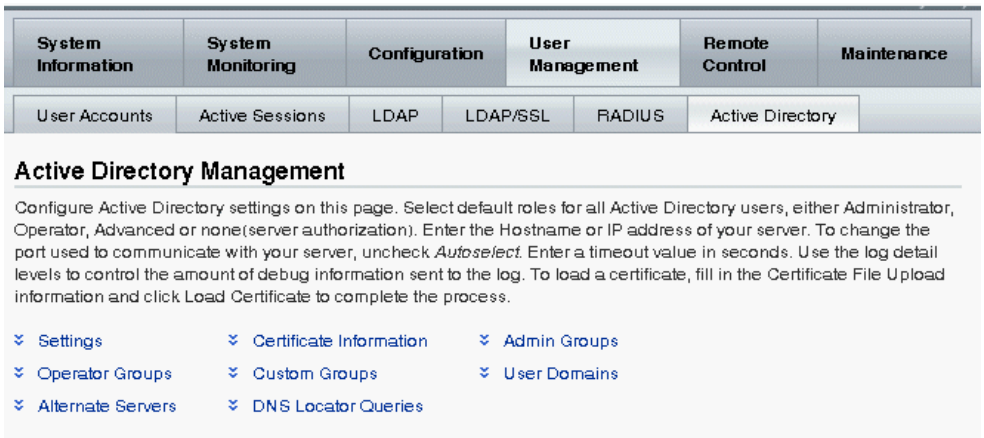
第 1 レベルのタブ	第 2 および第 3 レベルのタブ	可能な操作	適用対象
	Statistics	CMM およびサーバーモジュール (ブレード) の電力統計データを表示します。	CMM
	History	消費電力の移動平均の履歴を表示します。	サーバー SP CMM
Storage			
	RAID --> Controllers	RAID コントローラの情報を表示します。詳細を表示するには、コントローラ名をクリックします。	サーバー SP
	RAID --> Disks	RAID コントローラに接続されているすべてのディスクの情報を表示します。詳細を表示するには、ディスク名をクリックします。	サーバー SP
	RAID --> Volumes	RAID ボリュームの情報を表示します。詳細を表示するには、ボリューム名をクリックします。	サーバー SP
	Zoning	Zone Manager の設定を有効または無効にしたり、Zone Manager のパスワードをリセットしたりします。	CMM
Configuration			
	System Management Access --> Web Server	HTTP Web サーバー、HTTP ポートなど、Web サーバーの設定を編集または更新します。	サーバー SP CMM
	System Management Access --> SSL Certificate	デフォルトの SSL 証明書に関する情報を表示し、任意で、新しい SSL 証明書を検索または入力します。	サーバー SP CMM
	System Management Access --> SNMP	SNMP の設定を編集または更新します。	サーバー SP CMM
	System Management Access --> SSH Server	Secure Shell (SSH) サーバーのアクセスと鍵の生成に関する設定を行います。	サーバー SP CMM
	System Management Access --> IPMI	コマンド行インタフェースを使用して、サーバープラットフォームに関する情報を取得するだけでなく、サーバープラットフォームを監視および制御します。	サーバー SP CMM
	System Management Access --> CLI	CLI の設定を行います。「Session Time-out」の値は、CLI の自動ログアウトが発生するまでのアイドル時間を分単位で示します。	サーバー SP CMM
	System Management Access --> WS-Man	WS-Management の設定を行います。WS-Management は、サーバーとデバイスを管理するための Web サービスおよび SOAP ベースのプロトコルです。	サーバー SP

第 1 レベルのタブ	第 2 および第 3 レベルのタブ	可能な操作	適用対象
	Alert Management	それぞれの警告に関する詳細を表示したり、設定された警告のリストを変更したりします。	サーバー SP CMM
	Network	Oracle ILOM およびローカル相互接続インタフェース設定の IPv4 と IPv6 のネットワーク設定を表示および編集します。	サーバー SP CMM
	DNS	ホスト名を指定し、そのホスト名を、ドメインネームサービス (Domain Name Service、DNS) を使用して IP アドレスに解決します。	サーバー SP CMM
	Serial Port	内部および外部のシリアルポートのボーレートを表示および編集します。	サーバー SP CMM
	Clock	Oracle ILOM クロックの時間を表示および手動で編集したり、Oracle ILOM クロックを NTP サーバーと同期させたりします。	サーバー SP CMM
	Timezone	サービスプロセッサによって表示されるタイムスタンプが、ほかの場所 (Oracle Solaris オペレーティングシステムなど) で作成されるログと対応するように、特定のタイムゾーンを指定します。	サーバー SP CMM
	Syslog	syslog メッセージの送信先となるサーバーのアドレスを設定します。	サーバー SP CMM
	SMTP Client	警告の電子メール通知の送信に使用する SMTP クライアントの状態を設定します。	サーバー SP CMM
	Policy	電源投入ポリシーなど、システムの動作を制御する設定を有効または無効にします。	サーバー SP CMM
User Management			
	Active Sessions	現在 Oracle ILOM にログインしているユーザーと、ユーザーが開始したセッションの種類を表示します。	サーバー SP CMM
	User Accounts	ローカルの Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、削除、または変更します。	サーバー SP CMM
	LDAP	LDAP ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを設定します。	サーバー SP CMM
	LDAP/SSL	Secure Socket Layer (SSL) テクノロジによって実現される高度なセキュリティー設定を使用して、LDAP ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを設定します。	サーバー SP CMM
	RADIUS	RADIUS ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを設定します。	サーバー SP CMM

第 1 レベルのタブ	第 2 および第 3 レベルのタブ	可能な操作	適用対象
	Active Directory	Active Directory ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを設定します。	サーバー SP CMM
Remote Control			
	Redirection	使用しているローカルマシンにシステムコンソールをリダイレクトすることにより、ホストをリモート管理します。	サーバー SP CMM
	KVMS	キーボード、ビデオ、マウス、またはストレージデバイスのリモート管理状態を有効または無効にします。	サーバー SP
	Remote Power Control	電源の状態 (「Immediate Power Off」、「Graceful Shutdown and Power Off」、「Power On」、「Power Cycle」、または「Reset」) を選択します。	サーバー SP CMM
	Diagnostics	x64 プロセッサベースのシステムまたは SPARC プロセッサベースのシステムの診断を有効または無効にします。	サーバー SP
	Host Control	ホスト制御情報を表示および設定します。次のシステム電源投入時の起動デバイスを設定します。	サーバー SP
Maintenance			
	Firmware Upgrade	Oracle ILOM のファームウェアのアップグレードを取得する処理を開始します。	サーバー SP CMM
	Backup/Restore	サービスプロセッサの設定を安全な方法でリモートホストまたは取り外し可能なストレージデバイスにバックアップしたり復元したります。	サーバー SP CMM
	Reset SP	サービスプロセッサをリセットします。	サーバー SP
	Configuration Management	サービスプロセッサの設定データを管理します。	サーバー SP CMM
	Reset Components	シャーシ監視モジュールおよびサービスプロセッサをリセットします。	CMM
	Snapshot	環境、ログ、エラー、および FRUID に関するデータを収集して USB メモリや外部ホストに送信したり (CLI を使用)、ダウンロードされたファイルとして保存したりします。	サーバー SP CMM

ジャンプリンク

Oracle ILOM 3.0.3 から、いくつかの Web ページにジャンプリンクが追加され、ページ内のサブセクションに簡単に移動できるようになりました。次の図に、ジャンプリンクを含む Oracle ILOM Web ページの例を示します。



Oracle ILOM に対するログインとログアウトおよびバナーメッセージの表示 (Web)

説明	リンク
Oracle ILOM にログインするための要件の確認	• 18 ページの「初回ログインの前に」
デフォルトの root ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインする手順	• 19 ページの「root ユーザーアカウントを使用してログインする (Web)」
ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインする手順	• 20 ページの「ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインする (Web)」
Oracle ILOM からログアウトする手順	• 21 ページの「Oracle ILOM からログアウトする (Web)」
Oracle ILOM の「Login」ページに表示するバナーメッセージを設定する手順	• 22 ページの「ログインページにバナーメッセージを表示する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、Oracle ILOM へのログイン
- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、必須の設定作業 (Web)
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 − CLI 手順』、Oracle ILOM へのログイン
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 − CLI 手順』、バナーメッセージ
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 − 概念』、バナーメッセージ

初回ログインの前に

このセクションの手順を開始する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- システム (サーバーまたは CMM) への物理ネットワーク管理接続が確立されていることを確認します。システムの SER MGT または NET MGT ポートに物理接続を確立する方法については、サーバーまたは CMM に付属のインストールガイドを参照してください。

  このセクションのログイン手順は、物理ネットワーク接続を介して Oracle ILOM Web インタフェースにログインしていると仮定しています。

注 – または、ローカル相互接続インタフェース接続をサポートする Oracle Sun サーバーの場合は、ホストオペレーティングシステムから ILOM に直接接続することができます。ローカル相互接続インタフェース接続を使用して ILOM に接続する方法の詳細は、40 ページの「ローカル相互接続インタフェースを設定する (Web)」を参照してください。

- サーバー SP または CMM ネットワークアドレスを取得します。

  Oracle ILOM は、デフォルトで、サーバー SP または CMM の IPv4 または IPv6 アドレスを自動的に取得し割り当てようとします。サーバー SP または CMM に割り当てられたデフォルトの IP アドレスを調べるには、サーバー SP または CMM へのローカルシリアル管理接続を確立し、/network (または /network/ipv6) プロパティーを表示します。

  Oracle ILOM へのローカルシリアル管理接続の確立方法の詳細は、『Oracle ILOM 3.0 クイックスタートガイド』または Sun サーバーまたは Sun ブレードシャーシシステムに付属のマニュアルを参照してください。

  サーバー SP または CMM に割り当てられたデフォルトの IP アドレスの変更の詳細は、24 ページの「ネットワーク設定を構成する (Web)」を参照してください。

- Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得します。

  Oracle ILOM を初めて設定する場合は、デフォルトの **root** アカウントと **changeme** パスワードを使用してログインしてください。システムを設定した後は、各 Oracle ILOM ユーザーに新しいユーザーアカウントを作成することを強く推奨します。ユーザーアカウントの設定の詳細は、46 ページの「ユーザーアカウントを設定する (Web)」を参照してください。

▼ root ユーザーアカウントを使用してログインする (Web)

1. Web ブラウザのアドレスバーに、サーバー SP または CMM のネットワークアドレスを入力します。

   次に例を示します。

   - IPv4 ネットワークアドレスの例

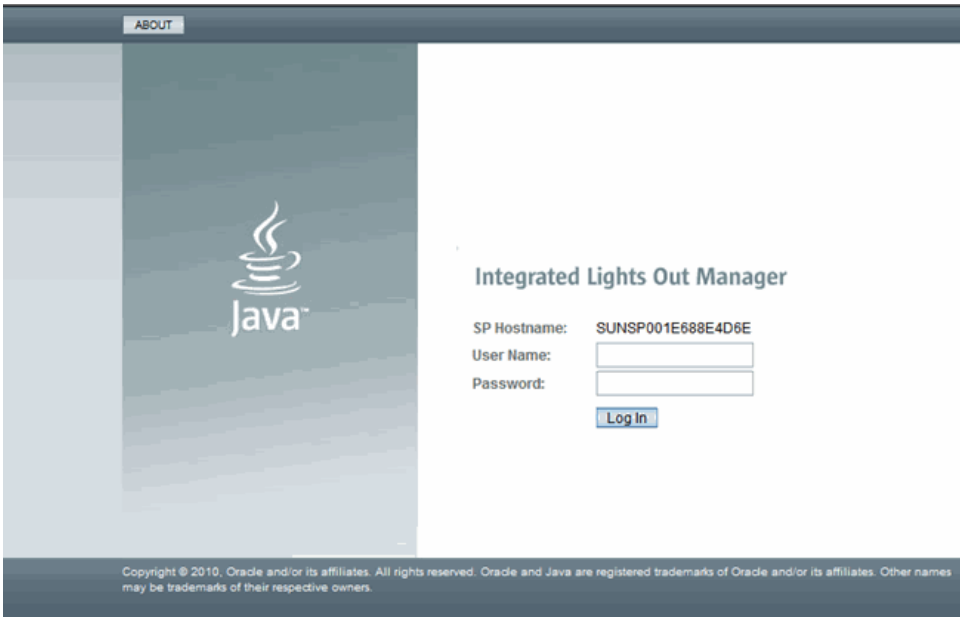
     `http://10.8.183.106`

   - IPv6 ネットワークアドレスの例

     `http://[fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64]`

   Oracle ILOM で許可されるネットワークアドレスの詳細は、4 ページの「Oracle ILOM で許可されるネットワークアドレス」を参照してください。Oracle ILOM の接続の問題の診断については、151 ページの「IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断」を参照してください。

   Web インタフェースのログインページが表示されます。



2. `root` ユーザー名とパスワードを入力します。たとえば、Oracle ILOM に付属のデフォルトの `root` ユーザー名とパスワードは次のとおりです。

   ユーザー名: **`root`**

   パスワード: **`changeme`**

3. 「Log In」をクリックします。

   Web インタフェースの「Version」ページが表示されます。

▼ ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインする (Web)

1. Web ブラウザのアドレスバーに、サーバー SP または CMM のネットワークアドレスを入力します。

   次に例を示します。

   - IPv4 ネットワークアドレスの例

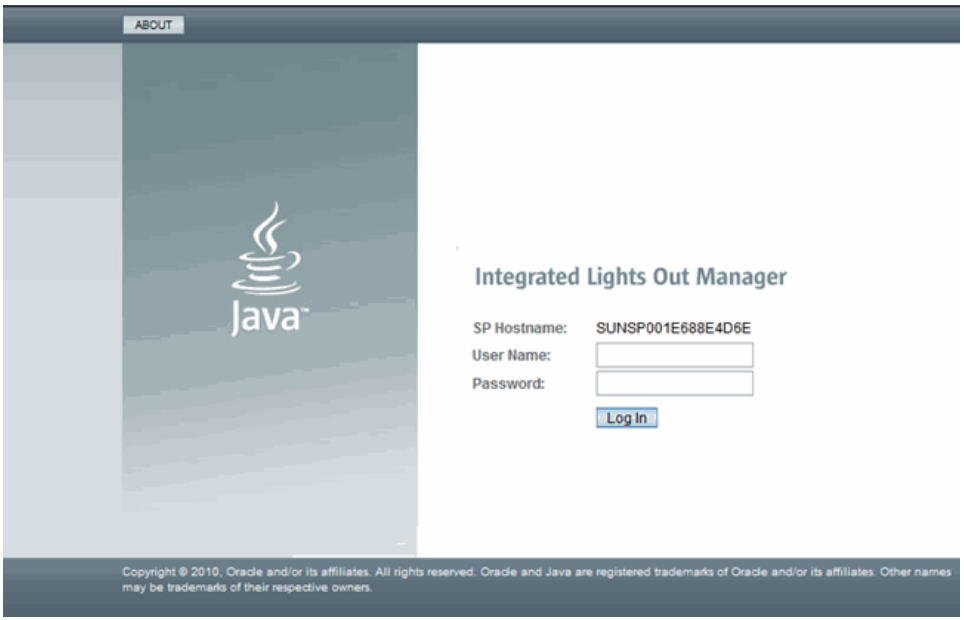
     `http://10.8.183.106`

   - IPv6 ネットワークアドレスの例

     `http://[fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64]`

   Oracle ILOM で許可されるネットワークアドレスの詳細は、4 ページの「Oracle ILOM で許可されるネットワークアドレス」を参照してください。Oracle ILOM の接続の問題の診断については、151 ページの「IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断」を参照してください。

   Web インタフェースのログインページが表示されます。



2. Oracle ILOM のユーザー名およびパスワードを入力します。
3. 「Log In」をクリックします。

   Oracle ILOM の Web インタフェースで、「Version」ページが表示されます。

▼ Oracle ILOM からログアウトする (Web)

- ILOM の Web インタフェースで、「Log Out」ボタンをクリックします。

  「Log Out (ログアウト)」ボタンは Web インタフェースの右上の端にあります。Web ブラウザの「Log Out」ボタンを使用して Oracle ILOM を終了しないでください。

▼ ログインページにバナーメッセージを表示する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM でバナーメッセージを設定するには、Admin (a) の役割が必要です。
- サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以降が実行されている必要があります。

バナーメッセージを設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP Web インタフェースまたは Oracle CMM ILOM Web インタフェースにログインします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースで、「System Information」-->「Banner Messages」をクリックします。
3. 「Banner Message」ページで、次の手順を実行します。

タスク	指示書
「Login」ページに表示されるバナーメッセージを作成する	「Connect Message」テキストボックスにメッセージを入力します。
Oracle ILOM へのユーザーログイン後のダイアログボックスに表示されるバナーメッセージを作成する	「Login Message」テキストボックスにメッセージを入力します。

4. 「Message Acceptance」チェックボックスをクリックして、システムでバナーメッセージを表示できるようにします。
5. 「Save (保存)」をクリックします。

ネットワーク、Secure Shell、ローカル相互接続を設定する (Web)

説明	リンク
IP のネットワークプロパティー、ホスト名、DNS、シリアルポート出力、HTTP Web アクセスを設定する。	• 24 ページの「ネットワーク設定を構成する (Web)」
Secure Shell の設定を管理する。	• 38 ページの「Secure Shell の設定」
Oracle ILOM でローカル相互接続インタフェース設定を管理する。	• 42 ページの「ローカル相互接続インタフェースを設定する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、ネットワーク管理接続の確立
- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、デフォルトのネットワーク設定の変更
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、ネットワーク通信設定
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、シリアルポートコンソール出力の切り替え
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、ネットワーク設定の構成
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、Secure Shell 設定の構成
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、シリアルポートの共有設定
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、ネットワーク設定の構成
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、ローカル相互接続インタフェースの設定

ネットワーク設定を構成する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM のネットワーク設定の管理要件を特定する	• 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM
IPv4 または IPv6 設定を管理およびテストする	• 26 ページの「IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する (Web)」 • 28 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する (Web)」 • 31 ページの「IPv4 または IPv6 のネットワーク設定をテストする (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM
ホスト名、DNS、シリアルポート設定を管理する	• 32 ページの「ホスト名とシステム識別子を割り当てる (Web)」 • 33 ページの「DNS の設定を表示および構成する (Web)」 • 34 ページの「シリアルポートのボーレートを表示および設定する (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM
x86 ホストでのシリアルポート共有設定を管理する	• 35 ページの「x86 ホストのシリアルポート所有者を設定する (Web)」	• x86 サーバー SP
HTTP および HTTPS 設定を管理し、SSL 証明書をアップロードする	• 36 ページの「HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする (Web)」 • 37 ページの「SSL 証明書をアップロードする (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

ネットワーク設定要件 (Web)

Oracle ILOM のネットワーク設定を表示または構成する前に、次の情報について確認してください。

ネットワーク環境	始める前に
IPv4 のみ	• ネットワーク上の Oracle ILOM を見つけやすくするため、Oracle ILOM には同じ IP アドレスを常に割り当てるようにしてください。Oracle ILOM は、デフォルトで IPv4 ネットワーク設定を DHCP を使用して取得しようとします。
IPv4/IPv6 デュアルスタック	• Oracle ILOM には、IPv4 DHCP および IPv6 ステートレスデフォルトネットワーク設定が標準装備されています。 • サーバーまたは CMM に Oracle ILOM ファームウェア 3.0.12 以降がインストールされていることを確認します。 • IPv4 ネットワーク環境または IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で Oracle ILOM を動作させるには、IPv4 ネットワークの状態を常に有効にする必要があります。 • IPv6 のステートレス自動構成を使用する場合、Oracle ILOM (3.0.12 以降) では、ネットワークルーターを IPv6 用に設定する必要があります。 • DHCPv6 自動構成オプションのために、Oracle ILOM (3.0.14 以降) ではネットワーク DHCPv6 サーバーがデバイスの IPv6 アドレスおよび DNS 情報を提供する必要があります。 **注**: DHCP と DHCPv6 は別々のプロトコルです。デュアルスタックネットワーク環境では、DHCP と DHCPv6 が次の用に動作します。(1) DHCPv6 サーバーは、IPv6 アドレスをネットワークノードに提供することができます。ネットワークノードは、常に IPv6 プロトコルを使用して DHCPv6 サーバーと通信します。(2) DHCP サーバーは、IPv4 アドレスをネットワークノードに提供することができます。ネットワークノードは、常に IPv4 プロトコルを使用して DHCP サーバーと通信します。 • DHCP と DHCPv6 の自動構成を行うためには、DNS 情報を IPv6 DHCP サーバーと IPv4 DHCP サーバーの両方からではなくそのどちらかから受信するようにします。 Oracle ILOM の DNS ネームサーバーを手動で設定できます。詳細は、33 ページの「DNS の設定を表示および構成する (Web)」を参照してください。 **注 –** Oracle ILOM での IPv6 設定をサポートしていないレガシー Sun プラットフォームサーバーのリストについては、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』の「IPv6 がサポートされていない旧バージョンの Sun サーバープラットフォーム」を参照してください。
このセクションで説明するネットワーク設定	• サーバー SP または CMM のネットワークプロパティーまたはオプションを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

▼ IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する (Web)

始める前に

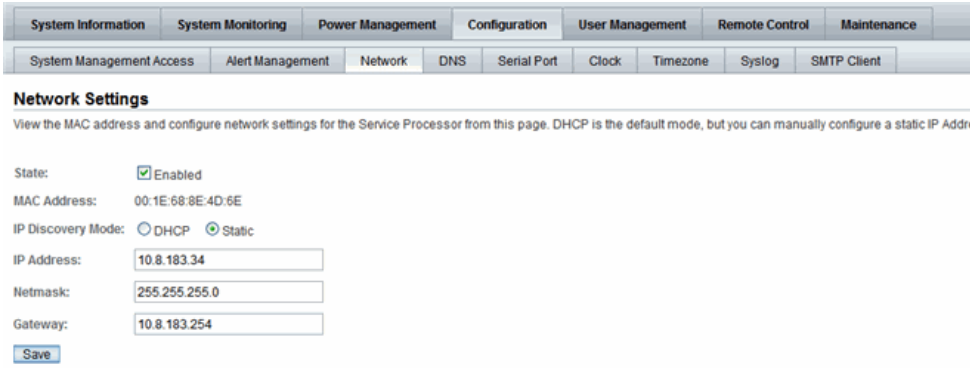
- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

注 – この手順で、Oracle ILOM を IPv4 のみのネットワーク環境で動作するように設定する方法を説明します。Oracle ILOM を IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で動作するように設定する場合の手順については、28 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する (Web)」を参照してください。

IPv4 ネットワーク設定を表示し、構成するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Configuration」-->「Network」をクリックします。**

   「Network Settings」ページが表示されます。
3. **DHCP を使用して IP アドレスを自動的に割り当てることも、アドレスを手動で割り当てることを選択することもできます。**
   - IP アドレスを自動的に取得するには、「DHCP」の横にあるラジオボタンをクリックします。次の図は例を示しています。



- 静的 IP アドレスを手動で設定するには、「Network Settings」ページに情報を入力します。次の表の説明を参照してください。

アイテム	説明
State	ネットワークの状態を有効にするには、チェックボックスをクリックします。
MAC Address	SP のメディアアクセス制御 (Media Access Control、MAC) アドレスは出荷時に設定されています。MAC アドレスは、各ネットワークデバイスに固有のハードウェアアドレスです。MAC アドレスは、SP または CMM のラベル、出荷キットに含まれている Customer Information Sheet、BIOS 設定画面で確認できます。
IP Discovery Mode	IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイを手動で割り当てるには、「Static」ラジオボタンをクリックします。
IP Address	サーバーの IP アドレスを入力します。IP アドレスは、システムを TCP/IP ネットワーク上で識別する一意の名前です。
Netmask	SP が属するネットワークのサブネットマスクを入力します。
Gateway	SP のゲートウェイアクセスアドレスを入力します。

4. **「Save」をクリックして設定を有効にします。**

   「Save」をクリックするまで、設定は「待ち状態」とみなされます。IP アドレスを変更すると、Oracle ILOM セッションが終了します。

   Web ブラウザを閉じるように要求するプロンプトが表示されます。

5. **新しい IP アドレスを使用して、Oracle ILOM に再度ログインします。**

注 – ネットワーク設定を変更した場合には、新しいブラウザセッションでもう一度ログインし直す必要がある場合があります。

▼ IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する (Web)

始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

注 – ここでは、Oracle ILOM を IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で動作するように設定する場合の手順について説明します。Oracle ILOM を、IPv4 のみのネットワーク環境で動作するよう設定する場合は、26 ページの「IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する (Web)」を参照してください。

IPv4 と IPv6 のデュアルスタックのネットワーク設定を表示し、構成するには、次の手順に従います。

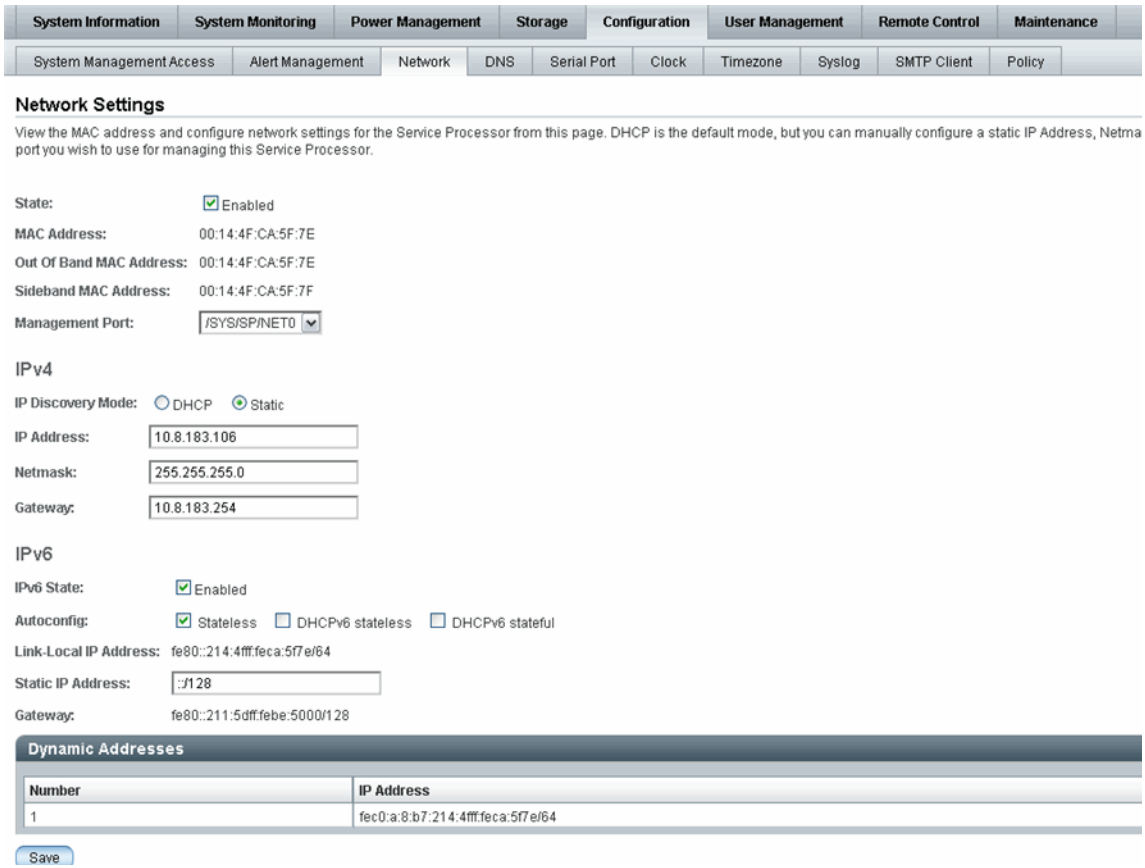
1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Network」タブにある IPv4 と IPv6 のネットワーク設定にナビゲートします。**

   たとえば、次のように表示されます。

   - サーバー SP で、「Configuration」-->「Network」をクリックします。
   - CMM では次のようにします。
     - 左区画でブレード SP を選択し、右区画で「Configuration」-->「Network」を選択します。

注 – Oracle ILOM Web インタフェースでは、IPv4 と IPv6 のデュアルスタック設定を CMM レベルで編集できません。IPv4 と IPv6 のデュアルスタックプロパティーを CMM レベルで編集するには、Oracle ILOM CLI を使用する必要があります。詳しくは、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – CLI 手順ガイド』を参照してください。

次の図に、IPv4 と IPv6 の Oracle ILOM SP ネットワーク設定を示します。



3. **ネットワークの `State` が有効になっていることを確認します。**

注 – IPv4 および IPv6 の両方に対して、ネットワークの「`State`」の設定はデフォルトで有効になります。必要に応じて、IPv6 のネットワークの「`State`」を無効にする (選択解除する) こともできます。ただし、Oracle ILOM が IPv4 ネットワーク環境または IPv4 と IPv6 のデュアルスタックネットワーク環境で動作するには、IPv4 のネットワークの「`State`」は常に有効にしておく必要があります。

---

4. **静的 IPv4 アドレスを手動で設定するには、次の手順を実行します。**

手順	説明
a.	IPv4 の「Static」ラジオボタンを有効にします。
b.	IP アドレスのテキストボックスにデバイスの IP アドレスを入力します。
c.	デバイスが属するネットワークのサブネットマスクを入力します。
d.	デバイスのゲートウェイアクセスのアドレスを入力します。

5. **IPv4 アドレスが DHCP で自動的に割り当てられるようにするには、IPv4 DHCP のラジオボタンを選択します。**

6. **IPv6 アドレスを手動で設定するには、デバイスの IP アドレスを「IPv6 address」テキストボックスに入力します。**

   IPv6 の静的 IP とネットマスクを指定する入力パラメータは次のとおりです。

   <*IPv6_address*>/<サブネットマスク長 (ビット単位)>

   たとえば、次のように表示されます。

   `fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64`

注 – IPv6 では、1 つのデバイスに対する複数の IP アドレスの割り当てがサポートされます。したがって、Oracle ILOM で 1 つの静的 IPv6 アドレスを手動で設定し、必要に応じて Oracle ILOM で 1 つ以上の IPv6 自動構成オプションを有効にすることもできます。

---

7. **1 つ以上の IPv6 自動構成オプションを有効にするには、次の中から適切なオプションを選択します。**

IPv6 自動構成オプション	説明
`Stateless` (デフォルトで有効)	有効にすると、「`Stateless`」自動構成オプションが実行され、ネットワークの IPv6 ルーターからデバイスの IPv6 ステートレスアドレスが取得されます。
`DHCPv6 Stateless`	有効にすると、`DHCPv6 Stateless` 自動構成オプションが実行され、ネットワークの DHCPv6 サーバーからデバイスの DNS 情報が取得されます。 **注 –**「`DHCPv6 Stateless`」自動構成オプションは 3.0.14 以降の Oracle ILOM で使用できます。
DHCPv6 Stateful	有効にすると、`DHCPv6 Stateful` 自動構成オプションが実行され、ネットワークの DHCPv6 サーバーからデバイスの IPv6 アドレスと DNS 情報が取得されます。 **注 –**「`DHCPv6 Stateful`」自動構成オプションは 3.0.14 以降の Oracle ILOM で使用できます。

注 – Oracle ILOM 3.0.14 以降では、「`DHCPv6 Stateless`」または「`DHCPv6 Stateful`」のオプションを有効にしたとき、「`Stateless`」の自動構成オプションも同時に有効にすることが可能です。ただし、`DHCPv6 Stateless` と `DHCPv6 Stateful` の自動構成オプションを有効にして同時に動作させることはできません。

注 –「`DHCPv6 Stateful`」または「`DHCPv6 Stateless`」のいずれかの自動構成オプションを有効にした場合、Oracle ILOM の「Network Settings」ページで、DHCP 情報を取得するために最後に使用された、DHCPv6 サーバーの DHCP 固有 ID が識別されます。

---

8. **「`Save`」をクリックして変更を適用します。**

   「Save」をクリックするまで、ネットワーク設定に対する変更はすべて Oracle ILOM セッション内で保留中であるとみなされます。

注 – デバイス (SP または CMM) の静的 IP アドレスを変更すると、デバイスに対するすべてのアクティブな Oracle ILOM セッションが終了します。ブラウザセッションを閉じるように促すメッセージが表示されます。新しく割り当てられた静的 IP アドレスを使用して Oracle ILOM にログインし直す必要があります。

注 – IPv6 の自動構成オプションから取得されたデバイスの IPv6 アドレスは、デバイスとのアクティブな Oracle ILOM セッションには影響しません。「Network」タブで、新しく取得された、自動構成されたアドレスを検証できます。

---

9. **Oracle ILOM から IPv4 または IPv6 ネットワーク設定をテストするには、ネットワークテストツール (Ping または Ping6) を使用します。詳細は、**31 ページの「IPv4 または IPv6 のネットワーク設定をテストする (Web)」**を参照してください。**

▼ IPv4 または IPv6 のネットワーク設定をテストする (Web)

始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

IPv4 または IPv6 の設定をテストするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **Web インタフェースページで、「Configuration」-->「Network」を選択します。**

3. 「Network Settings」ページで、ページの下部に表示されている「Tools」ボタンをクリックします。

「Test Tools」ダイアログが表示されます。

4. 「Test Tools」ダイアログで、次の情報を指定します。

フィールド	説明
Test Type	• IPv4 ネットワーク設定をテストするには、「Ping」を選択します。 または • IPv6 ネットワーク設定をテストするには、「Ping6」を選択します。
Destination	ネットワーク上のデバイスの IP アドレスを入力します。テストはネットワーク上のこの宛先に送信されます。

▼ ホスト名とシステム識別子を割り当てる (Web)

始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

ホスト名とシステム識別子を割り当てるには、次の手順に従います。

1. ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「System Information」-->「Identification Information」をクリックします。

   「Identification Information」ページが表示されます。
3. 「SP host name」フィールドで、SP ホスト名を入力します。

   ホスト名は最大 60 文字まで入力できます。
4. 「SP System Identifier」フィールドで、システムを識別するために使用するテキストを入力します。

   システム識別子には、標準的なキーボードの任意のキーを使用したテキスト文字列を使用できます。ただし、引用符は除きます。
5. 「SP System Contact」フィールドで、連絡先の担当者の名前を入力します。

   システムの連絡先には、標準的なキーボードの任意のキーを使用したテキスト文字列を使用できます。ただし、引用符は除きます。

6. 「SP System Location」フィールドで、システムの物理的な場所を記述するテキストを入力します。

   システムの場所には、標準的なキーボードの任意のキーを使用したテキスト文字列を使用できます。ただし、引用符は除きます。

7. 「Save」をクリックして設定を有効にします。

▼ DNS の設定を表示および構成する (Web)

始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

DNS 設定を表示し、構成するには、次の手順に従います。

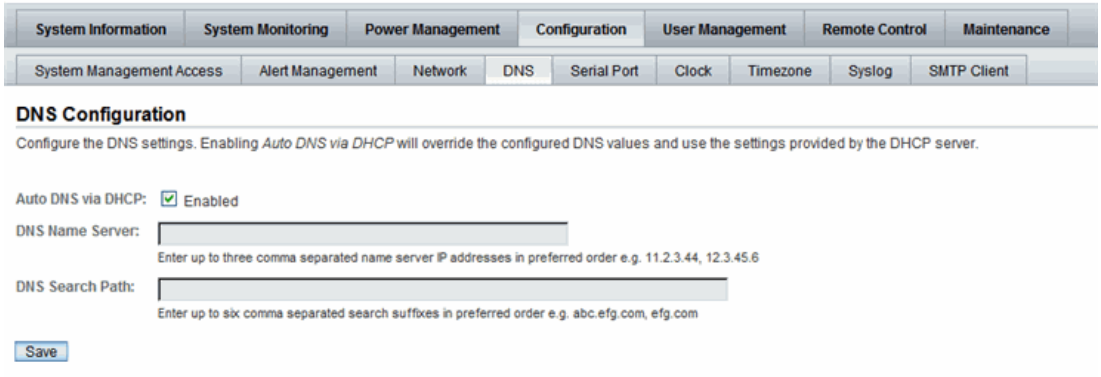
1. ILOM SP Web インタフェースまたは CMM ILOM Web インタフェースにログインします。

2. 「Configuration」-->「DNS」をクリックします。

   「DNS Configuration」ページが表示されます。

3. DHCP で DNS ネームサーバーおよび検索パスを自動的に割り当てることも、アドレスを手動で割り当てることもできます。

   - アドレスを自動的に割り当てるには、「Auto DNS via DHCP」の隣のチェックボックスを有効にします。
   - アドレスを手動で割り当てるには、「DNS Name Server」および「DNS Search Path」テキストボックスに情報を入力します。次の図は例を示しています。



▼ シリアルポートのボーレートを表示および設定する (Web)

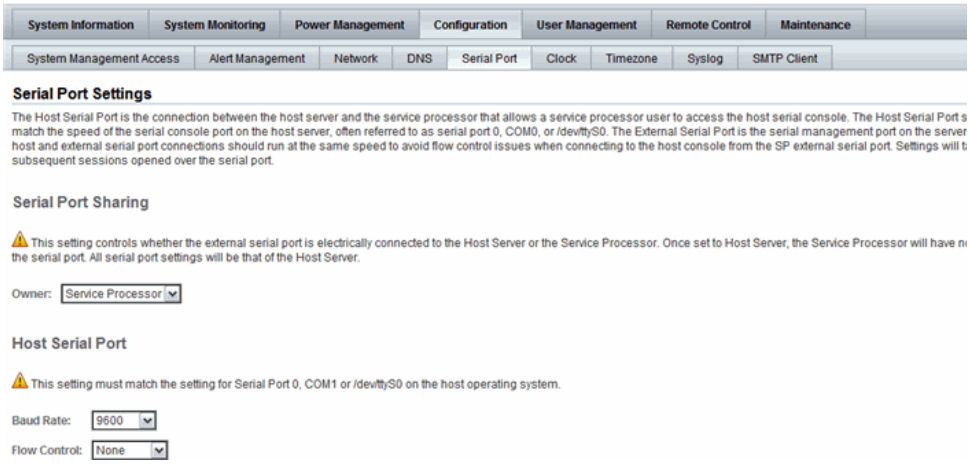
始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

シリアルポートのボーレートを表示し、設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「Configuration」-->「Serial Port」をクリックします。

   「シリアルポート設定 (Serial Port Settings)」ページが表示されます。



3. 外部シリアルポートおよび内部ホストシリアルポートのボーレートを表示します。
4. 「Host Serial Port Baud Rate」ドロップダウンリストから内部シリアルポートのボーレートを選択します。

   x64 システムの場合、この設定は、ホストオペレーティングシステムのシリアルポート 0、COM 1、または /dev/ttyS0 の設定と一致させてください。

   このボーレートの値は、BIOS のシリアルリダイレクト機能で指定されている速度 (デフォルトは 9600 ボー) と、ブートローダおよびオペレーティングシステムの設定で使用されている速度に一致させてください。

   Oracle ILOM を使用してシステムコンソールに接続するには、デフォルトのホストシリアル設定 (9600 ボー、8N1 (データビット 8、パリティーなし、ストップビット 1)、フロー制御なし) を設定する必要があります。

5. 「External Serial Port Baud Rate」ドロップダウンリストから外部シリアルポートのボーレートを選択します。

   この設定は、Oracle Sun サーバーの RJ-45 シリアルポートのボーレートと一致させてください。

6. 「Save」をクリックして変更を有効にします。

▼ x86 ホストのシリアルポート所有者を設定する (Web)

始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

注 – 使用しているサーバーでシリアルポートの共有がサポートされているかどうかを確認するには、プラットフォームの Oracle ILOM 補足マニュアルまたは管理マニュアルを参照してください。

注意 – SP のネットワーク管理接続を設定してから、シリアルポートの所有者をホストサーバーに切り替えるようにしてください。サーバー SP のネットワーク管理接続が設定されていない状態で、シリアルポート所有者を SP からホストサーバーに変更した場合、ILOM CLI または Web インタフェースを使用して SP をシリアルポート所有者に戻すことはできません。シリアルポートの所有者を SP に戻すには、サーバー上のシリアル管理ポート経由での ILOM へのアクセスを回復する必要があります。使用しているサーバー上のシリアル管理 (SER MGT) ポート経由の ILOM へのアクセスを回復する方法の詳細は、そのサーバーに付属しているプラットフォームのドキュメントを参照してください。

ホストシリアルポート所有者を x86 プラットフォームサーバーで設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。

2. 「Configuration」-->「Serial Port」を選択します。

   「シリアルポート設定 (Serial Port Settings)」ページが表示されます。

3. 「Serial Port Settings」ページで、シリアルポートの所有者として「`Host Server`」を選択します。

注 – サービスプロセッサがデフォルトのシリアルポートの所有者のプロパティー値です。

---

4. 変更を有効にするには、「Save」をクリックします。

注 –「Serial Port Owner」を変更してこの変更を保存すると、「`Can not change serial settings - the serial console in use.`」というエラーが発生する可能性があります。このエラーは、シリアルポート上にアクティブなセッションが存在する場合に発生するもので、無視してかまいません。エラーにかかわらず、ポート所有者の変更およびポート速度の変更は Oracle ILOM で有効になります。

---

5. シリアルホストをサーバーに接続します。

   サーバーにデバイスを接続する方法の詳細については、サーバーに付属している、プラットフォームのマニュアルを参照してください。

▼ HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする (Web)

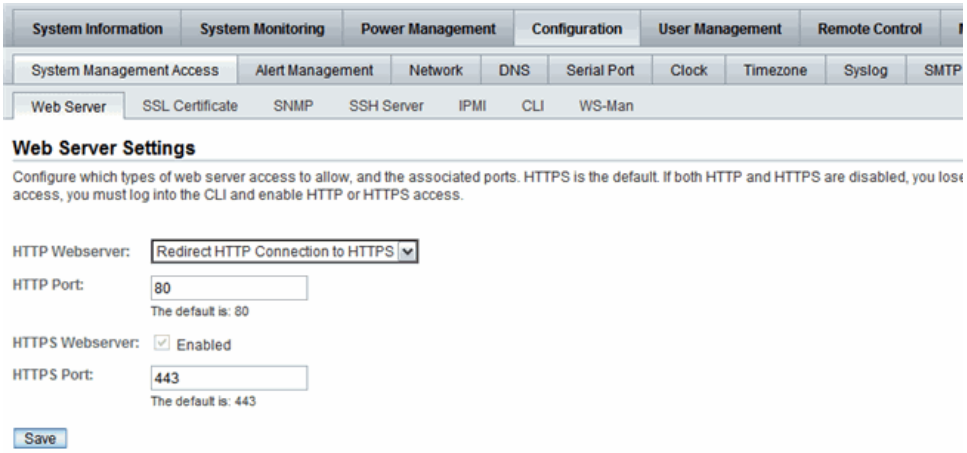
始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

HTTP または HTTPS Web アクセスを有効にするには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「Configuration」-->「System Management Access」-->「Web Server」の順にクリックします。

   「Web Server Settings」ページが表示されます。



3. **次のいずれかの操作を実行します。**
   - HTTP を有効にするには、「HTTP Webserver:」ドロップダウンリストから「Enabled」を選択します。
   - 自動的に HTTP 接続を HTTPS にリダイレクトするには、「HTTP Webserver:」ドロップダウンリストから「Redirect HTTP Connection to HTTPS」を選択します。
   - HTTP を無効にするには、「HTTP Webserver:」ドロップダウンリストから「Disabled」を選択します。
   - HTTP を有効にするには、「HTTPS Web Server Enabled」のチェックボックスを選択します。

     HTTPS Web サーバーはデフォルトで有効になっています。

注 – HTTP を無効にする、または「Redirect HTTP Connection to HTTPS」を選択してから、HTTPS を無効にすると、Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスできなくなります。アクセスを回復するには、『Oracle ILOM 3.0 CLI 手順ガイド』の「HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする」の説明に従って、CLI の `/SP/services/http` コマンドまたは `/SP/services/https` コマンドを使用します。

---

4. **HTTP または HTTPS ポート番号を割り当てます。**
5. **「Save」をクリックします。**

▼ SSL 証明書をアップロードする (Web)

始める前に

- 25 ページの「ネットワーク設定要件 (Web)」を参照してください。

注 – Oracle ILOM では、HTTPS アクセスを行うためのデフォルトの SSL 証明書と自己署名鍵が用意されています。任意で、別の SSL 証明書とこれに一致する非公開鍵をアップロードできます。新しい証明書と鍵が、ネットワークまたはローカルのファイルシステムからアクセスできることを確認してください。

SSL 証明書をアップロードするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Configuration」-->「System Management Access」-->「SSL Certificate」の順にクリックします。**

   「SSL Certificate Upload (SSL 証明書アップロード)」ページが表示されます。

3. **新しい SSL 証明書のファイル名を入力するか、または「Browse」ボタンをクリックして新しい SSL 証明書を検索します。**

   ファイル名には拡張子 .pem が付いています。サービスプロセッサはパスフレーズ方式の暗号化証明書をサポートしていません。

4. **「Upload (アップロード)」ボタンをクリックし、選択した SSL 証明書を取得します。**

   「SSL Certificate Upload Status (SSL 証明書アップロード状況)」ダイアログボックスが表示されます。

5. **証明書と非公開鍵をアップロードしたら、「OK」ボタンをクリックして Oracle ILOM Web サーバーをリセットし、新しい SSL 証明書の使用を開始します。**

   新しい証明書を有効にするには、Oracle ILOM Web サーバーをリセットする必要があります。

Secure Shell の設定

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Secure Shell の設定の管理	• 38 ページの「SSH を有効または無効にする」 • 39 ページの「新しい SSH 鍵を生成する」 • 39 ページの「SSH サーバーを再起動する」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ SSH を有効または無効にする

始める前に

注 – Oracle ILOM では、SSH がデフォルトで有効になっています。

- Secure Shell (SSH) の設定を行うには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

SSH を有効または無効にするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**

2. 「Configuration」-->「System Management Access」-->「SSH Server」の順にクリックします。

   「SSH Server Settings」ページが表示されます。

3. SSH サーバーを有効にするには、「State」の横にある「Enabled」チェックボックスをクリックします。

4. 「Save」をクリックして設定を有効にします。

▼ 新しい SSH 鍵を生成する

始める前に

- Secure Shell (SSH) の設定を行うには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

新しい SSH 鍵を生成するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。

2. 「Configuration」-->「System Management Access」-->「SSH Server」の順にクリックします。

   「SSH Server Settings」ページが表示されます。

3. 「Generate RSA Key」ボタンをクリックして RSA を選択するか、「Generate DSA Key」ボタンをクリックして DSA を選択します。

   プロンプトが表示されたら、「OK」または「Cancel」をクリックします。

   新しい鍵は、新しい接続が確立されるとすぐに有効になります。

▼ SSH サーバーを再起動する

注 – SSH サーバーを再起動すると、既存の SSH 接続がすべて終了します。

SSH サーバーを再起動するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。

2. 「Configuration」-->「System Management Access」-->「SSH Server」の順にクリックします。

   「SSH Server Settings」ページが表示されます。

3. 「Restart」ボタンをクリックして SSH サーバーを再起動します。

ローカル相互接続インタフェースを設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ローカル相互接続インタフェースの設定要件を特定する	• 40 ページの「ローカル相互接続の設定要件」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー
ローカル相互接続インタフェースの設定	• 42 ページの「ローカル相互接続インタフェースを設定する (Web)」	

ローカル相互接続の設定要件

このセクションで説明する手順を実行する前に、次の要件を満たしている必要があります。

- Oracle ILOM SP とホスト OS の間のローカル相互接続インタフェースの使用について説明する概念を確認します。詳細については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』の「ローカル相互接続インタフェース: ホスト OS から ILOM へのローカル接続」を参照してください。
- Oracle ILOM のローカルホスト相互接続の設定に関する説明を確認します。詳細は、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』の「Oracle ILOM のローカルホスト相互接続の設定」を参照してください。
- サーバーで Oracle ILOM 3.0.12 以降のバージョンの Oracle ILOM が実行されていることを確認します。
- プラットフォームでローカル相互接続インタフェースがサポートされていることを確認します。プラットフォームサーバーの Oracle ILOM 補足マニュアルまたは管理マニュアルを参照してください。

注 – Oracle ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定は、CMM ではサポートされません。

- ローカル相互接続インタフェースを自動設定するには、Oracle ILOM の「Host Managed」(`hostmanaged`) 設定を有効にして (「`True`」に設定する)、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアをサーバーにインストールする必要があります。Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 ソフトウェアのインストールの詳細は、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。
- Oracle ILOM SP とホストオペレーティングシステムの間のローカル相互接続インタフェースを手動で設定するには、ILOM で「Host Managed」(`hostmanaged`) の設定を無効にする (「`False`」に設定する) 必要があります。また、ホストオペレーティングシステムで、その他の設定を行う必要があります。

  ローカル相互接続インタフェース上でホスト OS 接続ポイントを設定するためのガイドラインについては、153 ページの「ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動設定ガイドライン」を参照してください。
- ホストオペレーティングシステムで、Oracle ILOM SP から提供される内部 USB Ethernet デバイスがサポートされている必要があります。そのため、Oracle ILOM でローカル相互接続インタフェースを設定する前に、内部 USB Ethernet デバイスのドライバが、オペレーティングシステムのディストリビューションに含まれていたか、およびサーバーにインストールされているかを確認する必要があります。内部 USB Ethernet デバイスのドライバがオペレーティングシステムのディストリビューションによってインストールされていない場合は、使用中のオペレーティングシステム用のデバイスドライバを Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 ソフトウェアから取得できます。詳細は、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。
- Oracle ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定のネットワークパラメータの変更は、Oracle ILOM で変更を確定するまで保留中とみなされます。たとえば、Oracle ILOM CLI では、`commitpending=true` コマンドを発行して、`pendingipaddress` および `pendingipnetmask` を `network/interconnect` ターゲットの下に保存する必要があります。Oracle ILOM Web インタフェースでは、「Configure USB Ethernet Parameters」ダイアログで入力したネットワークパラメータの変更が、「`Save`」をクリックしたあとに確定されます。
- Oracle ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定を変更するためには、Admin (a) の役割の特権を持っている Oracle ILOM ユーザーアカウントが必要です。
- サーバーでサポートされているオペレーティングシステムを確認するには、プラットフォームサーバーのインストールマニュアルまたはオペレーティングシステムマニュアルを参照してください。

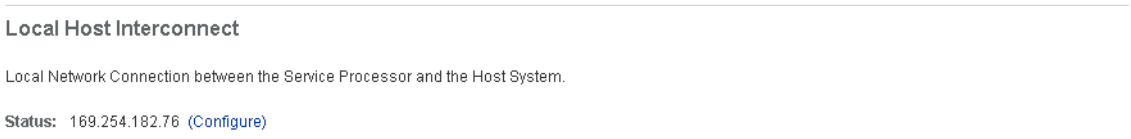
▼ ローカル相互接続インタフェースを設定する (Web)

始める前に

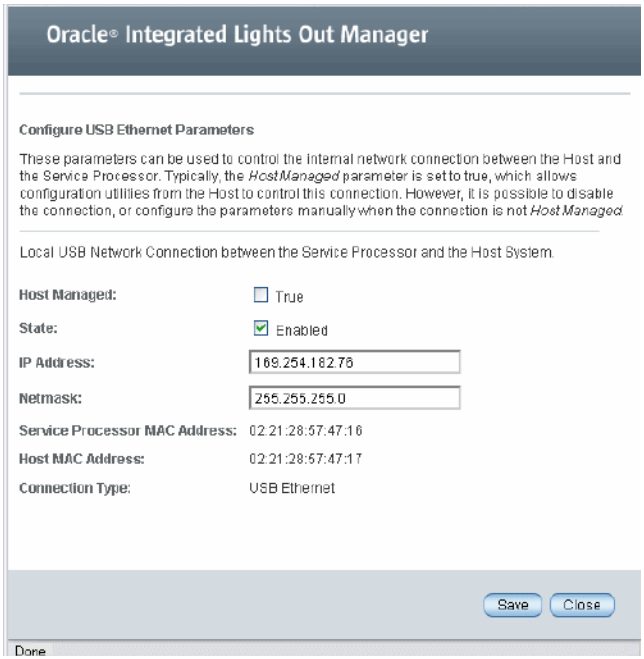
- 40 ページの「ローカル相互接続の設定要件」を参照してください。

Oracle ILOM Web インタフェースを使用してローカル相互接続インタフェースを設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースページで、「Configuration」-->「Network」を選択します。
3. 「Network Settings」ページで、「Local Host Interconnect」セクションが表示されるまでページをスクロールダウンし、「Configure」をクリックします。



USB Ethernet パラメータを設定するためのダイアログボックスが表示されます。



4. **ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェース上の接続ポイントに割り当てる設定を行う場合、次のいずれかの方法を選択できます。**
   - 「True Host Management」のチェックボックスを有効にして、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェースの各接続ポイントに自動的に割り当てます。
   - 「Host Managed」プロパティーの設定を有効にする場合は、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 (およびそれ以降の) をサーバーにインストールして、「Local Oracle ILOM Interconnect」を有効にするインストールのデフォルトを受け入れることも必要になります。詳細については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』のローカル ILOM 相互接続の設定に関するセクションを参照してください。
   - ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェースの各接続ポイントに手動で割り当てるには、「Configure USB Ethernet Parameters」ダイアログで次のプロパティーを指定します。

フィールド	手順と説明
Host Managed	「Host Managed」のチェックボックスを選択解除し、ホスト管理モードを無効にします。
State	「`State`」のチェックボックスをクリックし、Oracle ILOM SP とホスト OS の間のローカル相互接続モードを手動で有効にします。 「`State`」は、デフォルトでは無効になっています。
IP Address	Oracle ILOM では、ローカル相互接続インタフェースの Oracle ILOM SP 接続ポイントに対してデフォルトのルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスが用意されています。 このデフォルトの IPv4 アドレス (169.254.182.76) は、ネットワーク環境で競合が発生しないかぎり変更しないでください。
NetMask	Oracle ILOM では、ローカル相互接続インタフェースの Oracle ILOM SP 接続ポイントに対してデフォルトの IPv4 ネットマスクアドレスが用意されています。 このアドレスがネットワーク環境で競合しない場合は、このデフォルトの IPv4 ネットマスク (255.255.255.0) アドレスを変更しないでください。

注 – Oracle Hardware Management Pack ソフトウェアによって Oracle ILOM SP とホスト OS の間のローカル相互接続インタフェースが自動設定されないようにするには、「Host Managed」を選択解除する (無効にする) 必要があります。ローカル相互接続インタフェースを Oracle ILOM SP とホスト OS 間で使用しないようにするには、「Host Managed」チェックボックスと「State」チェックボックスを選択解除する (無効にする) 必要があります。

---

5. 「Configure USB Ethernet Parameters」ダイアログボックスで入力した変更を確定するには、「Save」をクリックします。

注 – Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアを使用せずに Oracle ILOM でローカル相互接続インタフェースを手動で設定することを選択した場合は、ホストオペレーティングシステムで追加の設定をいくつか実行する必要があります。このホスト OS での追加設定に関する一般的な詳細については、153 ページの「ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動設定ガイドライン」を参照してください。

ユーザーアカウントを管理する (Web)

説明	リンク
ユーザーアカウントを設定する	• 46 ページの「ユーザーアカウントを設定する (Web)」
SSH ユーザー鍵を設定する	• 52 ページの「SSH 鍵を設定する (Web)」
Active Directory を設定する	• 55 ページの「Active Directory を設定する (Web)」
LDAP を設定する	• 66 ページの「Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を設定する」
LDAP/SSL を設定する	• 68 ページの「LDAP/SSL の設定を構成する (Web)」
RADIUS を設定する	• 78 ページの「RADIUS を設定する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、ユーザーアカウントの追加
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 − 概念』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 − 概念』、ユーザーアカウント管理のガイドライン
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 − CLI 手順』、紛失したパスワードの復元
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 − CLI 手順』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、ユーザーアカウントの管理

ユーザーアカウントを設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM のシングルサインオンとユーザーセッション設定を管理する	• 46 ページの「シングルサインオンを設定する (Web)」 • 47 ページの「セッションタイムアウトを設定する (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM
Oracle ILOM ユーザーアカウントと役割を管理する	• 47 ページの「ユーザーアカウントを追加して役割を割り当てる (Web)」 • 50 ページの「ユーザーアカウントを変更する (Web)」 • 51 ページの「ユーザーアカウントを削除する (Web)」 • 52 ページの「ユーザーセッションを表示する (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ シングルサインオンを設定する (Web)

始める前に

- シングルサインオンのプロパティーを設定するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

シングルサインオンを有効または無効にするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「User Management」-->「User Accounts」をクリックします。**

   「User Account Settings」ページが表示されます。
3. **「Enable Single Sign On」の隣のチェックボックスをクリックして機能を有効にするか、チェックボックスの選択をクリアして機能を無効にします。**

▼ セッションタイムアウトを設定する (Web)

注 – セッションタイムアウトの設定は、Oracle ILOM セッションがアイドル状態になってからログアウトされるまでの時間を制御します。セッションタイムアウトの設定は、現在の Oracle ILOM セッションをログアウトしたあとは保持されません。Oracle ILOM Web インタフェースにログインするたびに、セッションタイムアウトをリセットする必要があります。

始める前に

- タイムアウトのプロパティーを設定するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

セッションタイムアウトのプロパティー値を設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「System Information」-->「Session Time-Out」をクリックします。

   「Session Time-Out」ページが表示されます。
3. 「Session Time-Out」ドロップダウンリストで、希望のタイムアウトの増分 (「15 mins」、「30 mins」、「1 hr」、「3 hrs」) を選択します。
4. 「Apply」をクリックして変更を保存します。

▼ ユーザーアカウントを追加して役割を割り当てる (Web)

始める前に

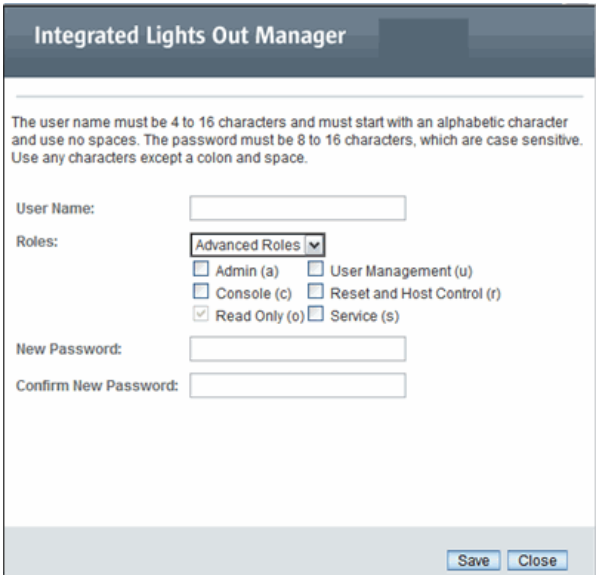
- ユーザー管理 (ユーザーアカウントおよび役割) のプロパティーを設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

ユーザーアカウントを追加して権限 (役割) を割り当てるには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「User Management」-->「User Accounts」をクリックします。

   「User Account Settings」ページが表示されます。
3. 「Users」テーブルで「Add」をクリックします。

   「Add User」ダイアログボックスが表示されます。



4. 次の情報を入力します。

   a. 「User Name」テキストボックスに、このユーザーアカウントの名前を指定します。

   b. 「Roles」ドロップダウンリストで、ユーザーの役割のプロファイル (Administrator、Operator、または Advanced) を選択します。

      以下で、ユーザーの役割のプロファイルを説明します。

ユーザーの役割の説明

ユーザーの役割のプロファイル	ユーザーの役割のプロファイルに付与されている権限 (Web)
Administrator	選択すると、Oracle ILOM Web インタフェースで Administrator の役割のプロファイルが自動的に、次のユーザーの役割の権限に読み取り及び書き込み権限を付与します。 • Admin (a) • User Management (u) • Console (c) • Reset and Host Control (r) • Read only (o) Administrator の役割のプロファイルがサポートする役割の定義については、この表の「付与されているユーザーの役割の権限」に一覧表示されているユーザーの役割の定義を参照してください。

ユーザーの役割の説明	
Operator	選択すると、Oracle ILOM Web インタフェースで Operator の役割のプロファイルが自動的に次のユーザーの役割の権限を付与します。 • Console (c) • Reset and Host Control (r) • Read only (o) Operator の役割のプロファイルが付与する役割の定義については、この表の「付与されるユーザーの役割の権限」に一覧表示されているユーザーの役割の定義を参照してください。
Advanced	選択すると、Oracle ILOM Web インタフェースの Advanced の役割のプロファイルが自動的に、Read Only (o) 権限をすべての Oracle 機能に付与し、対象となる次の役割の権限のすべて、あるいは任意の組み合わせを割り当てることができます。 • Admin (a) • User Management (u) • Console (c) • Reset and Host Control (r) • Services (s) Advanced の役割のプロファイルが付与する役割の定義については、この表の「付与されるユーザーの役割の権限」に一覧表示されているユーザーの役割の定義を参照してください。

ユーザーの役割	付与されるユーザーの役割の権限 (CLI)
(a)	Admin (a)。読み取りおよび書き込み権限が、すべての Oracle ILOM システム管理機能に付与されます。ただし、Admin が、さらにユーザーの User Management (u)、Reset and Host Control (r)、Console (c)、および Services (s) の役割を有効にする必要がある機能は除きます。
(u)	User Management (u)。すべての Oracle ILOM ユーザーアカウント管理機能の読み取りおよび書き込み権限が、ユーザーに付与されます。
(c)	Console (c)。リモートコンソール管理機能 (リモートコンソールのロックオプション、SP コンソール履歴ログの管理オプション、Oracle ILOM リモートコンソールの起動と使用、Oracle ILOM Storage Redirection CLI の使用) を実行できる読み取りおよび書き込み権限が、ユーザーに付与されます。
(r)	Reset and Host Control (r)。リモートホスト管理機能 (ホスト起動デバイスの制御、診断ユーティリティーの実行と設定、SP のリセット、CMM のリセット、コンポーネント管理サービスアクション、障害管理アクション、SPARC TPM 管理アクション、および SNMP MIB のダウンロード) を実行できる読み取りおよび書き込み権限が、ユーザーに付与されます。
(o)	Read Only (o)。読み取り専用の権限が、すべての ILOM 構成プロパティーの状態を表示するユーザーに付与されます。また、パスワードと、自身のユーザーアカウントに割り当てられたパスワードとセッションタイムアウトプロパティーのみを変更できる書き込み権限が、ユーザーに付与されます。
(s)	Services (s)。オンサイト保守が必要な場合に Oracle 保守エンジニアを支援するための読み取りおよび書き込み権限が、ユーザーに付与されます。

ユーザーの役割の説明	
(aucro)	これらすべてのユーザーの役割の組み合わせ (aucro) により、バックアップおよび復元設定機能を実行できる読み取りおよび書き込み権限がユーザーに付与されます。 **注 –** `aucro` は、Web インタフェースの Administrator ユーザーの役割のプロファイルと同じです。

c. **「New Password」テキストボックスに、このユーザーアカウントのパスワードを入力します。**

パスワードは、8 文字以上 16 文字以下にしてください。パスワードの大文字と小文字は区別されます。英数字のほか、セキュリティーを高めるため特殊文字も使用してください。コロン以外のすべての文字を使用できます。パスワードにはスペースは使用できません。

d. **「Confirm Password」テキストボックスに、「New Password」テキストボックスに入力したパスワードを再度入力します。**

e. **「Save」をクリックして、ユーザーアカウントを作成します。**

「User Account Settings」ページが更新されます。新しく作成されたユーザーアカウントが、「User Account Settings」ページに表示されます。

▼ ユーザーアカウントを変更する (Web)

注 – ユーザーのパスワード、およびユーザーのネットワーク権限とシリアル権限を変更することにより、ユーザーアカウントを変更できます。

始める前に

- ユーザー管理 (ユーザーアカウントおよび役割) のプロパティーを設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

ユーザーアカウントを変更するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**

2. **「User Management」-->「User Accounts」をクリックします。**

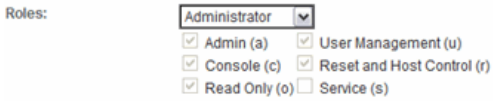
「User Account Settings」ページが表示されます。

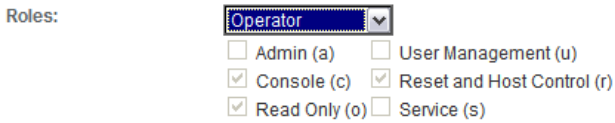
3. **「Users」テーブルで、変更するユーザーアカウントの隣のラジオボタンを有効にし、「Edit」をクリックします。**

割り当てられている役割を示すダイアログボックスが表示されます。

4. **ユーザーに割り当てられている役割を変更します。**

   「Advanced Role」が選択されている場合、ユーザーは 6 つの役割から自由に (複数) 選択できます。一方、「Administrator」または「Operator」を選択した場合、役割は自動的に割り当てられます。たとえば、次の図は、「Administrator」および「Operator」に対して割り当てられる役割を示しています。





5. **「New Password」テキストボックスに、このユーザーアカウントの新しいパスワードを入力します。**

   パスワードは 8 文字以上 16 文字以下で指定してください。パスワードの大文字と小文字は区別されます。英数字のほか、セキュリティーを高めるため特殊文字も使用してください。コロン以外のすべての文字を使用できます。パスワードにはスペースは使用できません。

6. **「Confirm New Password」テキストボックスに、「New Password」テキストボックスに入力したパスワードを再度入力します。**

7. **変更を有効にするには「Save」をクリックし、前の設定に戻すには「Close」をクリックします。**

   変更が反映された「User Account Settings」ページが再表示されます。

▼ ユーザーアカウントを削除する (Web)

始める前に

- ユーザー管理 (ユーザーアカウントおよび役割) のプロパティーを設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

ユーザーアカウントを削除するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**

2. **「User Management」-->「User Accounts」をクリックします。**

   「User Account Settings」ページが表示されます。

3. 削除するユーザーアカウントの隣のラジオボタンを有効にします。
4. 「Users」テーブルで「Delete」をクリックします。

   確認ダイアログボックスが表示されます。
5. 「OK」をクリックしてアカウントを削除するか、「Cancel」をクリックして削除処理を中止します。

   「User Account Settings」ページが更新されます。

▼ ユーザーセッションを表示する (Web)

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「User Management」-->「Active Sessions」をクリックします。

   「Active Sessions」ページに、ユーザーアカウントの名前、割り当てられているユーザーの役割、セッション開始時間、セッションタイプ、およびセッションモードのリストが表示されます。

SSH 鍵を設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM Web インタフェースで SSH 鍵設定を管理する	• 53 ページの「SSH 鍵を追加する (Web)」 • 55 ページの「SSH 鍵を削除する (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ SSH 鍵を追加する (Web)

注 – Oracle ILOM の SSH 鍵設定で、パスワード認証を自動化できます。

始める前に

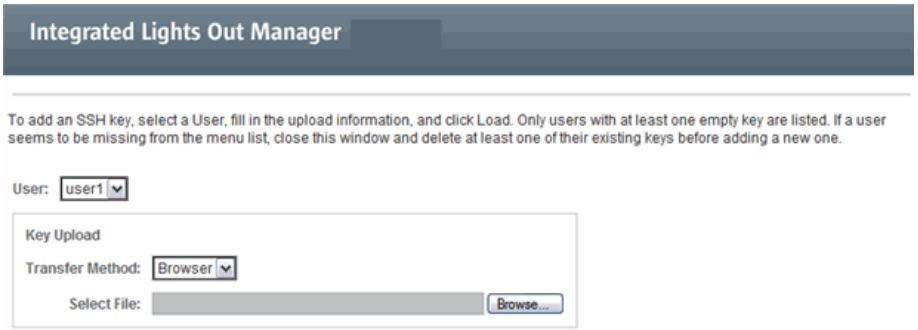
- ほかのユーザーの SSH 鍵を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。ただし、自分の SSH 鍵は Read Only (o) の役割が有効になっていれば設定できます。

SSH 鍵を追加するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「User Management」-->「User Accounts」をクリックします。

   「User Account Settings」ページが表示されます。
3. 「User Account Settings」ページで、「SSH」テーブルまでスクロールダウンして「Add」をクリックします。

   SSH 鍵の追加画面が表示されます。



4. 「User」ドロップダウンリストで、ユーザーアカウントの名前を選択します。
5. 「Transfer Method」ドロップダウンリストで、転送方法を選択します。

   次の転送方法を使用できます。
   - Browser
   - TFTP
   - FTP
   - SFTP
   - SCP
   - HTTP
   - HTTPS

6. 「Browser」を選択した場合は、「Browse」をクリックして SSH 鍵の場所を指定します。手順 9 に進みます。

7. 「TFTP」を選択すると以下の図に示すプロンプトが表示されるので、次の情報を入力して手順 9 に進みます。
   - **Host** − リモートホストの IP アドレスか、DNS を設定している場合はリモートホストの名前を入力します。
   - **Filepath** − 設定ファイルの保存先のパスを `directoryPath/filename` 形式で入力します。

8. 転送方法で SCP、FTP、SFTP、HTTP、または HTTPS を選択した場合、次の図に示すようなプロンプトが表示され、次の情報を入力してから手順 9 に進む必要があります。
   - **Host** − リモートホストの IP アドレスか、DNS を設定している場合はリモートホストの名前を入力します。
   - **Filepath** − 設定ファイルの保存先のパスを `directoryPath/filename` 形式で入力します。
   - **Username** − リモートシステムでのアカウントのユーザー名を入力します。
   - **Password** − リモートシステムでのアカウントのパスワードを入力します。

9. 選択したユーザーアカウントに SSH 鍵を追加するには、「Load」をクリックします。

   SSH 鍵がユーザーアカウントに追加されます。

▼ SSH 鍵を削除する (Web)

注 – Oracle ILOM の SSH 鍵設定で、パスワード認証を自動化できます。

始める前に

- ほかのユーザーの SSH 鍵を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。ただし、自分の SSH 鍵は Read Only (o) の役割が有効になっていれば設定できます。

SSH 鍵を削除するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「User Management」-->「User Accounts」をクリックします。**

   「User Account Settings」ページが表示されます。
3. **ページをスクロールダウンして、下部にある「SSH Keys」セクションを表示し、ユーザーを選択して、「Delete」をクリックします。**

   確認ダイアログボックスが表示されます。
4. **「OK」をクリックします。**

   SSH 鍵が削除されます。

Active Directory を設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM Web インタフェースの Active Directory 設定の管理とトラブルシューティングを行う	• 56 ページの「Active Directory 設定を表示および構成する (Web)」 • 60 ページの「Active Directory テーブルを設定する (Web)」 • 64 ページの「Active Directory 認証および承認をトラブルシューティングする (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ Active Directory 設定を表示および構成する (Web)

始める前に

- Active Directory の設定を行うには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 「Expanded Search Mode」プロパティーを設定するには、サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。
- 「Strict Credential Error Mode」プロパティーを設定するには、サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降が実行されている必要があります。

Active Directory 設定を表示し、構成するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「User Management」-->「Active Directly」をクリックします。**

   「Active Directory」ページが表示されます。次の図に示すように、「Active Directory」ページには 3 つのセクションがあります。

   - 一番上のセクション (ターゲットとプロパティー)

- 中央のセクション (主要な証明書情報)

- 一番下のセクション (Active Directory テーブル)

3. **「Active Directory」設定ページの一番上のセクションに表示される Active Directory 設定を構成します。**

   Active Directory の設定については、次の表を参照してください。

プロパティー	デフォルト	説明
State	Disabled	Enabled | Disabled
Roles	(なし)	Administrator | Operator | Advanced | なし 認証されたすべての Active Directory ユーザーに付与されるアクセスの役割。このプロパティーは、従来の Administrator または Operator の役割、あるいは個々の役割 ID (a、u、c、r、o、および s) の任意の組み合わせをサポートします。たとえば、aucros となっている場合、a は Admin、u は User Management、c は Console、r は Reset and Host Control、o は Read-Only、s は Service を意味します。ここで役割を設定しない場合、役割の決定には Active Directory サーバーが使用されます。

プロパティー	デフォルト	説明
Address	0.0.0.0	Active Directory サーバーの IP アドレスまたは DNS 名。DNS 名が使用される場合は、DNS が設定済みで機能している必要があります。
Port	0	サーバーとの通信に使用するポート。「`autoselect`」を選択すると、ポートは 0 に設定されます。 使用している標準以外の TCP ポートで予期しないイベントが発生した場合に使用できます。
Timeout	4	タイムアウト値 (秒単位)。 個々のトランザクションが完了するまで待機する秒数です。トランザクションの数は設定に応じて異なるため、この値はすべてのトランザクションの合計時間を表すわけではありません。 このプロパティーは、サーバーが応答していない場合や到達不可能な場合に待機する時間を調整するために使用できます。
Strict Certificate Mode	Disabled	Enabled | Disabled 有効にすると、認証時にデジタル署名を利用してサーバー証明書の内容が検証されます。厳密な証明書モードを有効にするには、証明書がロードされている必要があります。
DNS Locator Mode	Disabled	Enabled | Disabled 有効にすると、設定された DNS ロケータクエリーに基づき、Active Directory サーバーの検出が試みられます。
Expanded Search Mode	Disabled	Enabled | Disabled Oracle ILOM 3.0.4 から、拡張検索モードを使用できます。有効にすると、拡張検索モードを使用してユーザーエントリの検索を制御できます。より厳密な userPrincipleName 検索がすぐに成功しなかった場合は、別の検索が試行されます。 無効にすると、userPrincipleName に完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name、FQDN) 接尾辞が必要です。

プロパティー	デフォルト	説明
Strict Credential Error Mode	Disabled	Enabled | Disabled Oracle ILOM 3.0.10 以降では、厳密な資格エラーモードを使用できます。 このモードを無効に設定 (チェックボックスの選択を解除) すると、使用できるほかのサーバー (代替サーバーテーブルで設定されているか DNS クエリーで検出される) でユーザー資格が再試行されます。無効な場合、別の分離されたドメインのユーザーは、そのドメインの認証サーバーが使用可能なかぎり Oracle ILOM にログインできます。 このモードを有効に設定 (チェックボックスを選択) すると、サーバーから資格エラーがレポートされた場合、ユーザー資格エラーが発生した最初の認証試行後、そのユーザー資格の認証は失敗します。
Log Detail	None	None | High | Medium | Low イベントログに記録される診断項目の量を指定します。

4. **「Active Directory」設定ページの一番上のセクションにある「Save」をクリックして設定を有効にします。**

5. **「Active Directory」設定ページの中央のセクションにある Active Directory 証明書情報を表示します。**

   Active Directory の証明書の設定については、次の表を参照してください。

プロパティー	表示	説明
Certificate File Status	Certificate not present	証明書の有無を示す読み取り専用の項目。
Certificate File Status	Certificate present (details)	「(details)」リンクをクリックすると、認証情報 (発行者、被認証者、シリアル番号、有効期限開始日、有効期限終了日、バージョン) が表示されます。

6. **厳密な証明書モードが有効な場合、次の手順を実行します。**

注 – 厳密な証明書モードが無効な場合、データの保護は継続しますが、証明書をアップロードする必要はありません。

---

a. 証明書ファイルのアップロードに必要なパラメータを指定して「Certificate File Upload」セクションの入力を完了します。

転送方法	必要なパラメータ
Browser	File Name
TFTP	Host Filepath
FTP	Host Filepath Username Password
SCP	Host Filepath Username Password

b. 「Load Certificate」ボタンをクリックします。

c. 証明書がロードされている場合は、「details」リンクをクリックして次の情報を表示します。

アイテム	説明
`Issuer`	証明書を発行した認証局。
Subject	証明書の対象となるサーバーまたはドメイン。
Valid From	証明書の有効期限の開始日。
Valid Until	証明書の有効期限の終了日。
`Serial Number`	証明書のシリアル番号。
Version	証明書のバージョン番号。

▼ Active Directory テーブルを設定する (Web)

始める前に

- Active Directory の設定を行うには、User Management (`u`) の役割を有効にする必要があります。
- 「Expanded Search Mode」プロパティーを設定するには、サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。

- 「Strict Credential Error Mode」プロパティーを設定するには、サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降が実行されている必要があります。

Active Directory テーブルを設定するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「User Management」-->「Active Directly」をクリックします。**

   「Active Directory」ページが表示されます。
3. **「Active Directory」ページの一番上で、設定するテーブルのカテゴリにアクセスするリンクを次の中からクリックします。**
   - Admin Groups
   - Operator Groups
   - Custom Groups
   - User Domains
   - Alternate Servers
   - DNS Locator Queries
4. **個別のテーブルのラジオボタンを有効にして、「Edit」をクリックします。**
5. **テーブルに必要なデータを入力します。**

   次の表に、Active Directory データの望ましい形式を示すためのデフォルトデータを示します。

   - **Admin Groups テーブル**

     Admin Groups テーブルには、Microsoft Active Directory グループの名前が、識別名 (Distinguished Name、DN) 形式、単純名形式、または NT 形式で含まれます。

ID	名前
1	`CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=east,DC=oracle,DC=com`
2	

   - **Operator Groups テーブル**

Operator Groups テーブルには、Microsoft Active Directory グループの名前が、識別名 (Distinguished Name、DN) 形式、単純名形式、または NT 形式で含まれます。

ID	名前
1	CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=east,DC=oracle,DC=com
2	

- **Custom Groups テーブル**

  Custom Groups テーブルには、Microsoft Active Directory グループの名前が、識別名 (Distinguished Name、DN) 形式、単純名形式、または NT 形式で含まれます。エントリに関連付けられている役割も設定されています。

ID	名前	ロール
1	custom_group_1	Admin, User Management, Console, Reset and Host Control, Read Only (aucro)

- **User Domains テーブル**

  User Domains は、ユーザーの認証に使われる認証ドメインです。ユーザーがログインする際、使用した名前は特定のドメイン名形式に書式設定されます。ユーザー認証は、入力されたユーザー名と設定済みのユーザードメインに基づいて試行されます。

  このあとの例では、エントリ 1 のドメインは、ユーザー認証を最初に試行する際に使用される原則の形式を示しています。エントリ 2 は、Active Directory が最初のエントリでの認証に失敗した場合に使用する、完全な識別名を示します。

注 – <USERNAME> は、ユーザーのログイン名で置き換えられます。認証の際、<USERNAME> はユーザーのログイン名に置き換えられます。

ID	ドメイン
1	<USERNAME>@sales.east.oracle.com
2	CN=<USERNAME>,CN=Users,DC=sales,DC=east,DC=oracle,DC=com

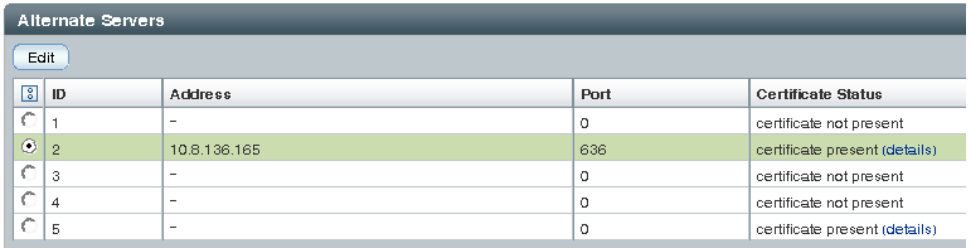
- **Alternate Servers テーブル**

  Alternate Servers テーブルは、ドメインの分離によって必要となる場合、冗長性と同時に他のサーバーの選択肢を提供します。証明書が必要にもかかわらず指定されていない場合は、トップレベルの主証明書が使用されます。代替サー

バーのルールと要件は、トップレベル証明書モードと同じです。各サーバーにそれぞれの証明書状態があり、必要に応じてそれぞれの証明書コマンドで証明書を取得します。

ID	Address	Port	証明書の状態
1	-	0	`certificate not present`
2	`10.8.136.165`	0	`certificate present (details)`

次の図に、ID 2 に証明書が存在する Alternate Servers テーブルを示します。



「details」リンクをクリックすると、次の証明書情報が表示されます。

アイテム	説明
Issuer	証明書を発行した認証局。
Subject	証明書の対象となるサーバーまたはドメイン。
Valid From	証明書の有効期限の開始日。
Valid Until	証明書の有効期限の終了日。
`Serial Number`	証明書のシリアル番号。
Version	証明書のバージョン番号。

- **DNS Locator Queries テーブル**

  DNS Locator Queries テーブルは、認証に使用するホストについて DNS サーバーに問い合わせます。

DNS ロケータサービスクエリーは、DNS の名前付きのサービスを特定します。ポート ID は通常レコードに含まれますが、<PORT:636> 形式を使用してオーバーライドできます。また、<DOMAIN> 置換マーカーを使用して、認証対象のドメイン固有のネームサービスを指定できます。

名前	ドメイン
1	_ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>
2	_ldap._tcp.dc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:636>

注 – DNS Locator Queries が機能するためには、DNS および DNS ロケータモードが有効になっている必要があります。

---

6. **「Save」をクリックして変更を有効にします。**

▼ Active Directory 認証および承認をトラブルシューティングする (Web)

始める前に

- Active Directory の設定を行うには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 「Expanded Search Mode」プロパティーを設定するには、サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。
- 「Strict Credential Error Mode」プロパティーを設定するには、サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降が実行されている必要があります。

Active Directory の認証と承認をトラブルシューティングするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「User Management」-->「Active Directly」をクリックします。**

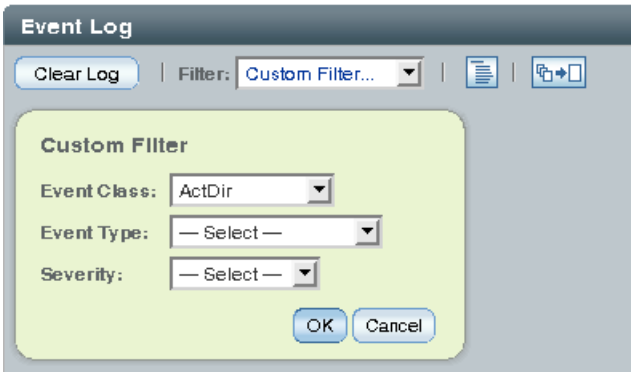
   「Active Directory」ページが表示されます。
3. **「Log Detail」ドロップダウンリストで、イベントログに記録する詳細レベルを選択します。**

   「None」、「High」、「Medium」、「Low」、または「Trace」を選択できます。
4. **「Save」をクリックして変更を保存します。**

5. イベントを生成するために認証を試みます。次の手順を実行します。

   a. 「System Monitoring」タブで、「Event Logs」を選択します。

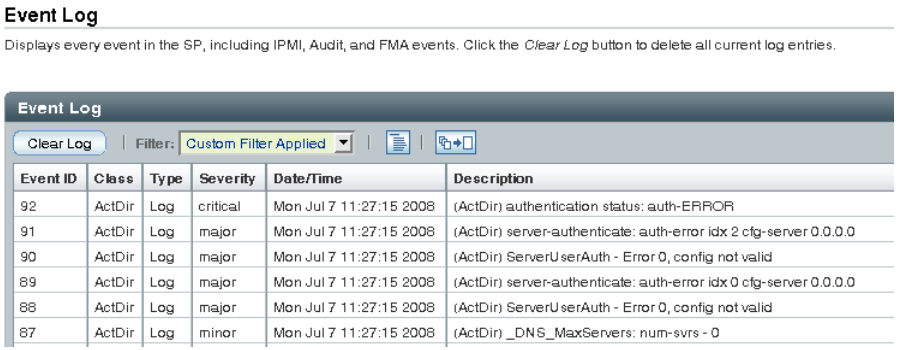
   b. 「Filter」ドロップダウンリストで、「Custom Filter」を選択します。



   c. 「Event Class」ドロップダウンリストで、「ActDir」を選択します。

   d. 「OK」をクリックします。

   すべての Active Directory イベントがイベントログに表示されます。



Event Log

Displays every event in the SP, including IPMI, Audit, and FMA events. Click the *Clear Log* button to delete all current log entries.

Event Log

Clear Log | Filter: Custom Filter Applied

Event ID	Class	Type	Severity	Date/Time	Description
92	ActDir	Log	critical	Mon Jul 7 11:27:15 2008	(ActDir) authentication status: auth-ERROR
91	ActDir	Log	major	Mon Jul 7 11:27:15 2008	(ActDir) server-authenticate: auth-error idx 2 cfg-server 0.0.0.0
90	ActDir	Log	major	Mon Jul 7 11:27:15 2008	(ActDir) ServerUserAuth - Error 0, config not valid
89	ActDir	Log	major	Mon Jul 7 11:27:15 2008	(ActDir) server-authenticate: auth-error idx 0 cfg-server 0.0.0.0
88	ActDir	Log	major	Mon Jul 7 11:27:15 2008	(ActDir) ServerUserAuth - Error 0, config not valid
87	ActDir	Log	minor	Mon Jul 7 11:27:15 2008	(ActDir) _DNS_MaxServers: num-svrs - 0

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を設定する

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM Web インタフェースで LDAP 設定を管理する	• 66 ページの「LDAP サーバー設定を構成する (Web)」 • 67 ページの「LDAP 用に Oracle ILOM を設定する (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ LDAP サーバー設定を構成する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM で LDAP サーバー設定を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

LDAP サーバー設定を構成するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM に対して認証を行うすべてのユーザーアカウントのユーザーアカウントパスワードが暗号化形式で保存されていることを確認します。**

   Oracle ILOM では、次の 2 種類の暗号化形式のいずれかで保存したパスワードの LDAP 認証のみをサポートしています。

   `userPassword: {CRYPT}ajCa2He4PJhNo`

   または

   `userPassword: {CRYPT}$1$pzKng1$du1Bf0NWBjh9t3FbUgf46`。

2. **オブジェクトクラス `posixAccount` および `shadowAccount` を追加し、このスキーマ (RFC 2307) に必要なプロパティー値を入力します。必要なプロパティー値については、次の表を参照してください。**

必須プロパティー	説明
uid	Oracle ILOM にログインするためのユーザー名
uidNumber	任意の固有の数字
gidNumber	任意の固有の数字

必須プロパティー	説明
userPassword	パスワード
homeDirectory	任意の値 (Oracle ILOM でこのプロパティーは無視される)
loginShell	任意の値 (Oracle ILOM でこのプロパティーは無視される)

3. **LDAP サーバーを設定して、Oracle ILOM のユーザーアカウントにアクセスできるようにします。**

   LDAP サーバーが匿名バインドを許可するようにするか、または LDAP サーバーにプロキシユーザーを作成します。LDAP サーバーは、Oracle ILOM により認証されるすべてのユーザーアカウントに読み取り専用アクセスができます。

   詳細は、LDAP サーバーのマニュアルを参照してください。

▼ LDAP 用に Oracle ILOM を設定する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM で LDAP 設定を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

LDAP 用に Oracle ILOM を設定するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「User Management」-->「LDAP」をクリックします。**

   「LDAP Settings」ページが表示されます。
3. **「LDAP Settings」ページで、次のプロパティーの値を指定します。**
   - **State** − LDAP ユーザーを認証するには、「Enabled」チェックボックスをクリックします。
   - **Role** −「Role」ドロップダウンリストで、デフォルトの LDAP ユーザーの役割 (Administrator、Operator、Advanced の役割) を指定します。
   - **Address** −「Address」テキストボックスに、LDAP サーバーの IP アドレスと DNS ホスト名を入力します。
   - **Port** − 「Port」テキストボックスで、デフォルトの LDAP ポート番号 (389) を受け入れるか、デフォルトのポート番号を変更します。
   - **Searchbase** −「Searchbase」テキストボックスに、ユーザーを検索する LDAP サーバーのブランチを入力します。
   - **Bind DN** −「Bind DN」テキストボックスに、LDAP サーバー上の読み取り専用プロキシユーザーの識別名 (Distinguished Name、DN) を入力します。Oracle ILOM がユーザーの検索と認証を行うには、LDAP サーバーに対する読み取り専用のアクセス権が必要になります。

- **Bind Password** – 「Bind Password」テキストボックスに、読み取り専用のユーザーのパスワードを入力します。

4. 「Save」をクリックして変更を有効にします。

5. LDAP 認証の動作を確認するには、LDAP ユーザー名とパスワードを使用して、Oracle ILOM にログインします。

注 – Oracle ILOM は、LDAP ユーザーの前にローカルユーザーを検索します。LDAP ユーザー名がローカルユーザーとして存在する場合は、Oracle ILOM は認証にローカルアカウントを使用します。

LDAP/SSL の設定を構成する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM Web インタフェースで LDAP/SSL 設定を管理する	• 68 ページの「LDAP/SSL 設定を表示および構成する (Web)」 • 72 ページの「LDAP/SSL テーブルを設定する (Web)」 • 75 ページの「LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ LDAP/SSL 設定を表示および構成する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM で LDAP/SSL 設定を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 「Optional User Mapping」プロパティーを変更するには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。

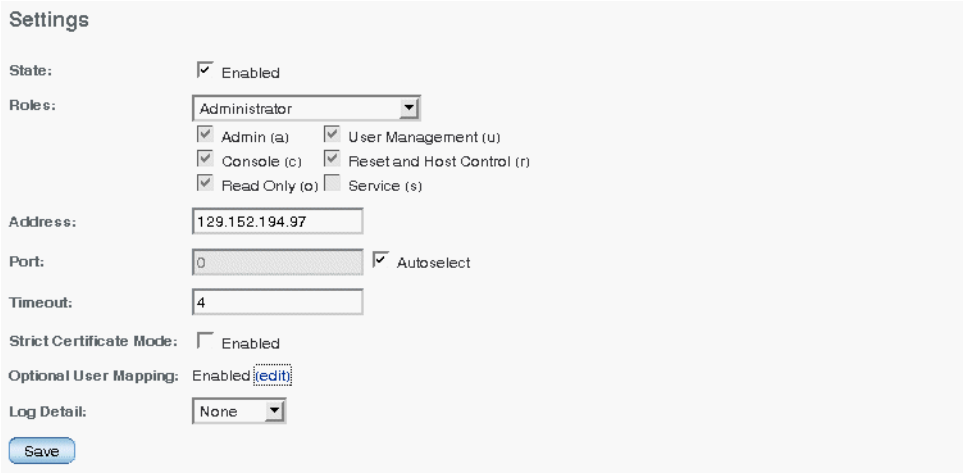
LDAP/SSL 設定を表示し、構成するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。

2. 「User Management」-->「LDAP/SSL」をクリックします。

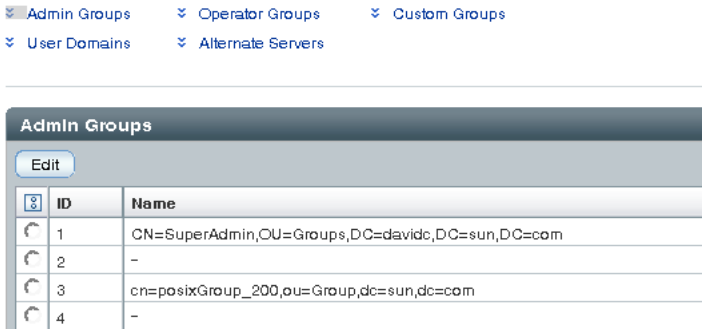
   「LDAP/SSL」ページが表示されます。「LDAP/SSL」ページには 3 つのセクションがあります。

- 一番上のセクション (ターゲットとプロパティー)



- 中央のセクション (証明書情報)

- 一番下のセクション (LDAP/SSL テーブル)



3. 「LDAP/SSL」設定ページの一番上のセクションに表示される LDAP/SSL 設定を構成します。

LDAP/SSL の設定については、次の表を参照してください。

プロパティー (Web)	デフォルト	説明
State	Disabled	Enabled | Disabled
Roles	(なし)	Administrator | Operator | Advanced | (none) 認証されたすべての LDAP/SSL ユーザーに付与されるアクセスの役割。このプロパティーは、従来の Administrator または Operator の役割、あるいは個々の役割 ID (a、u、c、r、o、および s) の任意の組み合わせをサポートします。たとえば、aucros となっている場合、a は Admin、u は User Management、c は Console、r は Reset and Host Control、o は Read-Only、s は Service を意味します。ここで役割を設定しない場合、役割の決定には LDAP/SSL サーバーが使用されます。
Address	0.0.0.0	LDAP/SSL サーバーの IP アドレスまたは DNS 名。
Port	0	サーバーとの通信に使用するポート。「Autoselect」オプションが有効になっている場合、ポートは 0 に設定されます。 使用している標準以外の TCP ポートで予期しないイベントが発生した場合に使用できます。
Timeout	4	タイムアウト値 (秒単位)。 個々のトランザクションが完了するまで待機する秒数です。トランザクションの数は設定に応じて異なるため、この値はすべてのトランザクションの合計時間を表すわけではありません。 このプロパティーは、サーバーが応答していない場合や到達不可能な場合に待機する時間を調整するために使用できます。
Strict Certificate Mode	Disabled	Enabled | Disabled 有効にすると、認証時にデジタル署名を利用してサーバー証明書の内容が検証されます。厳密な証明書モードを有効にするには、証明書がロードされている必要があります。

プロパティー (Web)	デフォルト	説明
Optional User Mapping	Disabled	Enabled | Disabled Oracle ILOM 3.0.4 から、オプションのユーザーマッピングを使用できます。有効にすると、識別名 (DN) 以外の属性をユーザー資格の認証に使用できます。このプロパティーを使用して、単純なユーザーログイン名を DN に変換してユーザー資格を検証します。 「edit」をクリックし、「User Attribute Mapping Parameters」ダイアログを表示して内容を変更し、「Save」をクリックします。
Log Detail	None	None | High | Medium | Low イベントログに記録される診断項目の量を指定します。

4. **「LDAP/SSL」設定ページの一番上のセクションにある「Save」をクリックして、このセクションで行った変更を保存します。**

5. **「LDAP/SSL」設定ページの中央セクションで、LDAP/SSL の証明書情報を確認します。**

   LDAP/SSL 証明書の設定については、次の表を参照してください。

プロパティー	表示	説明
Certificate File Status	Certificate not present	証明書の有無を示す読み取り専用の項目。
Certificate File Status	Certificate present (details)	「(details)」リンクをクリックすると、認証情報 (発行者、被認証者、シリアル番号、有効期限開始日、有効期限終了日、バージョン) が表示されます。

6. **厳密な証明書モードが有効な場合、次の手順を実行します。**

注 – 厳密な証明書モードが無効の場合、データの保護は継続されますが、証明書は不要です。

---

a. 証明書ファイルのアップロードに必要な次のパラメータを指定して「Certificate File Upload」セクションの入力を完了します。

転送方法	必要なパラメータ
Browser	File Name
TFTP	Host Filepath
FTP	Host Filepath Username Password
SCP	Host Filepath Username Password

b. 証明書をアップロードするには、「Load Certificate」ボタンをクリックします。

c. 証明書をロードしたら、「details」をクリックして、証明書に関する次の情報を表示します。

アイテム	説明
Issuer	証明書を発行した認証局。
Subject	証明書の対象となるサーバーまたはドメイン。
Valid From	証明書の有効期限の開始日。
Valid Until	証明書の有効期限の終了日。
Serial Number	証明書のシリアル番号。
Version	証明書のバージョン番号。

▼ LDAP/SSL テーブルを設定する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM で LDAP/SSL 設定を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 「Optional User Mapping」プロパティーを変更するには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。

LDAP/SSL テーブルを設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「User Management」-->「LDAP/SSL」をクリックします。

   「LDAP/SSL」ページが表示されます。
3. 「LDAP/SSL」ページの一番下で、設定するテーブルのカテゴリにアクセスするリンクを次の中からクリックします。
   - Admin Groups
   - Operator Groups
   - Custom Groups
   - User Domains
   - Alternate Servers
4. 個別のテーブルのラジオボタンを有効にして、「Edit」をクリックします。
5. テーブルに必要なデータを入力します。

   以下の各表で、デフォルトデータは LDAP/SSL データの正しい入力形式を示しています。

   - **Admin Groups テーブル**

     Admin Groups テーブルには、LDAP/SSL グループの名前が、識別名 (Distinguished Name、DN) 形式で含まれます。

ID	名前
1	`CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=east,DC=oracle,DC=com`
2	

   - **Operator Groups テーブル**

     Operator Groups テーブルには、LDAP/SSL グループの名前が、識別名 (Distinguished Name、DN) 形式で含まれます。

ID	名前
1	`CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=east,DC=oracle,DC=com`
2	

- **Custom Groups テーブル**

  Custom Groups テーブルには、LDAP/SSL グループの名前が、識別名 (Distinguished Name、DN) 形式、単純名形式、または NT 形式で含まれます。エントリに関連付けられている役割も設定されています。エントリ 1 に表示されている名前は、単純名形式を使用しています。

ID	名前	ロール
1	custom_group_1	Admin, User Management, Console, Reset and Host Control, Read Only (aucro)

- **User Domains テーブル**

  User Domains は、ユーザーの認証に使われる認証ドメインです。ユーザーがログインする際、使用した名前は特定のドメイン名形式に書式設定されます。ユーザー認証は、入力されたユーザー名と設定済みのユーザードメインに基づいて試行されます。

  エントリ 1 は、LDAP/SSL が最初のエントリでの認証に失敗した場合に使用する完全な識別名です。

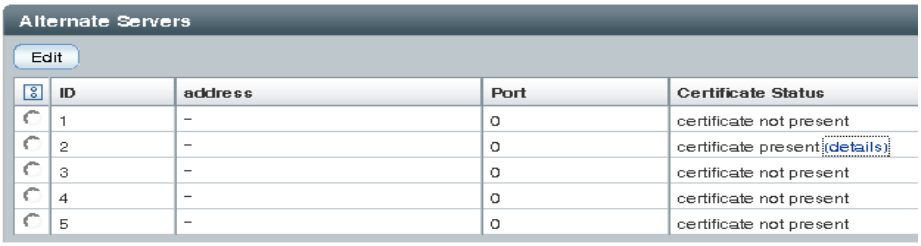
ID	ドメイン
1	UID=<USERNAME>,OU=people,DC=oracle,DC=com
2	

- **Alternate Servers テーブル**

  代替サーバーテーブルは、認証に冗長性を提供します。証明書が必要にもかかわらず指定されていない場合は、トップレベルの主証明書が使用されます。代替サーバーのルールと要件は、トップレベル証明書モードと同じです。各サーバーにそれぞれの証明書状態があり、必要に応じてそれぞれの証明書コマンドで証明書を取得します。

ID	Address	Port	証明書の状態
1	-	0	certificate not present
2	-	0	certificate not present
3	10.7.143.246	0	certificate present (details)

次の図に、ID 2 に証明書が存在する Alternate Servers テーブルを示します。



「details」リンクをクリックすると、次の情報が表示されます。

アイテム	説明
Issuer	証明書を発行した認証局。
Subject	証明書の対象となるサーバーまたはドメイン。
Valid From	証明書の有効期限の開始日。
Valid Until	証明書の有効期限の終了日。
Serial Number	証明書のシリアル番号。
Version	証明書のバージョン番号。

▼ LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング (Web)

始める前に

- Oracle ILOM で LDAP/SSL 設定を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 「Optional User Mapping」プロパティーを変更するには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。

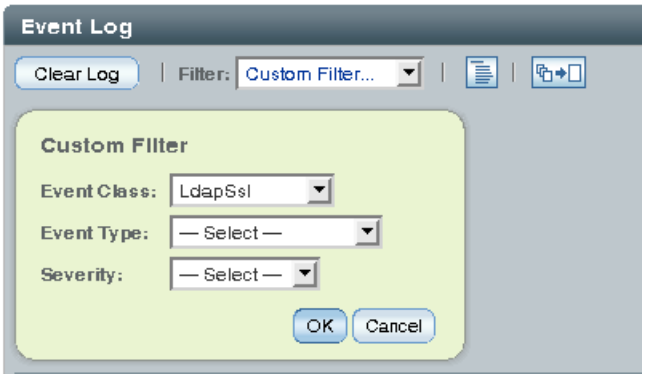
LDAP/SSL の認証をトラブルシューティングするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「User Management」-->「LDAP/SSL」をクリックします。**

   「LDAP/SSL」ページが表示されます。
3. **「Log Detail」ドロップダウンリストで、イベントログに記録する詳細レベルを選択します。**

   「None」、「High」、「Medium」、「Low」、または「Trace」を選択できます。

4. 「Save」をクリックして変更を保存します。
5. 次の手順を実行して、イベントを生成するために認証を試行します。
   a. 「System Monitoring」-->「Event Logs」を選択します。
   b. 「Filter」ドロップダウンリストで、「Custom Filter」を選択します。



   c. 「Event Class」ドロップダウンリストで、「LdapSsl」を選択します。

d. 「OK」をクリックして変更を有効にします。

すべての LDAP/SSL イベントがイベントログに表示されます。

System Information | System Monitoring | Power Management | Configuration | User Management | Remote Control | Maintenance

Sensor Readings | Indicators | Event Logs

Event Log

Displays every event for the SP. Click the *Clear Log* button to delete all current log entries.

Event Log

Clear Log | Filter: All Events

Event ID	Class	Type	Severity	Date/Time	Description
365	Audit	Log	minor	Fri Apr 30 00:06:53 2010	root : Delete : object = "/SP/users/user1" : value = "N/A" : success
364	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 23:53:30 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
363	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 23:43:11 2010	root : Close Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
362	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 23:18:02 2010	root : Set : object = "/SP/users/user1/password" : value = "******" : success
361	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 23:18:02 2010	root : Set : object = "/SP/users/user1/role" : value = "auro" : success
360	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 23:18:02 2010	root : Create : object = "/SP/users/user1" : value = "N/A" : success
359	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 23:06:42 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
358	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 22:57:57 2010	root : Close Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
357	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 22:21:21 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
356	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 22:07:12 2010	root : Close Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
355	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 21:50:40 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
354	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 19:31:11 2010	root : Close Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
353	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 19:15:03 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
352	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 15:14:02 2010	root : Close Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
351	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 15:13:21 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
350	System	Log	critical	Thu Apr 29 15:03:18 2010	SP is about to reboot
349	System	Log	critical	Thu Apr 29 15:03:12 2010	upgrade to version 3.0.0.0 succeeded
348	Audit	Log	minor	Thu Apr 29 14:54:50 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success
347	Audit	Log	minor	Wed Apr 28 13:24:13 2010	root : Close Session : object = "/SP/session/type" : value = "shell" : success
346	Audit	Log	minor	Wed Apr 28 13:20:17 2010	root : Open Session : object = "/SP/session/type" : value = "shell" : success
345	Audit	Log	minor	Wed Apr 28 12:33:22 2010	root : Close Session : object = "/SP/session/type" : value = "www" : success

RADIUS を設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM Web インタフェースで RADIUS 設定を管理する	• 78 ページの「RADIUS 設定を構成する (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ RADIUS 設定を構成する (Web)

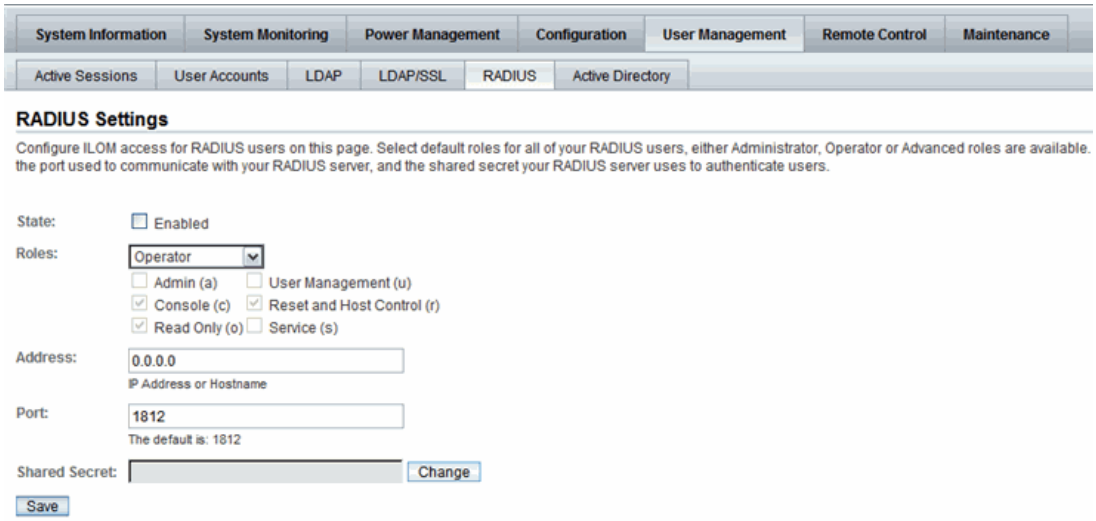
始める前に

- Oracle ILOM で RADIUS 設定を変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

RADIUS 設定を変更するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「User Management」-->「RADIUS」をクリックします。

   「RADIUS Settings」ページが表示されます。



3. 「RADIUS Settings」ページで、次の Web プロパティーの値を指定します。

プロパティー (Web)	デフォルト	説明
State	Disabled	Enabled	Disabled RADIUS クライアントを有効にするか無効にするかを指定します。
Role	Operator	Administrator	Operator	Advanced Roles 認証されたすべての RADIUS ユーザーに付与されるアクセスの役割。このプロパティーは、従来の Administrator や Operator の役割、あるいは個々の役割 ID (`a`、`u`、`c`、`r`、`o`、`s`) の任意の組み合わせをサポートします。たとえば `aucros` と指定できます。`a` は Admin、`u` は User Management、`c` は Console、`r` は Reset and Host Control、`o` は Read Only、`s` は Service です。
Address	0.0.0.0	RADIUS サーバーの IP アドレスまたは DNS 名。DNS 名を使用する場合は、DNS が設定され機能していなければなりません。
Port	1812	RADIUS サーバーとの通信に使用するポート番号を指定します。デフォルトのポートは 1812 です。
Shared Secret	(なし)	機密データを保護しクライアントとサーバーの相互認識を可能にするために使われる共有シークレットを指定します。

4. 「Save」をクリックして変更を有効にします。

コンポーネント状態と保守作業を管理する (Web)

説明	リンク
システムコンポーネント情報と保守作業の表示と管理についての Web 手順。	• 82 ページの「コンポーネント状態の情報を表示する (Web)」 • 83 ページの「コンポーネントの取り外しを準備する (Web)」 • 84 ページの「コンポーネントをサービスに復帰させる (Web)」 • 84 ページの「コンポーネントを有効または無効にする (Web)」 • 85 ページの「Oracle ILOM が検出した障害をクリアする (Web)」

関連情報

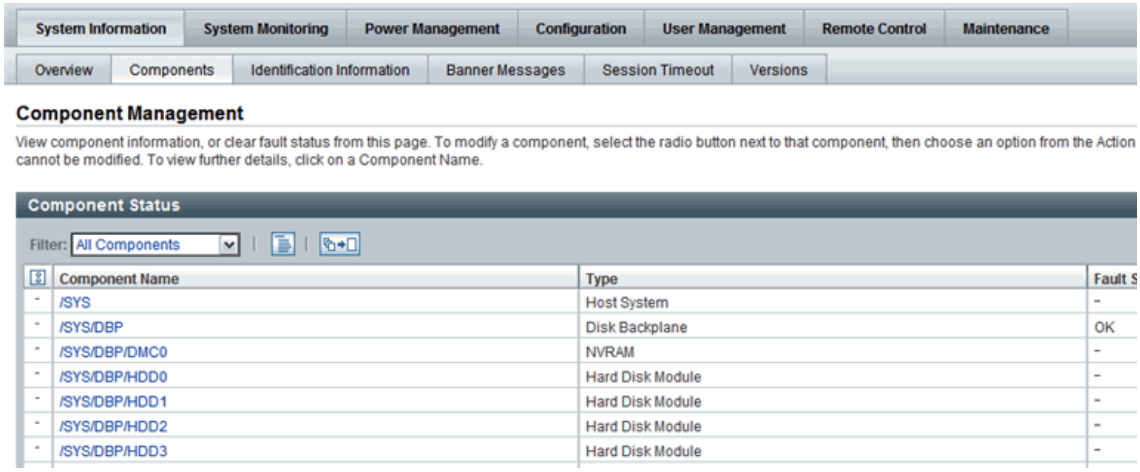
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、障害管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、コンポーネント状態と保守作業の管理

▼ コンポーネント状態の情報を表示する (Web)

コンポーネント状態の情報を表示するには、次の手順に従います。

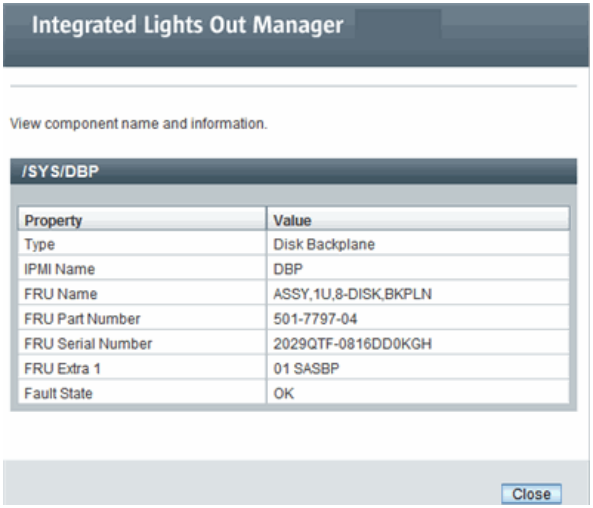
1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「System Information」-->「Components」をクリックします。

   「Component Management」ページが表示されます。



3. コンポーネントで障害が発生している場合、コンポーネント名の左横にラジオボタンが表示されます。ラジオボタンをクリックして障害の状態を確認します。コンポーネント名の横にラジオボタンが表示されない場合は、コンポーネント名をクリックして状態を確認します。

選択した部品に関する情報を示すダイアログボックスが表示されます。次の図は例を示しています。



▼ コンポーネントの取り外しを準備する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM でシステムコンポーネント操作を管理するには、Reset and Host Control (r) の役割が有効になっている必要があります。

システムコンポーネントの取り外しを準備するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「System Information」-->「Components」を選択します。**

   「Component Management」ページが表示されます。
3. **取り外すコンポーネントの横にあるラジオボタンを選択します。**

   ラジオボタンが表示されていない部品は取り外せません。
4. **「Actions」ドロップダウンリストから「Prepare to Remove」を選択します。**

▼ コンポーネントをサービスに復帰させる (Web)

始める前に

- Oracle ILOM でシステムコンポーネント操作を管理するには、Reset and Host Control (r) の役割が有効になっている必要があります。

次の手順に従って、コンポーネントをサービスに復帰させます。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「System Information」-->「Components」を選択します。**

   「Component Management」ページが表示されます。
3. **サービスに復帰させる部品の横にあるラジオボタンを選択します。**
4. **「Actions」ドロップダウンリストから「Return to Service」を選択します。**

▼ コンポーネントを有効または無効にする (Web)

始める前に

- Oracle ILOM でシステムコンポーネント操作を管理するには、Reset and Host Control (r) の役割が有効になっている必要があります。

コンポーネントを有効または無効にするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「System Information」 --> 「Components」を選択します。**

   「Component Management」ページが表示されます。
3. **有効または無効にする部品の横にあるラジオボタンを選択します。**
4. **「Actions」ドロップダウンリストから「Enable (有効)」または「Disable (無効)」を選択します。**

   選択した内容に応じて、部品が有効または無効になります。

▼ Oracle ILOM が検出した障害をクリアする (Web)

始める前に

- Oracle ILOM で障害をクリアするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。また、サーバー SP または CMM に、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 以降がインストールされている必要があります。

Oracle ILOM Web インタフェースを使用して障害の表示やクリアを行うには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **Oracle ILOM によって検出された、障害の発生したコンポーネントの状態を表示するには、次の手順を実行します。**
   a. **「System Information」-->「Fault Management」をクリックします。**
      「Fault Management」ページが表示され、障害の発生したコンポーネントが、ID、FRU、およびタイムスタンプ別に一覧表示されます。
   b. **障害の発生したコンポーネントのその他の情報を表示するには、そのコンポーネントの ID をクリックします。**
      障害の発生したコンポーネントのその他の情報がダイアログ内に表示されます。

注 – また、「Component Management」ページで、コンポーネントの障害の状態を表示することもできます。「Component Management」ページで障害の状態に関する情報を表示するには、コンポーネント名を選択します。

---

3. **システム内の障害の発生したコンポーネントを修理または交換します。**
   障害の発生したコンポーネントの修理または交換が終わったあと、Oracle ILOM で障害の状態をクリアする必要があります。
4. **Oracle ILOM で表示されている、障害の発生したコンポーネントの状態をクリアするには、次の手順を実行します。**
   a. **「System Information」-->「Components」タブをクリックします。**
   b. **「Component Management」ページで、障害の発生したコンポーネントの隣にあるラジオボタンを有効にして、「Clear Faults」をクリックします。**

システムセンサーの監視とイベントログの管理を行う (Web)

説明	リンク
Oracle ILOM からセンサープロパティーを表示する	• 88 ページの「センサー測定値を表示する (Web)」
Oracle ILOM でシステムインジケータ、時計、タイムゾーン設定を管理する	• 88 ページの「システムインジケータを設定する (Web)」 • 89 ページの「クロック設定を構成する (Web)」 • 90 ページの「タイムゾーン設定を構成する (Web)」
Oracle ILOM からイベントログをフィルタ、ビュー、クリア、設定する	• 91 ページの「イベントログ出力をフィルタリングする (Web)」 • 92 ページの「Oracle ILOM イベントログを表示およびクリアする (Web)」 • 94 ページの「リモート syslog 受信側の IP アドレスを設定する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、システム監視と警告管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、システムセンサー、インジケータ、イベントログの監視
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、インベントリとコンポーネント管理

▼ センサー測定値を表示する (Web)

Oracle ILOM でセンサー測定値を表示するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「System Monitoring」-->「Sensor Readings」をクリックします。**

   「Sensor Readings」ページが表示されます。

注 – サーバーの電源が切断されている場合は、多くのコンポーネントが「測定値なし」として表示されます。

---

3. **「Sensor Reading」ページで、次の手順を実行します。**

   a. **構成するセンサーの名前を見つけます。**

   b. **センサーの名前をクリックして、そのセンサーに関連付けられているプロパティー値を表示します。**

   アクセス可能なディスクリートセンサーのターゲットの種類とそれらにアクセスするためのパスの詳細は、Sun サーバープラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

▼ システムインジケータを設定する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM でインジケータの状態を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

システムインジケータの状態を設定するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「System Monitoring」-->「Indicators」をクリックします。**

   「Indicators」ページが表示されます。

注 – サーバーの電源が切断されている場合は、多くのインジケータが「測定値なし」として表示されます。

---

3. 「Indicators」ページで、次の手順を実行します。

   a. 構成するインジケータの名前を見つけます。

   b. インジケータの状態を変更するには、変更するインジケータに関連付けられているラジオボタンをクリックします。次に、「Actions」リストボックスで、「Turn LED Off」または「Set LED to Fast Blink」を選択します。

      変更を確認するダイアログが表示されます。

   c. 「OK」をクリックして変更を確認します。

▼ クロック設定を構成する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM でクロック設定を行うには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- この手順を完了するには、NTP サーバーの IP アドレスが必要です。

クロック設定を構成するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。

2. 「Configuration」-->「Clock」をクリックします。

   「Clock Settings」ページが表示されます。

3. 「Clock Settings」ページで、次のいずれかの処理を実行します。
   - 既存の設定を表示します。
   - ホストサーバー SP の日時を手動で設定します。手順 4 を参照してください。
   - ホストサーバー SP の日時を NTP サーバーと同期させます。手順 5 を参照してください。

4. ホストサーバー SP の日時を手動で設定するには、次の手順に従います。

   a. 「Date」テキストボックスに、mm/dd/yy の形式で日付を入力します。

   b. 「Time」リストボックスで、時間と分を設定します。

   c. 手順 6 に進みます。

5. NTP サーバーの IP アドレスを設定して同期を有効にするには、次の手順に従います。

   a. 「Synchronize Time Using NTP」の隣にある「Enabled」チェックボックスをクリックします。

   b. 「Server 1」テキストボックスに、使用する主 NTP サーバーの IP アドレスを入力します。

   c. (省略可能)「Server 2」テキストボックスに、使用する副 NTP サーバーの IP アドレスを入力します。

6. 「Save」をクリックして変更を有効にします。

   次の内容に関するプラットフォーム固有のクロック情報は、Oracle Sun サーバープラットフォームのユーザーマニュアルを参照してください。

   - Oracle ILOM の現在の時間は SP を再起動しても維持されるかどうか。
   - Oracle ILOM の現在の時間をホストの起動時にホストと同期させることができるかどうか。
   - 時刻を格納するリアルタイムクロック要素があるかどうか。

▼ タイムゾーン設定を構成する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM でクロックのタイムゾーン設定を行うには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

タイムゾーン設定のプロパティー値を構成するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。

2. 「Configuration」-->「Timezone」をクリックします。

   「Timezone Settings」ページが表示されます。

3. 「Timezone」ドロップダウンリストで、適切なタイムゾーン設定を指定します。

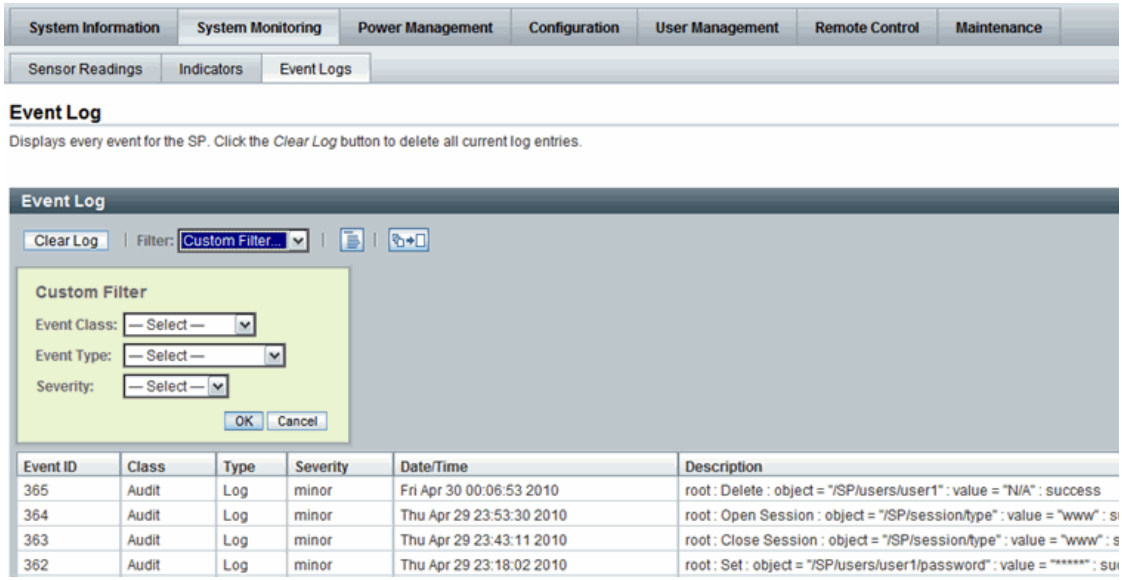
   次の内容に関するプラットフォーム固有のクロック情報は、Oracle Sun サーバープラットフォームのユーザーマニュアルを参照してください。

   - Oracle ILOM の現在の時間は SP を再起動しても維持されるかどうか。
   - Oracle ILOM の現在の時間をホストの起動時にホストと同期させることができるかどうか。
   - 時刻を格納するリアルタイムクロック要素があるかどうか。

▼ イベントログ出力をフィルタリングする (Web)

Oracle ILOM イベントログ出力をフィルタリングするには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「System Monitoring」-->「Event Logs」をクリックします。
   「Event Logs」ページが表示されます。



3. 「Event Log」ページの「Filter」リストボックスで、次の標準フィルタのいずれかをクリックします。
   - All Events
   - Class: Fault
   - Type: Action
   - Severity: Down
   - Severity: Critical

4. または、「Custom Filter」で次のパラメータを指定することもできます。

イベントクラス	イベントタイプ	重要度
Developer	Log	Debug
Email	Connection	Down
Captive Shell	Send	Critical
Backup	Command Entered	Major
Restore	State	Minor
Reset	Action	
Chassis	Fault	
Audit	Repair	
IPMI	Warning	
Fault		
System		
ActDir		

▼ Oracle ILOM イベントログを表示およびクリアする (Web)

始める前に

- Oracle ILOM イベントログをクリアするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「System Monitoring」-->「Event Logs」をクリックします。

   「Event Logs」ページが表示されます。

3. 「Event Logs (イベントログ)」ページで、次のいずれかの手順を実行します。

- エントリ全体でページを操作する − テーブルの上部および下部にあるページナビゲーションコントロールを使用して、テーブル内の使用可能なデータを前後に移動します。

  大量のエントリを選択すると、少数のエントリを選択した場合よりも Web インタフェースの応答が遅くなる場合があります。

- 一覧をスクロールしてエントリを表示する − 次の表で、ログに表示される各列について説明します。

列のラベル	説明
Event ID	(1 番から順番に付けられた) イベントの番号。
Class/Type	• Audit/Log − 設定が変更されるコマンド。説明には、ユーザー、コマンド、コマンドパラメータ、成功と失敗が記述されます。 • IPMI/Log − IPMI SEL に記録されたイベントは、管理ログにも記録されます。 • Chassis/State − インベントリの変更および全般的なシステム状態の変更。 • Chassis/Action − サーバーのモジュールおよびシャーシの停止イベント、FRU のホットインサート/リムーバブル、および押された「Reset Parameters」ボタンのカテゴリ。 • Fault/Fault − 障害管理の障害。説明には、障害が検出された時刻および疑わしいコンポーネントが記述されます。 • Fault/Repair −「Fault」の修復。説明にはコンポーネントが表示されます。
Severity	「Debug」、「Down」、「Critical」、「Major」、または「Minor」。
Date/Time	イベントが発生した日時。時間情報プロトコル (NTP) サーバーで Oracle ILOM の時間を設定できる場合、Oracle ILOM のクロックは協定世界時 (UTC) を使用します。
Description	イベントの説明。

- イベントログをクリアする − イベントログをクリアするには、「Clear Event Log」ボタンをクリックします。確認のダイアログが表示されます。確認ダイアログで「OK」をクリックすると、エントリがクリアされます。

注 − Oracle ILOM イベントログには、IPMI エントリのコピーを含むさまざまな種類のイベントが蓄積されます。Oracle ILOM イベントログをクリアすると、IPMI エントリを含むログ内のすべてのエントリがクリアされます。ただし、Oracle ILOM イベントログエントリをクリアしても、IPMI ログに直接送信された実際のエントリはクリアされません。

▼ リモート syslog 受信側の IP アドレスを設定する (Web)

始める前に

- リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「Configuration」-->「Syslog」をクリックします。

   「Syslog」ページが表示されます。

3. 「IP Address 1」および「IP Address 2」フィールドに、syslog データの送信先の 2 つの場所の IP アドレスを入力します。
4. 「Save」をクリックして設定を有効にします。

ストレージコンポーネントおよび Zone Manager の監視 (Web)

説明	リンク
HDD および RAID コントローラのストレージの詳細を表示および監視する	• 96 ページの「ストレージコンポーネントの監視の要件」 • 96 ページの「RAID コントローラの詳細を表示および監視する (Web)」 • 98 ページの「RAID コントローラに接続されているディスクの詳細を表示および監視する (Web)」 • 100 ページの「RAID コントローラのボリュームの詳細を表示および監視する (Web)」
Sun Blade 6000 または 6048 シリーズのモジュラーシステムに設置されている SAS-2 ストレージ機器用の Zone Manager を管理する	• 101 ページの「SAS-2 ストレージデバイス用の Zone Manager を有効または無効にする」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、ストレージ監視
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、ストレージコンポーネントの監視
- 『Oracle ILOM 3.0 CMM 管理』、Zone Manager

ストレージコンポーネントの監視の要件

- 一部の Oracle サーバーでは、この章で説明されているストレージ監視機能のサポートを有効にすることができません。使用しているプラットフォームサーバーでどのストレージ監視機能が有効か調べるには、プラットフォームの Oracle ILOM 補足マニュアルまたはプラットフォームサーバーの管理ガイドを参照してください。
- ストレージ監視機能をサポートしている Oracle サーバーで Oracle ILOM のストレージ監視機能を使用するには、ハードウェア管理パックをダウンロードしてインストールする必要があります。このハードウェア管理パックをダウンロードする方法については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。
- サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以降が実行されている必要があります。
- ストレージコンポーネントの表示および監視に関する概念情報と例については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』を参照してください。

▼ RAID コントローラの詳細を表示および監視する (Web)

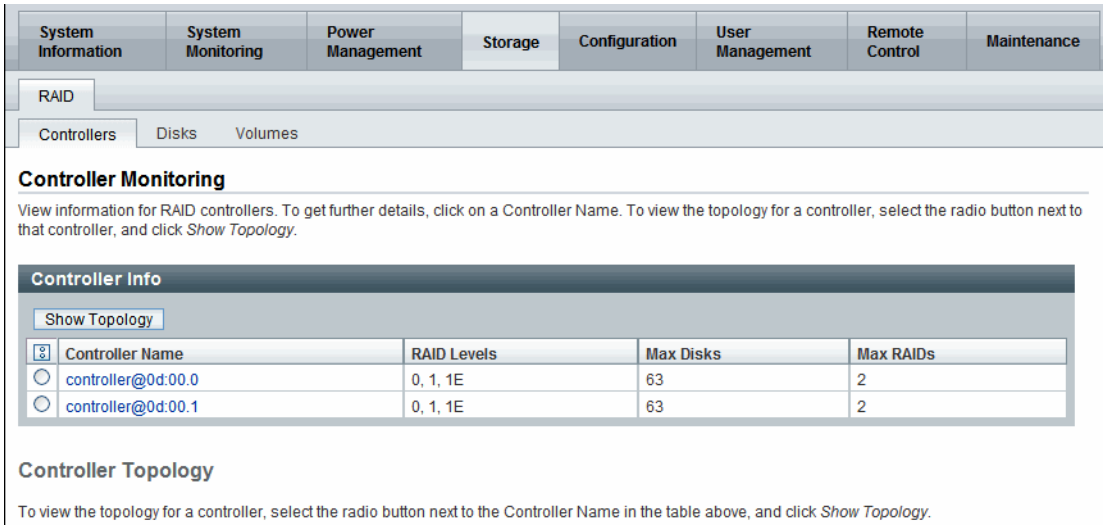
始める前に

- 96 ページの「ストレージコンポーネントの監視の要件」を参照してください。

RAID コントローラの詳細を表示および監視するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Storage」-->「RAID」-->「Controllers」の順にクリックします。

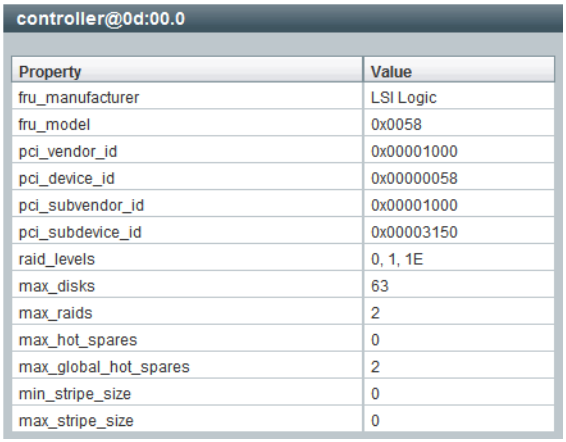
「Controller Monitoring」ページが表示され、システムにインストールされている RAID コントローラの構成の詳細が一覧表示されます。



3. インストールされている RAID コントローラのその他の詳細を表示するには、次の操作を行います。

   - FRU プロパティーとその値を表示するには、RAID コントローラ名をクリックします。

     ダイアログが表示され、RAID コントローラの FRU プロパティーとその値が一覧表示されます。



controller@0d:00.0

Property	Value
fru_manufacturer	LSI Logic
fru_model	0x0058
pci_vendor_id	0x00001000
pci_device_id	0x00000058
pci_subvendor_id	0x00001000
pci_subdevice_id	0x00003150
raid_levels	0, 1, 1E
max_disks	63
max_raids	2
max_hot_spares	0
max_global_hot_spares	2
min_stripe_size	0
max_stripe_size	0

- RAID コントローラのトポロジ情報を表示するには、RAID コントローラ名の隣にあるラジオボタンを選択して、「Show Topology」をクリックします。その RAID コントローラのトポロジの詳細が表示されます。

Controller Topology

The controller topology below includes information for attached disks, configured RAID volumes, and disks that are part of each volume.

controller@0d:00.0

Name	Status	Capacity (GB)	Device Name
disk_id0	-	136	/dev/sda
disk_id1	OK	136	/dev/sdb
disk_id2	OK	136	/dev/sdc
disk_id3	-	136	/dev/sdh
disk_id4	OK	136	/dev/sg4
disk_id5	-	136	/dev/sdf
disk_id6	-	136	/dev/sdd
disk_id7	OK	136	/dev/sg7
raid_id4			Status: OK
raid_id5			Status: OK
disk_id1	OK	136	/dev/sdb
disk_id2	OK	136	/dev/sdc

▼ RAID コントローラに接続されているディスクの詳細を表示および監視する (Web)

始める前に

- 96 ページの「ストレージコンポーネントの監視の要件」を参照してください。

RAID コントローラに接続されているストレージディスクの詳細を表示および監視するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Storage」-->「RAID」-->「Disks」の順にクリックします。

「Disks Monitoring」ページが表示され、RAID コントローラに接続されているディスクの構成の詳細が一覧表示されます。

RAID

Controllers | Disks | Volumes

Disk Monitoring

View information for all disks attached to RAID controllers. To view further details, click on a Disk Name.

Disk Info

Disk Name	Status	Serial Number	Capacity (GB)	Device Name
controller@0d:00.0/disk_id0	-	0998SX6X 3NM8SX6X	136	/dev/sda
controller@0d:00.0/disk_id1	OK	0998SX3L 3NM8SX3L	136	/dev/sdb
controller@0d:00.0/disk_id2	OK	0998T5PH 3NM8T5PH	136	/dev/sdc
controller@0d:00.0/disk_id3	-	0998MS6D 3NM8MS6D	136	/dev/sdh
controller@0d:00.0/disk_id4	OK	0998TS3A 3NM8TS3A	136	/dev/sg4
controller@0d:00.0/disk_id5	-	0998SVYT 3NM8SVYT	136	/dev/sdf
controller@0d:00.0/disk_id6	-	0998V37S 3NM8V37S	136	/dev/sdd
controller@0d:00.0/disk_id7	OK	0998TPGQ 3NM8TPGQ	136	/dev/sg7
controller@0d:00.1/disk_id0	-	0998SX6X 3NM8SX6Z	136	/dev/sdaz
controller@0d:00.1/disk_id1	-	0998SX3L 3NM8SX3Z	136	/dev/sdbz
controller@0d:00.1/disk_id2	-	0998T5PH 3NM8T5PZ	136	/dev/sdcz
controller@0d:00.1/disk_id3	-	0998MS6D 3NM8MS6Z	136	/dev/sdhz
controller@0d:00.1/disk_id4	OK	0998TS3A 3NM8TS3Z	136	/dev/sg14
controller@0d:00.1/disk_id5	-	0998SVYT 3NM8SVYZ	136	/dev/sdfz
controller@0d:00.1/disk_id6	-	0998V37S 3NM8V37Z	136	/dev/sddz
controller@0d:00.1/disk_id7	OK	0998TPGQ 3NM8TPGZ	136	/dev/sg17

3. **ディスクに関連付けられている FRU プロパティーとその値を表示するには、ディスク名をクリックします。**

   ダイアログが表示され、ディスクの FRU プロパティーとその値が一覧表示されます。

controller@0d:00.0/disk_id0

Property	Value
fru_manufacturer	SEAGATE
fru_serial_number	0998SX6X 3NM8SX6X
fru_part_number	ST914602SSUN146G
fru_version	0603
capacity	136
device_name	/dev/sda
disk_type	sas
system_drive_slot	/SYS/DBP/HDD0

▼ RAID コントローラのボリュームの詳細を表示および監視する (Web)

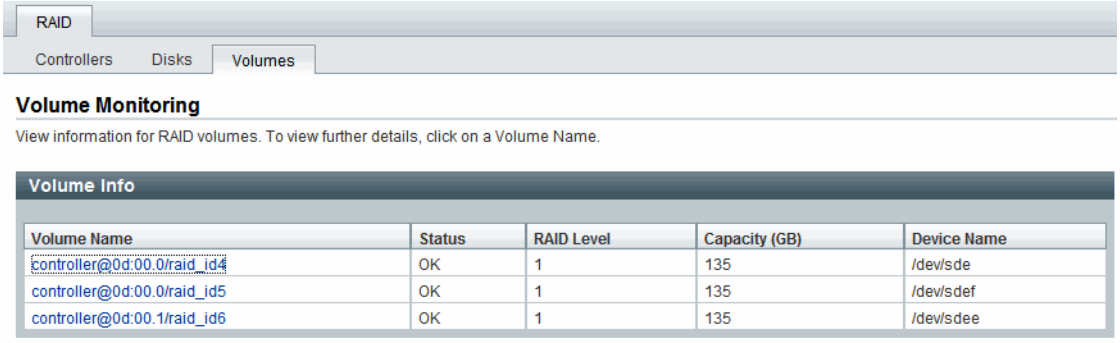
始める前に

- 96 ページの「ストレージコンポーネントの監視の要件」を参照してください。

RAID コントローラのボリュームの詳細を表示および監視するには、次の手順に従います。

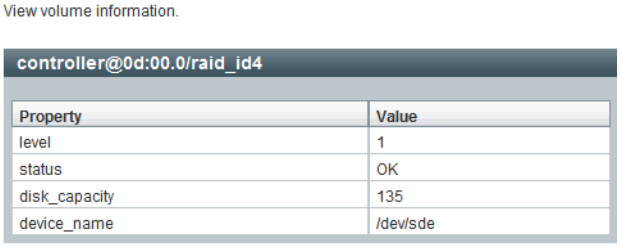
1. Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Storage」-->「RAID」-->「Volumes」の順にクリックします。

   「Volume Monitoring」ページが表示され、RAID コントローラで構成されている RAID ボリュームの構成の詳細が一覧表示されます。



3. ボリュームに関連付けられている FRU プロパティーとその値を表示するには、ボリューム名をクリックします。

   ダイアログが表示され、ボリュームのプロパティーとその値が一覧表示されます。



SAS-2 ストレージデバイス用の Zone Manager を有効または無効にする

Oracle Sun Blade 6000 または Sun Blade 6048 モジュラーシステムを使用している場合、Oracle ILOM 3.0.10 から新しいゾーン管理機能が追加されています。ゾーン管理機能は、Oracle Sun Blade 6000 または Sun Blade 6048 モジュラーシステムにインストールされている SAS-2 ストレージデバイスに対して使用できます。Oracle ILOM で SAS-2 シャーシストレージデバイスを管理する方法の詳細については、『Oracle ILOM 3.0 CMM 管理ガイド − Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』を参照してください。

システム警告と電子メール通知の管理 (Web)

説明	リンク
システム警告の管理要件を特定する	• 104 ページの「警告ルール設定を管理する (Web)」
電子メールを使用してシステム警告を受信者に通知する	• 107 ページの「電子メール通知警告用の SMTP クライアントを設定する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、システム監視と警告管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、システム警告の管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、インベントリとコンポーネント管理

警告ルール設定を管理する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
警告の管理要件を特定する	• 104 ページの「警告ルールの設定要件」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM
警告ルール設定を管理する	• 105 ページの「警告ルールを作成または編集する (Web)」 • 106 ページの「警告ルールを無効にする (Web)」 • 106 ページの「指定した警告ルールのテスト警告を送信する (Web)」	

警告ルールの設定要件

- 電子メール通知警告を定義する場合は、電子メール通知の送信に使用する送信電子メールサーバーを Oracle ILOM で設定する必要があります。送信電子メールサーバーが設定されていないと、Oracle ILOM は正常に電子メール通知を生成できません。
- SNMP v3 トラップ警告を定義している場合、SNMP ユーザー名を Oracle ILOM で SNMP ユーザーとして定義する必要があります。ユーザーが SNMP ユーザーとして定義されていないと、SNMPv3 警告の受信者は SNMP 警告メッセージを復号化できません。
- 警告ルール設定を管理するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- テスト電子メール警告を Oracle ILOM から発行するには、プラットフォームサーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降を実行している必要があります。

▼ 警告ルールを作成または編集する (Web)

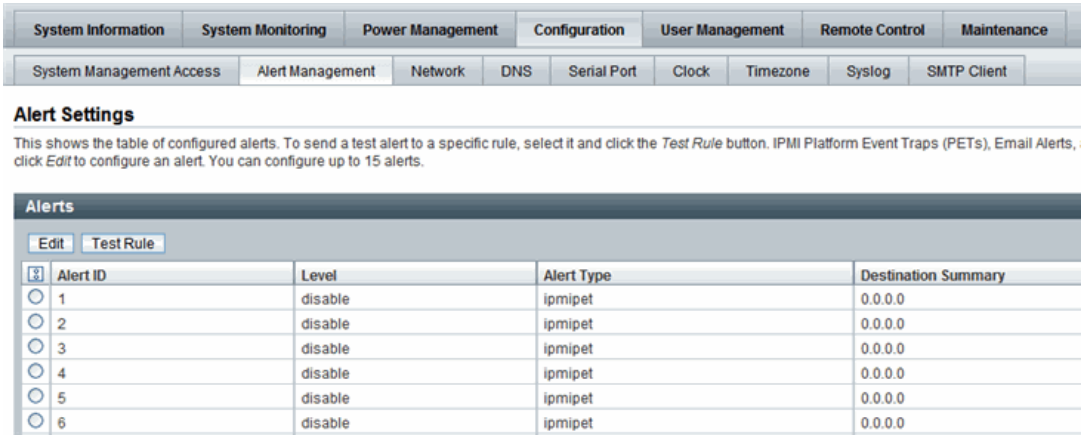
始める前に

- 104 ページの「警告ルールの設定要件」を参照してください。

Oracle ILOM Web インタフェースで警告ルールを設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「Configuration」-->「Alert Management」をクリックします。

   「Alert Settings」ページが表示されます。



3. 「Alert Settings」ページで、次の手順を実行します。

   a. 作成または編集する警告ルールのラジオボタンを選択します。

   b. 「Actions」リストボックスで、「Edit」を選択します。

      警告ルールに関連付けられたプロパティー値を示すダイアログが表示されます。

   c. このプロパティーダイアログボックスで、警告の種類、警告レベル、警告の宛先の値を指定します。

      指定した警告の種類が IPMI Pet 用の場合、IPMI Pet 宛先アドレスを定義する必要があります。

      指定した警告の種類が SNMP トラップの場合、SNPMP 宛先アドレスとポート、および SNMP バージョンとコミュニティー名を定義する必要があります。

      指定した警告の種類が電子メール用の場合、送信先の電子メールアドレスと、該当する場合、フィルタやカスタム送信オプションのオプション設定を定義する必要があります。

注 – 警告ルールの種類ごとに、1 つの宛先アドレスを指定できます。

警告ルールに指定できるプロパティー値の詳細は、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』の警告管理についてのセクションを参照してください。

d. **「Save (保存)」をクリックして、指定した値を適用し、プロパティーダイアログを閉じます。**

▼ 警告ルールを無効にする (Web)

始める前に

- 104 ページの「警告ルールの設定要件」を参照してください。

Oracle ILOM Web インタフェースで警告ルールを無効にするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Configuration」-->「Alert Management」をクリックします。**

   「Alert Settings」ページが表示されます。
3. **「Alert Settings」ページで、無効にする警告ルールのラジオボタンを選択してから、「Actions」リストボックスの「Edit」をクリックします。**

   警告ルールについて定義可能なプロパティーを示すダイアログが表示されます。
4. **このプロパティーダイアログボックスで、「Alert Levels」リストボックスの「Disabled」を選択します。**
5. **「Save」をクリックして、変更を適用し、プロパティーダイアログを閉じます。**

▼ 指定した警告ルールのテスト警告を送信する (Web)

始める前に

- 104 ページの「警告ルールの設定要件」を参照してください。

1 つまたは複数の警告ルールのテスト電子メール警告を送信するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Configuration」-->「Alert Management」をクリックします。**

3. 「Alert Settings」ページで、次の手順を実行してテスト電子メール警告を送信します。

   a. テストする各警告ルールの隣にあるラジオボタンを選択します。

   b. 「Test Rule」ボタンをクリックして、テキスト電子メール警告を警告ルールの宛先に送信します。

注 – 警告ルールごとに、IPMI PET 宛先アドレス、電子メール送信先アドレス、SNMP トラップ宛先アドレスのいずれかの警告の種類を設定できます。警告の種類を設定するには、105 ページの「警告ルールを作成または編集する (Web)」を参照してください。

電子メール通知警告用の SMTP クライアントを設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電子メールを使用してシステム警告を受信者に通知する	• 107 ページの「電子メール通知警告用の SMTP クライアントを有効にする (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM

▼ 電子メール通知警告用の SMTP クライアントを有効にする (Web)

始める前に

- SMTP クライアントを有効にするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 設定済みの電子メール通知警告を生成するには、Oracle ILOM クライアントが SMTP クライアントとして動作し、電子メール警告メッセージを送信できるようにする必要があります。
- Oracle ILOM クライアントを SMTP クライアントとして有効にする前に、電子メール通知を処理する送信 SMTP 電子メールサーバーの IP アドレスとポート番号を指定しておく必要があります。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「Configuration」-->「SMTP Client」をクリックします。

   「SMTP Client」ページが表示されます。
3. 「SMTP Client」ページで、次の設定を指定して、電子メール通知警告の送信を有効にします。

SMTP 設定	説明
SMTP State	「SMTP State」チェックボックスを選択します。
SMTP Server IP	電子メール通知を処理する送信 SMTP 電子メールサーバーの IP アドレスを入力します。
SMTP Port	送信 SMTP 電子メールサーバーのポート番号を入力します。

4. 「Save (保存)」をクリックして、SMTP 設定を適用します。

電力監視およびハードウェアインタフェースの管理 (Web)

説明	リンク
Oracle ILOM ファームウェアのポイントリリースごとに電力の監視および管理機能の更新を確認する	• 110 ページの「電力管理機能の更新の概要 (Web)」
電力監視とハードウェアインタフェースの管理を Oracle ILOM から実行する	• 112 ページの「システムの消費電力を監視する (Web)」 • 116 ページの「サーバーの電力使用量を管理するための電力ポリシーを設定する (Web)」 • 120 ページの「消費電力通知しきい値の設定 (Web)」 • 121 ページの「コンポーネント割り当て配電を監視し設定する (Web)」 • 132 ページの「サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)」 • 135 ページの「CMM 電源冗長性プロパティーを監視または設定する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、消費電力
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、消費電力の監視と管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、消費電力の監視と管理

電力管理機能の更新の概要 (Web)

次の表に、Oracle ILOM 3.0 から拡張された電力管理機能と更新されたドキュメントを記載しています。

表: 電力管理機能の更新

新規または拡張された機能	ファームウェアのポイントリリース	ドキュメントの変更予定	更新された Web 手順に関する参照先
消費電力メトリックを監視する	Oracle ILOM 3.0	• 消費電力メトリックの新しい用語および定義 • 新しいシステム監視 --> 消費電力管理メトリックのプロパティー • デバイスの消費電力を監視するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順	• 112 ページの「システムの消費電力を監視する (Web)」
電力ポリシープロパティーを設定する	Oracle ILOM 3.0	• 新しい電力ポリシープロパティーについての説明 • 電力ポリシー設定を構成するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順	• 116 ページの「サーバーの電力使用量を管理するための電力ポリシーを設定する (Web)」
消費電力履歴を監視する	Oracle ILOM 3.0.3	• 新しい消費電力履歴メトリック • 消費電力を監視するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順	• 114 ページの「電力履歴統計情報を監視する (Web)」
消費電力通知しきい値を設定する	Oracle ILOM 3.0.4	• 新しい消費電力通知しきい値設定 • 消費電力しきい値を構成するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順	• 120 ページの「消費電力通知しきい値の設定 (Web)」
割り当て配電メトリックを監視する	Oracle ILOM 3.0.6	• 新しいコンポーネント割り当てメトリック • 電力割り当てを監視するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順 • ブレードスロットに対する許容電力を設定するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順	• 121 ページの「コンポーネント割り当て配電を監視し設定する (Web)」
電力割当量プロパティーを設定する	Oracle ILOM 3.0.6	• 新しい電力割当量プロパティー • 電力割当量プロパティーを設定するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順	• 132 ページの「サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)」
CMM システムの電源冗長性プロパティーを設定する	Oracle ILOM 3.0.6	• CMM システムの新しい電源装置冗長性プロパティー • CMM システムで電源冗長性プロパティーを設定するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順	• 135 ページの「CMM 電源冗長性プロパティーを監視または設定する (Web)」

表: 電力管理機能の更新 (続き)

新規または拡張された機能	ファームウェアのポイントリリース	ドキュメントの変更予定	更新された Web 手順に関する参照先
サーバー電力の「Distribution」タブを「Allocation」タブに変更	Oracle ILOM 3.0.8	• Oracle ILOM Web でサーバー SP 用の「Distribution」タブを「Allocation」タブに変更 • サーバー電源割り当てプロパティーを表示するための新しい Web 手順を追加	• 121 ページの「コンポーネント割り当て配電を監視し設定する (Web)」
サーバーの「Budget」タブを「Limit」タブに変更	Oracle ILOM 3.0.8	• Oracle ILOM Web でサーバー SP 用の「Budget」タブを「Limit」タブに変更 • 電源制限プロパティーを設定するための新しい Web 手順を追加	• 132 ページの「サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)」
CMM の電力管理のため Web インタフェースのレイアウトの更新	Oracle ILOM 3.0.10	• 電力管理のための新しい最上位タブを Oracle ILOM Web インタフェースに追加 • Oracle ILOM Web で CMM 用の「Power Consumption」タブのプロパティーを変更 • Oracle ILOM Web で CMM 用の「Distribution」タブを「Allocation」タブに変更 • CMM Oracle ILOM Web インタフェースからの「Power Management Metrics」タブの削除 • ブレードスロットの許可制限 (以前は割り当て可能電力と呼ばれていた) を設定するための Web 手順を更新	• 113 ページの「システムの消費電力を監視する (Web)」 • 125 ページの「CMM コンポーネント電力割り当てを表示する」 • 130 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 で CMM のブレードスロットの許可制限を設定する」 • 125 ページの「CMM コンポーネント電力割り当てを表示する」
「Power Management」の「Statistic」タブ	Oracle ILOM 3.0.14	• 「History」タブの「Power Statistics」テーブルを「Power Management」-->「Statistics」タブに移動	• 114 ページの「電力履歴統計情報を監視する (Web)」

システムの消費電力を監視する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
監視システムの消費電力要件を確認する。	• 112 ページの「消費電力の監視の要件 (Web)」	• x86 サーバー SP • SPARC サーバー • CMM
Oracle ILOM から消費電力のプロパティーを監視する。	• 113 ページの「システムの消費電力を監視する (Web)」 • 114 ページの「個々の電源装置の消費電力を監視する (Web)」	
Oracle ILOM から消費電力の履歴を監視する。	• 114 ページの「電力履歴統計情報を監視する (Web)」	

消費電力の監視の要件 (Web)

このセクションで説明する手順を開始する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』で定義されている電力監視の用語を確認してください。
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』のシステムの消費電力メトリックに関するセクションで説明されている Web インタフェースの強化を確認してください。

注 – このセクションで説明する消費電力機能は、使用しているプラットフォームサーバーまたは CMM によっては実装されていない場合があります。このセクションで説明する消費電力機能がサーバーまたは CMM でサポートされているかどうかを判断するには、使用しているサーバーまたは CMM 用の Oracle ILOM の補足マニュアルまたは管理ガイドを参照してください。

- Oracle ILOM で提供されている消費電力メトリックにアクセスするには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0 以降が実行されている必要があります。Oracle ILOM で提供されている消費電力履歴メトリックにアクセスするには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 以降が実行されている必要があります。Oracle ILOM で提供されている拡張された消費電力のプロパティーと通知しきい値のプロパティーにアクセスするには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。

注 – 消費電力履歴は、Oracle ILOM CLI および Web インタフェースを使用して提供されます。この情報は、IPMI または SNMP を通じて使用することはできません。

▼ システムの消費電力を監視する (Web)

始める前に

- 112 ページの「消費電力の監視の要件 (Web)」を参照してください。

システムの消費電力の合計を監視するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **Oracle ILOM Web インタフェースで、次のいずれかの手順を実行します。**
   - サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「Consumption」をクリックします。
   - サーバーまたは CMM で Oracle ILOM 3.0.3 より前のファームウェアバージョンが実行されている場合は、「System Monitoring」-->「Power Management」をクリックします。

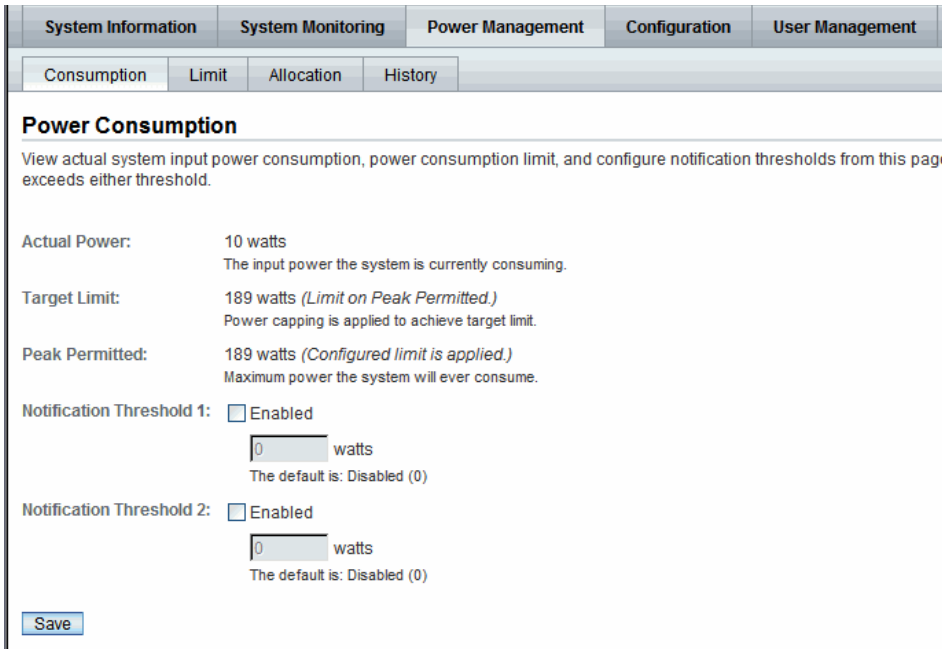
   「Power Consumption」ページが表示されます。

注 – 電力の監視機能は、この機能のプラットフォームサーバーへの実装によって異なります。この機能の、プラットフォーム固有の詳細または手順については、Oracle ILOM 補足マニュアルまたはプラットフォームの管理ガイドを参照してください。

---

3. **「Power Consumption」ページで、実電力、ターゲット制限、および許容ピークの電力メトリックを参照できます。**

注 –「Power Consumption」ページのプロパティーは、サーバー SP については Oracle ILOM 3.0.8 で、CMM については Oracle ILOM 3.0.10 で更新されました。これらのプロパティーの詳細は、『Oracle (ILOM) 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』の電力メトリックの Web 強化に関するセクションを参照してください。



▼ 個々の電源装置の消費電力を監視する (Web)

- センサーを表示する手順は、88 ページの「センサー測定値を表示する (Web)」を参照してください。

▼ 電力履歴統計情報を監視する (Web)

始める前に

- 112 ページの「消費電力の監視の要件 (Web)」を参照してください。

電力履歴統計情報を監視するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースで、次のいずれかの手順を実行します。
   - サーバーまたは CMM で Oracle ILOM 3.0.3 より前の Oracle ILOM ファームウェアが実行されている場合、「System Monitoring」-->「Power Management」をクリックして「Power History」リンクをクリックします。
   - サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「History」をクリックします。

- サーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.14 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「Statistics」をクリックして電力統計情報を表示するか、「Power Management」-->「History」をクリックして電力履歴を表示します。

電力監視履歴の用語の定義の説明については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』の電力監視に関する用語についてのセクションを参照してください。

注 – Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 で「History」タブに表示されていた「Statistic」テーブルは、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.14 では「Statistic」タブに移動しました。

CMM の電力履歴の例

Power History

Power Usage Average

Sensor Name	15 Seconds Avg (Watts)	30 Seconds Avg (Watts)	60 Seconds Avg (Watts)
/CH/VPS	1400.000	1400.000	1400.000
/CH/BL0/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL1/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL2/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL3/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL4/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL5/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL6/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL7/VPS	No Data	No Data	No Data
/CH/BL8/VPS	10.000	10.000	10.000
/CH/BL9/VPS	10.000	10.000	10.000

Power History

Sensor Name	Sample Set	Min Power Consumed (Watts)	Avg Power Consumed (Watts)	Max Power Consumed (Watts)	Time Period	Depth
/CH/VPS	0 (1 Minute Average, 1 Hour History)	1400.000 at Mar 22 01:47:24	1400.000	1400.000 at Mar 22 01:47:24	1 Minute Average	1 Hour History
/CH/VPS	1 (1 Hour Average, 14 Day History)	1282.835 at Mar 21 05:49:25	1385.788	1400.000 at Mar 22 01:49:24	1 Hour Average	14 Day History
/CH/BL0/VPS	0 (1 Minute Average, 1 Hour History)	No Data	No Data	No Data	1 Minute Average	1 Hour History

3. 特定の期間にデバイスが消費した電力のサンプルデータセットを表示するには、「Power History」テーブルの「Sample Set」列に表示されるリンクをクリックします。

サーバーの電力使用量を管理するための電力ポリシーを設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電力ポリシーと使用に関する プロパティーの設定の要件を確認する	• 116 ページの「電力ポリシーの設定要件 (Web)」	• x86 サーバー SP • SPARC サーバー
ポリシーを設定して消費電力を制御する	• 117 ページの「消費電力ポリシーを設定する (Web)」	• x86 サーバー SP (Oracle ILOM 3.0.4 より前) • SPARC サーバー
ポリシーを設定して電力上限を制御する	• 118 ページの「電力上限に対するサーバー電力ポリシーを設定する (Web)」	• x86 サーバー SP • SPARC サーバー

電力ポリシーの設定要件 (Web)

このセクションで説明する手順を開始する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』で定義されている電力監視の用語を確認してください。
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』の電力ポリシーの設定に関するセクションで説明されている Web インタフェースの強化を確認します。

注 – このセクションで説明する電力ポリシー機能は、使用しているプラットフォームサーバーによっては実装されていない場合があります。このセクションで説明する電力ポリシー機能がサーバーでサポートされているかどうかを判断するには、使用しているサーバー用の ILOM の補足マニュアルまたは管理ガイドを参照してください。

- x86 サーバー用の Oracle ILOM で消費電力ポリシーのプロパティーを設定するには、Admin (a) の役割の権限を持っていること、およびサーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 以前を実行していることが必要です。

- SPARC サーバー用の Oracle ILOM で消費電力ポリシーのプロパティーを設定するには、Admin (a) の役割の権限を持っていること、およびサーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0 以降を実行していることが必要です。
- Web インタフェースの電力上限のポリシーを設定するには、Admin (a) の役割の権限を持っていること、およびサーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以降を実行していることが必要です。

▼ 消費電力ポリシーを設定する (Web)

始める前に

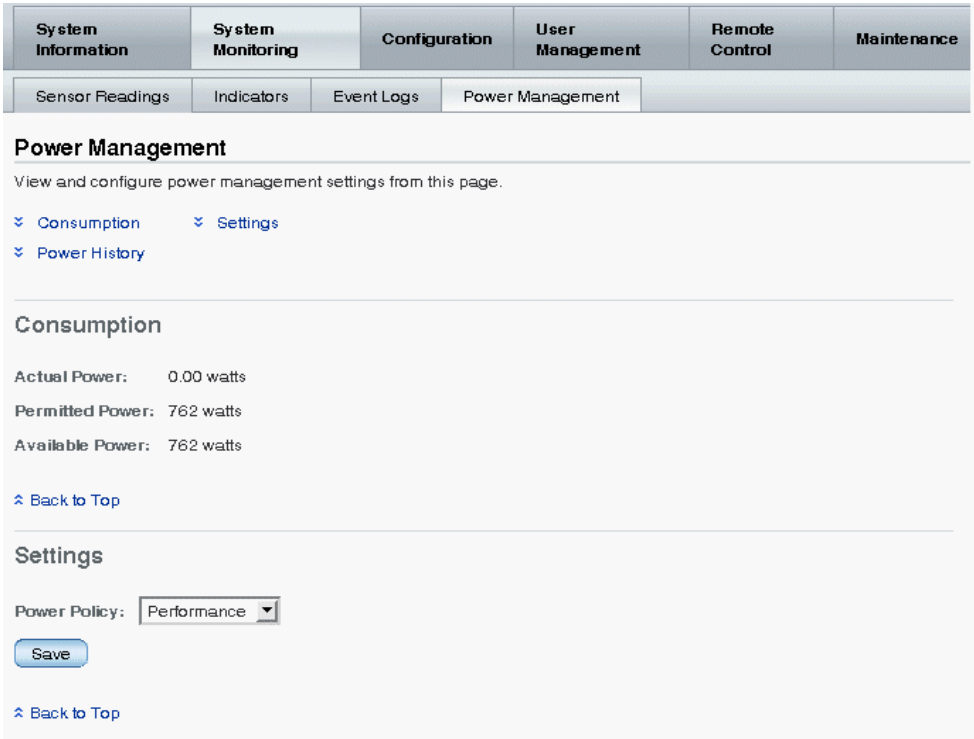
- 116 ページの「電力ポリシーの設定要件 (Web)」を参照してください。

Oracle Sun サーバーの電力消費ポリシーを設定するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。**
2. **Oracle ILOM Web インタフェースで、次のいずれかの手順を実行します。**
   - サーバーで Oracle ILOM 3.0.3 より前のファームウェアバージョンを実行している場合、「System Monitoring」-->「Power Management」をクリックして「Power Policy」設定を表示します。

注 –「Power Management Consumption」ページの「Power Policy」設定は、Oracle ILOM 3.0.4 で x86 サーバー用の Oracle ILOM Web インタフェースから削除されました。

   - SPARC サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「Settings」をクリックして「Power Policy」設定を表示します。
3. **「Power Policy」リストボックスで、「Performance」または「Elastic」をクリックします。**
   - **Performance** – システムは、利用可能なすべての電力を使用できます。
   - **Elastic** – システムの電力使用量は、現在の使用率のレベルに合わせて変化します。たとえば、作業負荷が変動した場合でも、相対利用率が常に 70% で保持されるように、システムコンポーネントに供給する電力を増減します。



注 –「Power Policy」設定は、Oracle ILOM 3.0.4 で x86 サーバー用の Web インタフェースと CLI インタフェースから削除されました。

---

4. 新しい設定を適用するには、「Save」をクリックします。

▼ 電力上限に対するサーバー電力ポリシーを設定する (Web)

始める前に

- 116 ページの「電力ポリシーの設定要件 (Web)」を参照してください。

電力上限のサーバー電力制限を設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Power Management」-->「Limit」をクリックします。

3. 「Power Limit」ページで、次の表に示すように電力上限のポリシーを設定します。

プロパティー	説明
Policy	「Policy」プロパティーでは、電力上限ポリシーを設定できます。「Policy」プロパティーでは、適用する電力上限の種類として次のいずれかを指定します。 • **Soft - Only cap if actual power exceeds target limit** − ソフト上限設定オプションを有効にすると、実電力を制限目標内に制限する際の猶予期間を設定できます。 - **System default** − このオプションを選択すると、プラットフォームサーバーで指定されているデフォルトの最適な猶予期間のプロパティー値が適用されます。 または - **Custom** − このオプションを選択すると、ユーザーが指定した猶予期間のプロパティー値が適用されます。 • **Hard - Fixed cap keeps Peak Permitted power under Target Limit** − この強制上限のオプションを有効にすると、電力上限は猶予期間なしでサーバーに常に設定されます。
Violation Actions	「Violation Actions」プロパティーを使用すると、設定されている電力ポリシーの猶予期間内に電力制限目標が達成されない場合に Oracle ILOM が実施する設定を指定できます。 次のいずれかのアクションを指定できます。 • **None** − このオプションを有効にすると、電力制限目標が達成されなかった場合に、Oracle ILOM に状態エラーのメッセージが表示され、指定された電力制限を達成できないことが通知されます。 または • **Hard Power Off** − このオプションを有効にすると、電力制限が達成されなかった場合に、Oracle ILOM で次のアクションが実行されます。 * 状態エラーのメッセージを表示します。 * サーバーの強制電源切断を開始します。 **注 –**「Violation Actions」のデフォルトオプションは「None」です。

注 – 電力上限のパフォーマンスを最適化するために、すべての詳細なサーバー電力制限プロパティーでデフォルト値を使用することをお勧めします。

---

4. 電力制限プロパティーの変更を適用するには、「Save」をクリックします。

消費電力通知しきい値の設定 (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM から消費電力通知しきい値を表示または設定する	• 120 ページの「Web インタフェースを使用して通知しきい値を表示および設定する」	• x86 サーバー • SPARC サーバー • CMM

▼ Web インタフェースを使用して通知しきい値を表示および設定する

始める前に

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』で定義されている電力監視の用語を確認してください。
- プラットフォームサーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降が実行されている必要があります。
- 消費電力設定変数を変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

1. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースページで、「Power Management」-->「Consumption」をクリックします。

   「Power Consumption」ページが表示されます。
3. 「Power Consumption」ページで、次の手順を実行します。
   a. 「Notification Threshold (1)」または「(2)」の「Enabled」チェックボックスをクリック (選択) します。
   b. 使用しているシステムの要件に基づいて、「Watts」テキストボックスで通知しきい値のワット数を指定します。
   c. 変更を適用するには、「Save」をクリックします。

コンポーネント割り当て配電を監視し設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
コンポーネント電力割り当ての設定要件を表示する	• 121 ページの「電力割り当て配電の要件 (Web)」	• x86 サーバー • SPARC サーバー • CMM
サーバーまたは CMM のコンポーネント割り当てメトリックを表示する	• 122 ページの「サーバーコンポーネントの電力割り当てを表示する (Web)」 • 125 ページの「CMM コンポーネント電力割り当てを表示する」	• x86 サーバー • SPARC サーバー • CMM
シャーシのブレードスロットの許容電力を設定する	• 128 ページの「Oracle ILOM 3.0.6 で CMM のブレードスロットの許容電力を設定する」 • 130 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 で CMM のブレードスロットの許可制限を設定する」	• CMM

電力割り当て配電の要件 (Web)

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』で定義されている電力監視の用語を確認してください。
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – 概念ガイド』でコンポーネントの割り当て配電に関する概念情報を確認してください。
- プラットフォームサーバーまたは CMM で、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降が実行されている必要があります。このセクションで説明する手順の中には、サーバー SP または CMM で Oracle ILOM 3.0.10 以降を実行していることが必要なものもあります (記載がある場合)。
- 消費電力または割り当て設定プロパティー値を変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

注 – ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 から、サーバー SP の「Power Management」-->「Distribution」タブは「Allocation」に名前が変更されました。Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 から、CMM の「Power Management」-->「Distribution」タブは「Allocation」に名前が変更されました。

▼ サーバーコンポーネントの電力割り当てを表示する (Web)

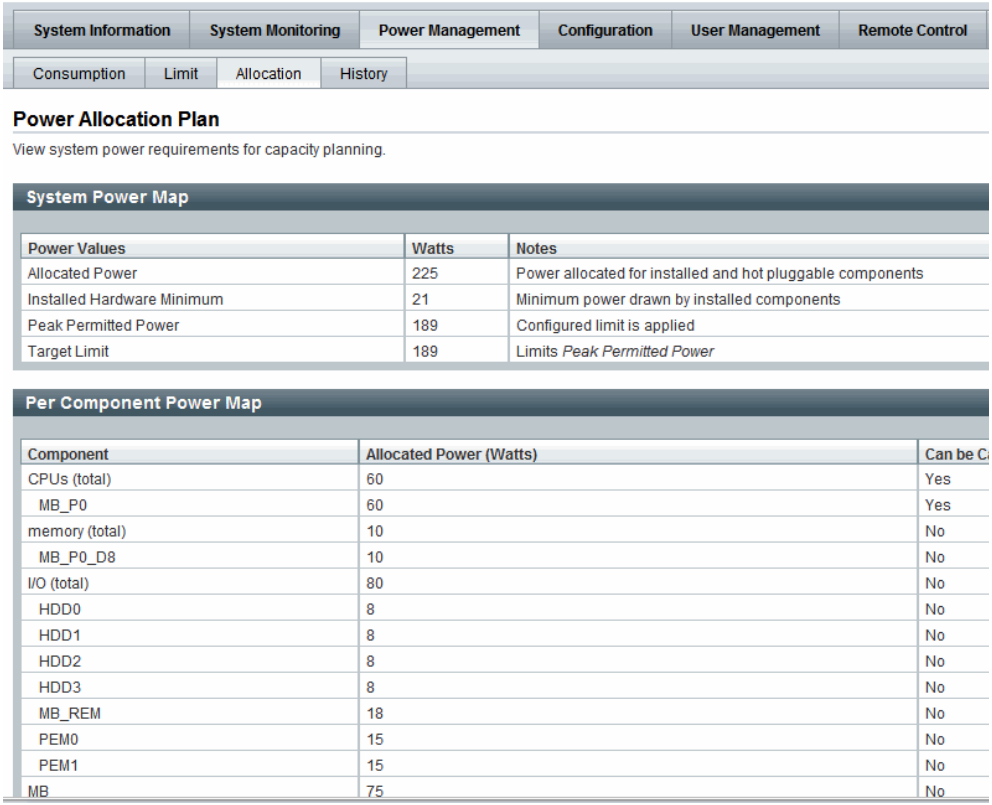
始める前に

- 121 ページの「電力割り当て配電の要件 (Web)」を参照してください。

サーバーコンポーネンのト電力割り当てを表示するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースで、次のいずれかの手順を実行します。
   - サーバーで ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 を実行している場合、「Power Management」-->「Distribution」をクリックします。
   - サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「Allocation」をクリックします。

   「Power Distribution」または「Power Allocation Plan」ページが表示されます。



3. **電力割り当てテーブルで、電力容量計画用の次のシステム電力要件を表示します。**
   - **System Power Map** – このテーブルは、システム電力プロパティー「Allocated Power」、「Installed Hardware Minimum」、「Peak Permitted Power」、および「Target Limit」に割り当てられた電力の合計を示す値 (ワット単位) を反映しています。
   - **Per Component Power Map** – このテーブルは、サーバーコンポーネントカテゴリ (メモリーなど) およびサーバーコンポーネント (ME_PO_D0 など) ごとに割り当てられた電力を示す値 (ワット単位) を反映しています。また、割り当てられた電力値を制限できるかどうかも示します。

▼ Oracle ILOM 3.0.8 でサーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)

始める前に

- 121 ページの「電力割り当て配電の要件 (Web)」を参照してください。

Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以降を実行しているサーバーの電力制限プロパティーを設定するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。**
2. **Oracle ILOM Web インタフェースで、「Power Management」-->「Limit」タブをクリックします。**

注 –「Power Management」-->「Distribution」タブは Oracle ILOM 3.0.8 から「Limit」に名前が変更されました。

「Power Limit」ページが表示されます。

3. 「Power Limit」ページで、次の電力制限プロパティーを表示または変更します。

電力制限プロパティー	説明
Power Limiting	電力制限を設定できるようにするには、このプロパティーを有効にします。
Target Limit	「Target Limit」をワット単位またはパーセントで設定します。この値は、「Installed Hardware Minimum Power」と「Allocated Power」の間の範囲を反映しているはずです。 **注 –**「Installed Hardware Minimum Power」と「Allocated Power」の値は「Power Management」-->「Allocation」タブで参照できます。
Policy	「Policy」プロパティーでは、電力上限ポリシーを設定できます。「Policy」プロパティーでは、適用する電力上限の種類として次のいずれかを指定します。 • **Soft - Only cap if actual power exceeds target limit** – ソフト上限設定オプションを有効にすると、実電力を制限目標内に制限するときの猶予期間を設定できます。 - **System Default** – このオプションを選択すると、プラットフォームサーバーで指定されているデフォルトの最適な猶予期間のプロパティー値が適用されます。 または - **Custom** – このオプションを選択すると、ユーザーが指定した猶予期間のプロパティー値が適用されます。 • **Hard - Fixed cap keeps Peak Permitted power under Target Limit** – 強制上限オプションを有効にすると、電力上限が猶予期間なしで常に適用されます。
Violation Actions	「Violation Actions」プロパティーを使用すると、設定されている猶予期間内に電力制限目標を達成できない場合に Oracle ILOM が実施する設定を指定できます。 次のいずれかのアクションを指定できます。 • **None** – このオプションを有効にすると、電力制限目標が達成されなかった場合に、Oracle ILOM に状態エラーのメッセージが表示され、指定された電力制限を達成できないことが通知されます。 または • **Hard Power Off** – このオプションを選択し、電力制限目標が達成されない場合、Oracle ILOM で次のアクションが実行されます。 * 状態エラーのメッセージを表示します。 * サーバーの強制電源切断を開始します。 **注 –**「Violation Actions」のデフォルトオプションは「None」です。

注 – 電力上限のパフォーマンスを最適化するために、すべての詳細なサーバー電力制限プロパティーでデフォルト値を使用することをお勧めします。

4. 電力制限プロパティーの変更を適用するには、「Save」をクリックします。

▼ CMM コンポーネント電力割り当てを表示する

始める前に

- 121 ページの「電力割り当て配電の要件 (Web)」を参照してください。

CMM コンポーネント電力割り当てを Oracle ILOM Web インタフェースで表示するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **CMM Web インタフェースページの左区画で CMM を選択し、次のいずれかの手順を実行します。**
   - CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「Distribution」タブを選択します。
   - CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「Allocation」タブを選択します。

注 – CMM の「Power Management」-->「Distribution」タブは Oracle ILOM 3.0.10 から「Allocation」に名前が変更されました。

CMM の「Power Allocation Plan」ページが表示されます。

System Information | System Monitoring | Power Management | Storage | Configuration | User Management | Remote Control | Maintenance

Consumption | Allocation | Redundancy | History

Power Allocation Plan

View system power requirements for capacity planning and configure the maximum power granted to blades at power on.

System Power Specification

Power Values	Watts	Notes
Power Supply Maximum	12800	Maximum power the available PSUs can draw
Redundant Power	6400	Amount of *Power Supply Maximum* reserved by redundancy policy
Peak Permitted	6400	Maximum power the system is permitted to consume (redundancy policy is applied)
Allocated Power	3757	Sum of *Allocated Power* for chassis components and *Granted Power* for blades

Blade Power Map

Blades request *Required Power* at blade power on, and in response to changes in power capping configuration. If the requested power is not granted, the blade will not power on.

Blade Slot Power Summary

Power Values	Watts	Notes
Grantable Power	2643	Remaining power the system can grant to blades without exceeding *Peak Permitted*
Unfilled Grant Requests	1356	Sum of *Required Power* for blades that have not yet been granted power

Blade Power Grants

Edit

	Blade Slot	Grant Limit (Watts)	Required Power (Watts)	Granted Power (Watts)
-	TOTAL	-	1919 (total)	563 (total)
○	0	1200	183	183
○	1	900	Empty Slot	-
○	2	1100	Empty Slot	-
○	3	1200	Empty Slot	-
○	4	1200	234	234
○	5	1200 (Ignored - auto-powered I/O blade)	146	146
○	6	1200	389	0
○	7	1200	371	0
○	8	1200	371	0
○	9	1200	225	0

Chassis Component Slot Power Map

Component	Allocated Power (Watts)
TOTAL	3158 (total)
Reserved for Auto-Powered I/O Blades	1022
NEMs (total)	60 (total)
NEM0	60
NEM1	0
Fans (total)	456 (total)
FM0	64
FM1	64
FM2	64
FM3	64
FM4	64
FM5	64
PS0_FAN0	18
PS0_FAN1	18

3. CMM の「Power Allocation Plan」ページで、電力割り当ての値を表示します。

- Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降では、CMM 電力割り当ての値は次のように表示されます。

更新されたプロパティー名	詳細
Allocated Power	システムシャーシ内のすべての電力消費 CMM コンポーネントに割り当てられた電力の合計を示す値 (ワット単位)。
Allocatable Power	CMM がブレードスロットに割り当て可能な残りの電力の合計 (ワット単位)。
Blade Slot Power Distribution	次の電力割り当ての値を表示します。 • **Allocated Power** − このスロットのサーバーモジュール (ブレード) に割り当てられた電力の合計 (ワット単位)。CMM は常に、I/O サーバーモジュールが存在するかどうかに関係なく、未管理の I/O サーバーモジュールを処理するために十分な電力を割り当てます。 • **Permitted Power** − このブレードスロットのサーバーモジュールに許可された最大電力割り当て。 **注 –** サーバーモジュールスロットに割り当てられた許容電力を変更するには、128 ページの「Oracle ILOM 3.0.6 で CMM のブレードスロットの許容電力を設定する」を参照してください。
Component Power Distribution	システム内のブレード以外の各コンポーネントに割り当てられた電力を表示します。

- Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降では、CMM 電力割り当ての値は次のように表示されます。

更新されたプロパティー名	詳細
Grantable Power (名前が変更されたプロパティー)	Oracle ILOM 3.0.6 の「Allocatable Power」は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 では「Grantable Power」に名前が変更されました。「Grantable Power」は、CMM が許可制限を超えることなくブレードスロットに割り当て可能な残りの電力の合計 (ワット単位) を示します。
Grant Limit (名前が変更されたプロパティー)	Oracle ILOM 3.0.6 の「Permitted Power」は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 では「Grant Limit」に名前が変更されました。「Grant Limit」は、システムがブレードスロットに許可する最大電力を表します。ブレードの許可制限を設定する手順については、128 ページの「Oracle ILOM 3.0.6 で CMM のブレードスロットの許容電力を設定する」を参照してください。
Granted Power (名前が変更されたプロパティー)	Oracle ILOM 3.0.6 の「Allocated Power」は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 では「Granted Power」に名前が変更されました。「Granted Power」は、単一のサーバーコンポーネント別 (メモリーモジュールなど)、サーバーコンポーネントのカテゴリ別 (すべてのメモリーモジュール)、またはすべてのサーバー電力消費コンポーネント別のいずれかで、最大消費電力の合計を表します。

▼ Oracle ILOM 3.0.6 で CMM のブレードスロットの許容電力を設定する

始める前に

- 121 ページの「電力割り当て配電の要件 (Web)」を参照してください。

ブレードスロットの許容電力を Oracle ILOM Web インタフェースで設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM CMM の Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースのページの左区画で、「CMM」をクリックし、「Power Management」-->「Distribution」をクリックします。

3. 「Blade Slot Power Distribution」テーブルまでスクロールダウンします。

Blade Slot Power Distribution

Edit

	Blade Slot	Allocated Power (Watts)	Permitted Power (Watts)
-	Blade Slots (total)	3175	-
○	BL0	435	1200
○	BL1	410	1000
○	BL2	268	1200
○	BL3	309	1200
○	BL4	268	1200
○	BL5	506	1200
○	BL6	146	1200
○	BL7	265	1200
○	BL8	300	1200
○	BL9	268	1200

4. 「Blade Slot Power Distribution」テーブルで、次の手順を実行します。

   a. 変更するブレードスロットの隣にあるラジオボタンを有効にします。

   b. 「Edit」をクリックします。

      「Allocated Power」および「Permitted Power」の値に関する情報を示すダイアログが表示されます。

Permitted Power controls power allocated to server blades. It can be set to 0 (to prevent blade power on), or up to the maximum possible per slot power consumption (1200 watts).

Allocated Power: 410

Permitted Power: 1200 watts

Save Close

   c. ダイアログで「Permitted Power」の値を変更し、「Save」をクリックします。

注 – サーバーモジュールに電源が投入されないようにするため、「Permitted Power」の値を 0 に設定することができます。

▼ Oracle ILOM 3.0.10 で CMM のブレードスロットの許可制限を設定する

始める前に

- 121 ページの「電力割り当て配電の要件 (Web)」を参照してください。

ブレードスロットの許可制限を Oracle ILOM CMM Web インタフェースで設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM CMM の Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースページの左区画で CMM を選択し、Web インタフェースページの右区画で「Power Management」-->「Allocation」タブを選択します。

   CMM の「Power Allocation」ページが表示されます。
3. 「Blade Slot Grants」テーブルまでスクロールダウンします。

Blade Power Grants

Edit

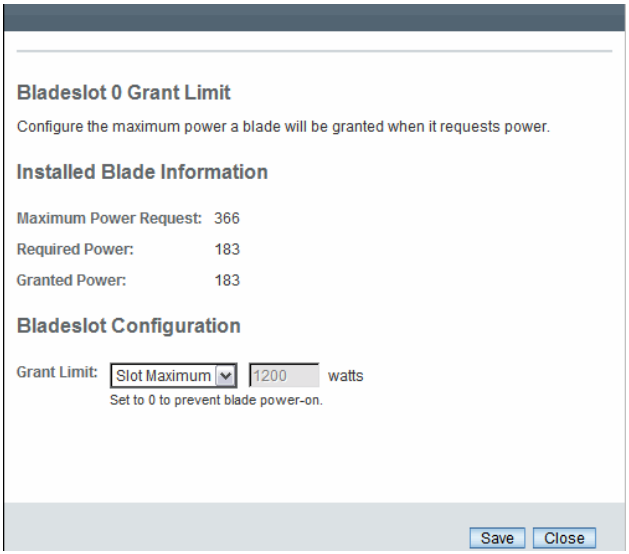
	Blade Slot	Grant Limit (Watts)	Required Power (Watts)	Granted Power (W
-	TOTAL	-	1919 (total)	952 (total)
○	0	1200	183	183
○	1	800	Empty Slot	-
○	2	1100	Empty Slot	-
○	3	1200	Empty Slot	-
○	4	1200	234	234
○	5	1200 (ignored - auto-powered I/O blade)	146	146
○	6	1200	389	389
○	7	1200	371	0
○	8	1200	371	0
○	9	1200	225	0

4. 「Blade Slot Grants」テーブルで、次の手順を実行します。

   a. 変更するブレードスロットの隣にあるラジオボタンを有効にします。

   b. 「Edit」をクリックします。

      ブレードの電力設定情報を示すダイアログが表示されます。



   c. 「Grant Limit」リストボックスで、デフォルトのスロット最大許可制限（「1200 watts」）を使用するよう選択するか、「Custom」をクリックして電力許可値を入力し、「Save」をクリックします。

注 – ブレードに電源が投入されないようにするため、「Grant Limit」の値を 0 に設定することができます。

サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォームサポート機能
サーバー電力制限プロパティーを Oracle ILOM から管理する	• 132 ページの「サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)」	• x86 サーバー SP • SPARC サーバー

▼ サーバーの電力制限プロパティーを設定する (Web)

始める前に

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』で定義されている電力監視の用語を確認してください。
- 『Oracle ILOM 日常的な管理 － 概念ガイド』でサーバーの電力制限 (またはサーバーの電力割当量) に関する概念情報を確認してください。
- サーバー電力制限プロパティーを設定するには、プラットフォームサーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降が実行されている必要があります。
- 電力管理設定プロパティー値を変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

注 – Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 から、サーバー SP の「Power Management」-->「Budget」タブは「Limit」に名前が変更されました。

---

1. **Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。**
2. **Oracle ILOM Web インタフェースで、次のいずれかの手順を実行します。**
   - プラットフォームサーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 を実行している場合、「Power Management」-->「Budget」をクリックします。
   - プラットフォームサーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以降が実行されている場合、「Power Management」-->「Limit」をクリックします。

3. 「Power Limit」ページで、次の表に示すように電力制限プロパティーを表示または変更します。

電力制限プロパティー	説明
Power Limiting	電力制限を設定できるようにするには、このプロパティーを有効にします。 **注 –**「Power Limiting」は、Oracle ILOM 3.0.6 では「Budget」タブの「Activation State」という名前でした。
Target Limit	「Target Limit」をワット単位またはパーセントで設定します。この値は、「Installed Hardware Minimum Power」と「Allocated Power」の間の範囲を反映しているはずです。 **注 –** Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 では、「Target Limit」の「Budget」タブオプションは「Power Limit」という名前でした。 **注 –**「Installed Hardware Minimum Power」と「Allocated Power」の値は「Power Management」-->「Allocation」タブで参照できます。
Status Error Message	「Status Error Message」読み取り専用プロパティーは、設定された電力制限を達成できなかった場合にのみ「Limit」ページに表示されます。 **注 –**「Status Error Message」読み取り専用プロパティーは、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 では「Budget」タブの「Status」という名前でした。

電力制限プロパティー	説明
Policy	「Policy」プロパティーでは、電力上限ポリシーを設定できます。「Policy」プロパティーでは、適用する電力上限の種類として次のいずれかを指定します。 • **Soft - Only cap if actual power exceeds Target Limit** − このソフト上限設定オプションを有効にすると、実電力を制限目標内に制限するときの猶予期間を設定できます。 **- System Default** − このオプションを選択すると、プラットフォームサーバーで指定されているデフォルトの最適な猶予期間のプロパティー値が適用されます。 または **- Custom** − このオプションを選択すると、ユーザーが指定した猶予期間のプロパティー値が適用されます。 • **Hard - Fixed cap keeps Peak Permitted power under Target Limit** − この強制上限オプションを有効にすると、電力上限が猶予期間なしで常に適用されます。 **注 –**「Policy」は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 では「Budget」タブの「Time Limit」という名前でした。
Violation Actions	「Violation Actions」プロパティーを使用すると、設定されている猶予期間内に電力制限目標が達成されない場合に Oracle ILOM が実施する設定を指定できます。 次のいずれかのアクションを指定できます。 • **None** − このオプションを有効にすると、電力制限目標が達成されなかった場合に、Oracle ILOM に状態エラーのメッセージが表示され、指定された電力制限を達成できないことが通知されます。 または • **Hard-Power Off** − このオプションを有効にすると、電力制限が達成されなかった場合に、Oracle ILOM で次のアクションが実行されます。 * 状態エラーのメッセージを表示します。 * サーバーの強制電源切断を開始します。 **注 –**「Violation Actions」のデフォルトオプションは「None」です。

注 – 電力上限のパフォーマンスを最適化するために、すべての詳細なサーバー電力制限プロパティーでデフォルト値を使用することをお勧めします。

4. **電力制限プロパティーの変更を適用するには、「Save」をクリックします。**

CMM 電源冗長性プロパティーを監視または設定する (Web)

説明	リンク	プラットフォームサポート機能
CMM 電源装置の冗長性プロパティーを Oracle ILOM から管理する	• 135 ページの「CMM の電源装置の冗長性プロパティーを表示または設定する (Web)」	• CMM

▼ CMM の電源装置の冗長性プロパティーを表示または設定する (Web)

始める前に

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』で定義されている電力監視の用語を確認してください。
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念ガイド』で CMM システムの電源装置の冗長性に関する概念情報を確認します。
- CMM の電源装置の冗長性プロパティーを設定するには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降が実行されている必要があります。
- 電力管理設定プロパティー値を変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

CMM の電源装置の冗長性プロパティー値を表示または設定するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM CMM の Web インタフェースにログインします。**
2. **CMM Web インタフェースページの左区画で「CMM」をクリックし、Web インタフェースページの右区画で「Power Management」-->「Redundancy」タブを選択します。**

   「Power Management Redundancy」ページが表示されます。

3. 「Redundancy」ページで、プロパティーを表示または設定します:
   - **Power Supply Redundancy Policy** − 冗長用に割り当てる電源装置の数を選択します。
     - **None** − 電源装置を予約しません。
     - **N+N** − 電源装置の半数を予約します。

注 – 冗長ポリシーを変更すると、サーバーモジュール (ブレード) に割り当てるために CMM に許可された総電力に影響を与えます。シャーシの「`Permitted Power`」は、使用可能な電源装置から提供される電力から使用可能な冗長電力を引いた値に設定されます。また、システムで使用可能な冗長電力がない場合は、1 つの電源装置が失われると、システムは「`Permitted Power`」を削減します。システムが許容電力 (Permitted Power) をすでに割り当てられている電力以下に落とす場合、速やかにサーバーモジュールをオフにする手段をとり、割り当てられた電力を削減する必要があります。

   - **Redundant Power** − この値はシステムによって提供されます。割り当てられていない使用可能な電力を表します。

4. 変更を適用するには、「Save」をクリックします。

リモートホストのリダイレクションの管理と Oracle ILOM リモートコンソールのセキュリティー保護 (Web)

説明	リンク
Oracle ILOM リモートコンソールの使用手順の検索についての詳細。	• 138 ページの「リモートホスト KVMS リダイレクションの Web 手順」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、リモートホスト管理オプション
- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、リモートホスト Storage Redirection の管理
- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、Oracle ILOM リモートコンソールのセキュリティー保護

リモートホスト KVMS リダイレクションの Web 手順

Oracle ILOM リモートコンソールは、Web インタフェースから利用でき、キーボード、ビデオ、マウス、ストレージデバイスのリモートリダイレクションを提供します。Oracle ILOM リモートコンソールを使用するには、Oracle ILOM で Console (c) の役割を有効にする必要があります。

ILOM 3.0.16 から、Oracle ILOM リモートコンソールの使用方法の説明情報は『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール － CLI および Web ガイド』に移動しました。Oracle ILOM リモートコンソールの使用手順の詳細は、次のトピックを参照してください。

- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、Oracle ILOM リモートコンソールをサポートするための初期設定タスク
- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、Oracle ILOM リモートコンソールを使用したデバイスのリダイレクト
- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、ILOM リモートコンソールのセキュリティー保護

リモートホストの電源状態を管理する (Web)

説明	リンク
リモートサーバーモジュールまたは CMM の電源状態を制御する	• 140 ページの「リモートサーバー SP または CMM から電源状態を制御する (Web)」
x86 ホストの起動デバイス設定を制御する	• 142 ページの「x86 システムの起動デバイスのホスト制御を管理する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、リモートホスト管理オプション
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、リモートホストの電源状態の管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、BIOS 起動デバイスの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、ホストサーバーコンソールの管理

リモートサーバー SP または CMM から電源状態を制御する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
リモートホストサーバーの電源状態を制御する	• 140 ページの「サーバー SP を使用してリモートホストサーバーの電源状態を制御する (Web)」	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー
リモート CMM の電源状態を制御する	• 141 ページの「CMM Web インタフェースを使用してリモートシャーシの電源状態を制御する」	• CMM

▼ サーバー SP を使用してリモートホストサーバーの電源状態を制御する (Web)

始める前に

- リモートホストサーバーの電源状態を制御するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

リモートホストサーバーの電源状態を制御するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Remote Power Control」タブをクリックします。**

   「Server Power Control」ページが表示されます。
3. **「Server Power Control」ページから、「Action」メニューで次のいずれかのオプションを選択することにより、ホストサーバーの電源状態をリモート制御できます。**
   - **Reset** — リモートホストサーバーをただちに再起動します。
   - **Immediate Power Off** — リモートホストサーバーの電源をただちに切断します。
   - **Graceful Shutdown and Power Off** — リモートホストサーバーの電源を切る前に OS を正常に停止します。
   - **Power On** (デフォルト) — リモートホストサーバーの電源を投入します。
   - **Power Cycle** — リモートホストサーバーの電源をただちに切断し、そのあとでリモートホストサーバーの電源を投入します。

▼ CMM Web インタフェースを使用してリモートシャーシの電源状態を制御する

始める前に

- リモートシャーシおよびそのシステムコンポーネントの電源状態を制御するには、admin (a) の役割を有効にする必要があります。

シャーシとそのシステムコンポーネントの電源状態を制御するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM CMM の Web インタフェースにログインします。
2. 「Remote Power Control」タブをクリックします。

   「Server Power Control」ページが表示されます。
3. 「CMM Remote Power Control」ページから、「/CH」(シャーシ) または「/CH/BL#」(個々のブレードスロット番号) の横にあるラジオボタンを選択し、「Action」メニューで次のいずれかのオプションを選択することにより、シャーシとそのシステムコンポーネントの電源状態をリモート制御できます。
   - **Immediate Power Off** − ブレードを含むシャーシコンポーネントの電源をただちに切断します。
   - **Graceful Shutdown and Power Off** − ブレードで OS を正常に停止してからシステムコンポーネントの電源を切ります。
   - **Power On** − システムポリシーに従って、シャーシとブレードの電源を投入します。
   - **Power Cycle** − ブレードの電源を切断し、そのあとでシステムの電源を自動的に再投入します。「/CH」では選択できません。

x86 システムの起動デバイスのホスト制御を管理する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	• 142 ページの「ホスト起動デバイスの要件 (Web)」	• x86 システムサーバー SP
BIOS でのホスト起動デバイスの順序をオーバーライドする	• 142 ページの「ホスト起動デバイスを構成する (Web)」	

ホスト起動デバイスの要件 (Web)

- ホスト起動デバイス構成のプロパティー値を変更するには、Oracle ILOM で Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。
- Oracle ILOM ホスト制御の BIOS 起動デバイス機能は、x86 システム SP でサポートされています。この機能は、CMM または SPARC システム SP ではサポートされません。SPARC システムでの Oracle ILOM ホスト制御起動オプションの詳細は、プラットフォームサーバーの Oracle ILOM 補足マニュアルまたはプラットフォームの管理ガイドを参照してください。

▼ ホスト起動デバイスを構成する (Web)

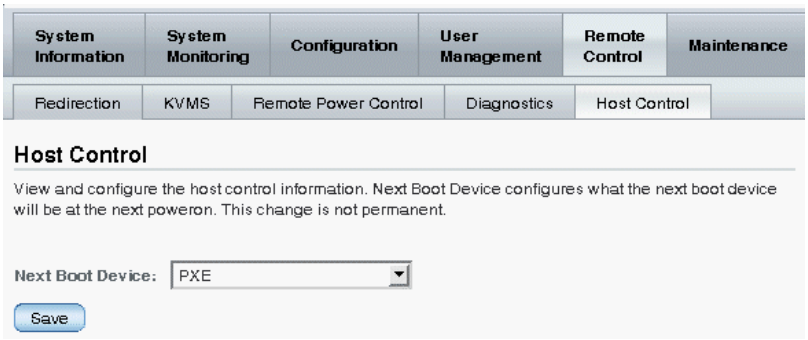
始める前に

- 142 ページの「ホスト起動デバイスの要件 (Web)」を参照してください。

Oracle ILOM Web インタフェースから BIOS の起動デバイス設定を上書きするには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Remote Control」-->「Host Control」を選択します。**

   「Host Control」ページが表示されます。



3. 「Host Control」ページで、「Next Boot Device」リストボックスをクリックして起動デバイスオプションを指定します。

   指定できる起動デバイスオプションは次のとおりです。

   - **default** − 値を default に設定すると、BIOS 設定はオーバーライドされません。`default` に設定すると以前の設定内容もすべてクリアされます。
   - **pxe** − 値を pxe に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは PXE の起動指定に従ってネットワークから起動します。
   - **disk** − 値を disk に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、BIOS が選択した最初のディスクから起動します。どのディスクが選ばれるかは、構成よって異なります。通常、ホストではこのオプションがデフォルトで使用されるため、このオプションを選択してもホストの動作は変わらない可能性があります。
   - **diagnostic** − 値を diagnostic に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは診断パーティションを起動します (構成されている場合)。
   - **cdrom** − 値を cdrom に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは接続されている CD-ROM または DVD デバイスから起動します。
   - **bios** − 値を bios に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは BIOS 設定画面を起動します。

4. 変更を適用するには、「Save」をクリックします。

SPARC サーバーでの TPM と LDom の状態を管理する (Web)

説明	リンク
SPARC サーバー上の TPM の状態を制御する	• 146 ページの「SPARC サーバーの TPM の状態を制御する (Web)」
SPARC サーバー上の論理ドメイン (LDom) の設定を管理する	• 147 ページの「SPARC サーバーで LDom 設定を管理する (Web)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、リモートホスト管理オプション
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、SPARC サーバーでの TPM および LDom 状態の管理

SPARC サーバーの TPM の状態を制御する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
SPARC サーバー上の TPM の状態を制御する	• 146 ページの「SPARC サーバーの TPM の状態を制御する (Web)」	• SPARC システムサーバー

▼ SPARC サーバーの TPM の状態を制御する (Web)

始める前に

- Oracle ILOM の TPM 機能は SPARC サーバーでのみ使用できます。
- SPARC サーバーで、TPM をサポートするバージョンの Oracle Solaris が実行されている必要があります。

  Oracle Solaris での TPM のサポートの設定に関する詳細は、Oracle Solaris のドキュメントまたは使用しているサーバーに付属しているプラットフォームのドキュメントを参照してください。
- SPARC サーバー SP で Oracle ILOM 3.0.8 以降のバージョンを使用している必要があります。
- TPM 設定の変更には、Oracle ILOM で Reset and Host Control (`r`) の役割を有効にしておく必要があります。

SPARC サーバーで TPM 状態を制御するには、次の手順に従います。

1. **Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。**
2. **「Remote Control」-->「TPM」タブをクリックします。**

   「TPM Settings」ページが表示されます。
3. **「TPM Settings」ページで、次のいずれかの処理を実行します。**
   - TPM の状態を有効にし、SPARC サーバーの次の電源投入時にサーバーでこの状態 (有効) をアクティブにするには、次の各 TPM 設定で「True」を選択します。
     - **Enable** − 「Enable True」チェックボックスをクリック (選択) して、SPARC サーバー上の TPM の状態を有効にします。
     - **Activate** − 「Activate True」チェックボックスをクリック (選択) して、SPARC サーバーの次の電源投入時にサーバーで設定の変更をアクティブにします。

または

- SPARC サーバーの次の電源投入時にサーバーで TPM の有効な状態を消去する (無効にする) には、次の 3 つの TPM 設定で「True」を選択します。
  - **Enable** − 「Enable True」チェックボックスを選択解除して、SPARC 上の TPM の状態を無効にします。
  - **Activate** − 「Activate True」チェックボックスをクリック (選択) して、SPARC サーバーで設定の変更をアクティブにします。
  - **Forceclear** − 「Forceclear True」チェックボックスをクリック (選択) して、SPARC サーバーの次の電源投入時に TPM の有効な状態をサーバーから消去します。

SPARC サーバーで LDom 設定を管理する (Web)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	• 148 ページの「SPARC LDom 設定の要件 (Web)」	• SPARC システムサーバー
格納されている LDom 設定の Oracle ILOM 設定を表示および管理する	• 148 ページの「SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 設定を表示する (Web)」 • 149 ページの「格納されている LDom 設定に対してホストの電源を設定する (Web)」 • 150 ページの「格納されている LDom 設定に対してホストの電源を指定する (Web)」	

SPARC LDom 設定の要件 (Web)

格納されている LDom 設定の Oracle ILOM 設定を表示および管理するには、次の要件を満たす必要があります。

- 適切な Oracle ILOM ポイントリリースファームウェアがインストールされている SPARC サーバーの Oracle ILOM にアクセスする必要があります (次の「注」を参照)。

注 – SPARC T3 シリーズのサーバーから LDom のターゲットおよびプロパティーを表示するには、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.12 以降が必要です。次の場合は Oracle ILOM ファームウェアバージョン 2.0.0 以降が必要です。(1) ホスト SPARC サーバーで使用する LDom 設定を指定する場合。(2) ホスト SPARC サーバーから制御ドメインの起動プロパティー値を管理する場合。

- Oracle VM Server for SPARC (Logical Domains Manager) 2.0 以降のソフトウェアがホスト SPARC サーバーにインストールされている必要があります。
- ホスト SPARC サーバーに LDom 設定が格納されている必要があります。ホスト SPARC サーバーで LDom 設定を作成して保存する方法については、『Logical Domains 1.3 管理ガイド』を参照してください。
- LDom ホストドメインのプロパティー値の変更には、Oracle ILOM で Remote Host Reset and Host Control (`r`) の役割を有効にしておく必要があります。

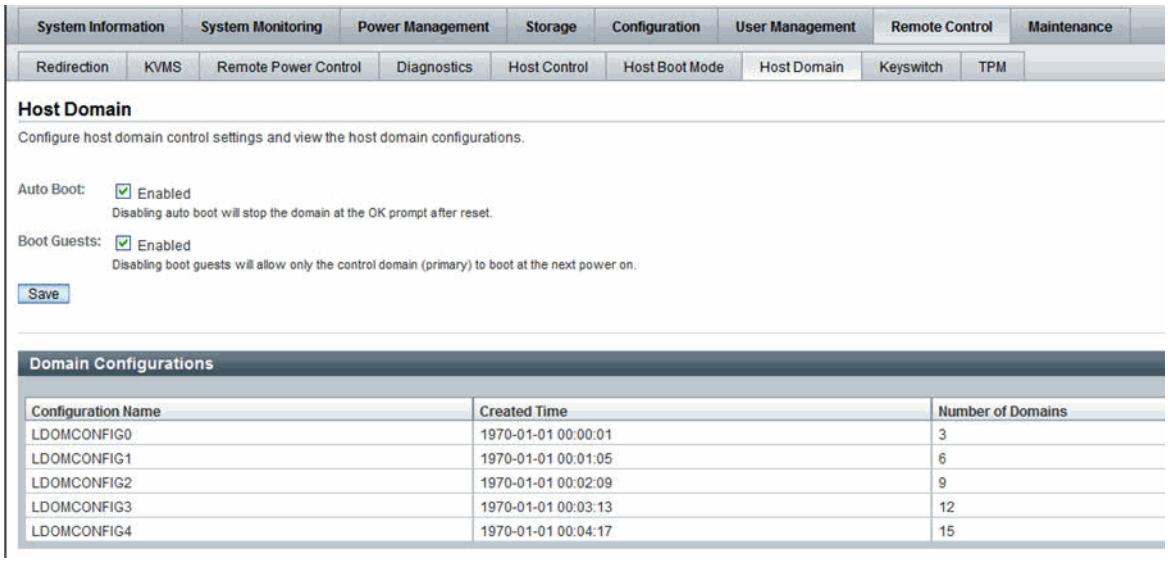
▼ SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 設定を表示する (Web)

始める前に

- 148 ページの「SPARC LDom 設定の要件 (Web)」を参照してください。

SPARC T3 シリーズサーバーで LDom 設定を表示するには、次の手順に従います。

1. SPARC T3 シリーズのサーバーで Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースで、「Remote Host」-->「Host Domains」を選択します。
3. 「Domain Configurations」テーブルに、LDom Manager に現在格納されている LDom 設定のリストが表示されます。



4. 「Host Domain」ページで行った変更を確定するには、「Save」をクリックします。

▼ 格納されている LDom 設定に対してホストの電源を設定する (Web)

始める前に

- 148 ページの「SPARC LDom 設定の要件 (Web)」を参照してください。

ホスト電源を格納されている LDom 設定に設定するには、次の手順に従います。

1. SPARC サーバーで Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースで、「Remote Host」-->「Host Domains」を選択します。
3. 「Host Domain」ページで、「Auto Boot」または「Boot Guest」のチェックボックスを有効または無効にします。

   デフォルトでは、ホスト制御ドメインおよびゲストドメインの「Auto Boot」チェックボックスは「`Enabled`」に設定されおり、ドメインはサーバーが電源投入またはリセットされたときに起動します。

   制御ドメインの `auto-boot` プロパティー値を無効にすると、次の電源投入またはリセット後にドメインは自動的に再起動せず、OpenBoot の `ok` プロンプトで停止します。ゲストドメインの boot_guests プロパティー値を無効にすると、次の電源投入またはリセット後にゲストドメインが起動しなくなります。

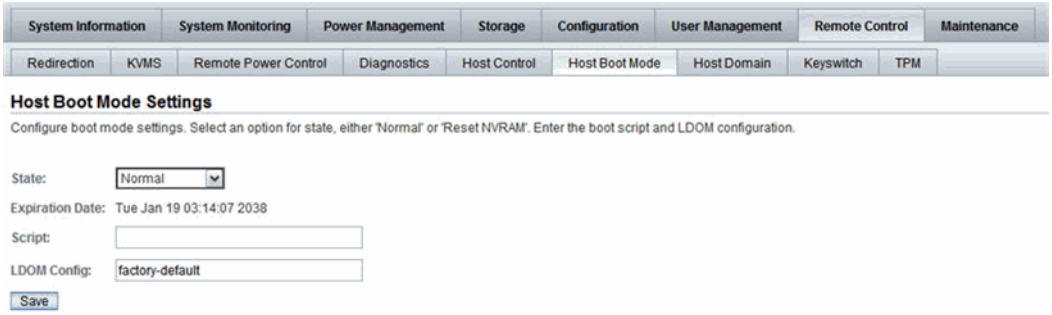
▼ 格納されている LDom 設定に対してホストの電源を指定する (Web)

始める前に

- 148 ページの「SPARC LDom 設定の要件 (Web)」を参照してください。

ホスト電源を格納されている LDom 設定に指定するには、次の手順に従います。

1. SPARC サーバーで Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. Web インタフェースで、「Remote Host」-->「Host Boot Mode」を選択します。



3. 「Host Boot Mode Settings」ページで、次の情報を指定して、サーバーで使用されるデフォルトの起動方法をオーバーライドします。

フィールド	手順と説明
State	「State」リストボックスで、次のいずれかのオプションを選択します。 • **Normal** − 次のリセット時に、現在の NVRAM 変数設定が保持されます。 • **Reset NVRAM** − 次のリセット時に、すべての OpenBoot 変数がデフォルト設定に戻されます。 「State」はリセット時の起動モードを指定します。 **注 –**「Reset NVRAM」の値は、次のサーバーリセット後または 10 分後に「Normal」に戻ります。「Config」および「Script」プロパティーは期限切れにならず、次のサーバーリセット時または手動でフィールドを空白にしたときにクリアされます。
Script	起動スクリプトを指定します。 「Script」は、ホストサーバーの OpenBoot PROM ファームウェアの起動方法を制御します。このコマンドは、現在の `/HOST/bootmode` 設定には影響を与えません。
LDOM Config	格納されている LDom 設定ファイル名を指定します。

4. 「Host Boot Mode Settings」ページで行った変更を確定するには、「Save」をクリックします。

IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断

次のトピックで、IPv6 を使用した Oracle ILOM にアクセスする際に生じる一般的な問題の解決に役立つ解決策を説明します。

- 152 ページの「Oracle ILOM 接続に関する問題の診断」

Oracle ILOM 接続に関する問題の診断

IPv6 の使用時に Oracle ILOM への接続に関する問題が生じた場合は、152 ページの「表: IPv6 接続の一般的な問題と推奨解決方法」の情報が、IPv6 を使用して ILOM にアクセスする際に生じる一般的な問題の解決に役立ちます。

表: IPv6 接続の一般的な問題と推奨解決方法

IPv6 の一般的な接続の問題	推奨解決方法
IPv6 アドレスを使用して Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスできない。	URL の IPv6 アドレスが次のように角括弧で囲まれていることを確認します。例: `(https://[fe80::221:28ff:fe77:1402])`
IPv6 アドレスを使用してファイルをダウンロードすることができません。	URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。例: `load -source tftp://[fec0:a:8:b7:214:rfff:fe01:851d]desktop.pkg`
ネットワークライアントから IPv6 を使用して Oracle ILOM にアクセスできない。	分割サブネットの場合は、次の操作を実行します。 • Oracle ILOM のアドレスがリンクローカルアドレスかどうかだけでなく、動的か静的かを確認します。 • ネットワークライアントに設定されているアドレスがリンクローカルアドレスかどうかだけでなく、IPv6 アドレスかどうかを確認します。 同一サブネットまたは分割サブネットの場合は、次の操作を実行します。 • Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または Oracle ILOM CLI の `/SP/network/ipv6` のターゲットで、「`IPv6 State`」の設定が有効になっていることを確認します。 • 制限付きシェルで `ping6` を実行します。 • 制限付きシェルで `traceroute` を実行します。
IPv4 と IPv6 のデュアルスタックネットワーク環境内でクライアントから Oracle ILOM にアクセスできない。	次の設定が有効になっていることを確認します。 • 「`State`」。「`State`」の設定は、Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページまたは CLI の `/SP/network` ターゲットで有効にすることができます。 • 「`IPv6 State`」。「`IPv6 State`」の設定は、Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページまたは `/SP/network/ipv6` ターゲットで有効にすることができます。
ネットワークライアントから IPv4 を使用して Oracle ILOM にアクセスできない。	Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または Oracle ILOM CLI の `/SP/network` のターゲットで、「`State`」の設定が有効になっていることを確認します。

ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動設定ガイドライン

次のトピックで、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェースのホスト OS 接続ポイントで手動で設定するためのガイドラインを説明します。

■ 154 ページの「ホスト OS での内部 USB Ethernet デバイスの設定」

ホスト OS での内部 USB Ethernet デバイスの設定

ローカル相互接続インタフェース上の Oracle ILOM SP 接続ポイントのルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスを手動で設定する場合、ローカル相互接続インタフェース上のホスト OS 接続ポイントのルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスも手動で設定する必要があります。次の表では、オペレーティングシステムごとに、ホスト OS 接続ポイントのルーティングの宛先とならない静的 IPv4 アドレスを設定する場合の一般的なガイドラインについて説明します。ホストオペレーティングシステムで IP アドレスを設定する方法の詳細については、ベンダーのオペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

注 – Oracle ILOM には、ホストオペレーティングシステムへの USB Ethernet インタフェースとしてサーバーにインストールされた内部 USB Ethernet デバイスが表示されます。

表: ホスト OS で内部 USB Ethernet デバイスを設定するための一般的なガイドライン

オペレーティングシステム	一般的なガイドライン
Windows Server 2008	Windows で内部 USB Ethernet デバイスが検出されると、ほとんどの場合、そのデバイスのデバイスドライバを指定するためのプロンプトが表示されます。実際にはドライバは不要なため、`.inf` ファイルを指定することで、内部 USB Ethernet デバイスの通信スタックの要件を満たす必要があります。`.inf` ファイルは、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 のソフトウェアディストリビューションから入手できます。この Management Pack ソフトウェアを Oracle のソフトウェア製品ダウンロードページ (`www.oracle.com`) からダウンロードし、`.inf` ファイルを抽出できます。Management Pack ソフトウェアからの `.inf` ファイルの抽出の詳細については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。 Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 のソフトウェアディストリビューションから `.inf` ファイルを適用すると、「コントロールパネル」(「スタート」-->「コントロール パネル」) にある Microsoft Windows のネットワーク設定オプションを使用することにより、ホスト OS 接続ポイントの静的 IP アドレスをローカル相互接続インタフェースで設定できるようになります。 Windows 2008 で IPv4 アドレスを設定する方法の詳細については、Microsoft Windows オペレーティングシステムのドキュメントまたは Microsoft TechNet サイト (`http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754203%28WS.10%29.aspx`) を参照してください。

表: ホスト OS で内部 USB Ethernet デバイスを設定するための一般的なガイドライン (続き)

オペレーティングシステム	一般的なガイドライン

Linux	Oracle Sun プラットフォームサーバーでサポートされているほとんどの Linux オペレーティングシステムのインストールには、内蔵 Ethernet デバイスのデバイスドライバのインストールが含まれます。
	通常、内部 USB Ethernet デバイスは、Linux オペレーティングシステムによって自動的に検出されます。内部 Ethernet デバイスは、通常 `usb0` と表示されます。ただし、内部 Ethernet デバイスの名前は、Linux オペレーティングシステムのディストリビューションに応じて異なる場合があります。
	次の手順で、`usb0` (通常、サーバーで検出された内部 USB Ethernet デバイス) に対応する静的 IP アドレスを設定する方法について説明します。
	`\>lsusb usb0`
	`\> ifconfig usb0 169.254.182.77`
	`\> ifconfig usb0 netmask 255.255.255.0`
	`\> ifconfig usb0 broadcast 169.254.182.255`
	`\> ifconfig usb0`
	`\> ip addr show usb0`
	注 – 一般的な `ifconfig` の手順を実行する代わりに、インタフェースの設定をスクリプト処理することもできます。ただし、厳密には、Linux ディストリビューション間でネットワークスクリプトは異なります。通常、Linux の動作バージョンには、ネットワークスクリプトをモデル化するための例が含まれています。
	Linux オペレーティングシステムを使用してデバイスの IP アドレスを設定する方法の詳細については、Linux オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

表: ホスト OS で内部 USB Ethernet デバイスを設定するための一般的なガイドライン (続き)

オペレーティングシステム	一般的なガイドライン

Oracle Solaris	Oracle Sun プラットフォームサーバー上のほとんどの Oracle Solaris オペレーティングシステムには、内部 USB Ethernet デバイス用のデバイスドライバが搭載されています。このドライバがサポートされていなかった場合、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアからこのドライバを抽出することができます。Ethernet インタフェース用の Oracle Solaris 固有の OS ドライバを抽出する方法については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。
	通常、内部 USB Ethernet デバイスは、Oracle Solaris オペレーティングシステムによって自動的に検出されます。内部 Ethernet デバイスは、通常 `usbecm0` と表示されます。ただし、内部 Ethernet デバイスの名前は、Oracle Solaris オペレーティングシステムのディストリビューションによって異なる場合があります。
	Oracle Solaris オペレーティングシステムによってローカル USB Ethernet デバイスが認識された後、USB Ethernet デバイスの IP インタフェースを設定する必要があります。
	次の手順で、`usbecm0` (通常、サーバーで検出された内部 USB Ethernet デバイス) に対応する静的 IP アドレスを設定する方法について説明します。
	• 次のコマンドを入力して、IP インタフェースを `plumb` または `unplumb` します。
	`ifconfig usbecm0 plumb`
	`ifconfig usbecm0 unplumb`
	• 次のコマンドを入力して、アドレス情報を設定します。
	`ifconfig usbecm0 netmask 255.255.255.0 broadcast 169.254.182.255 169.254.182.77`
	• インタフェースを設定するには、次のように入力します。
	`ifconfig usbecm0 up`
	• インタフェースを停止するには、次のように入力します。
	`ifconfig usbecm0 down`
	• アクティブなインタフェースを表示するには、次のように入力します。
	`ifconfig -a`
	• 接続をテストするには、Oracle Solaris ホストまたは SP 内部 USB Ethernet デバイスに対して ping を実行します。
	`ping` <Oracle Solaris ホストの IPv4 アドレス>
	`ping` <SP-Ethernet USB の IPv4 アドレス>
	注 – 一般的な `ifconfig` の手順を実行する代わりに、インタフェースの設定をスクリプト処理することもできます。ただし、厳密には、Oracle Solaris ディストリビューション間でネットワークスクリプトが異なる場合があります。通常、動作バージョンに、ネットワークスクリプトをモデル化するための例が含まれています。
	Oracle Solaris オペレーティングシステムを使用してデバイスの静的 IP アドレスを設定する方法の詳細は、Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

注 – 内部 USB Ethernet デバイスのドライバがオペレーティングシステムのインストールに含まれていなかった場合、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアから Ethernet デバイス用のデバイスドライバを入手することができます。このファイルを Management Pack から抽出する方法については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。

索引

A

Active Directory
- イベントクラス, 65
  - イベントクラスのカスタムフィルタ, 65
- 厳密な証明書モード, 59
- 証明書, 59
- 証明書ファイルのアップロード, 60
- 設定, 55
- テーブル, 60
  - Admin Groups, 61
  - Alternate Servers, 62
  - Custom Groups, 62
  - DNS Locator Queries, 63
  - Operator Groups, 61
  - User Domains, 62
- トラブルシューティング, 64

Administrator の役割, 51

H

HTTP または HTTPS Web アクセス
- 使用可能への切り替え, 36 ~ 37

I

ILOM からのログアウト
- Web インタフェースの使用, 21

ILOM へのログイン, 17

L

LDAP
- LDAP サーバーの設定, 66
- LDAP 用の ILOM の設定, 67
- オブジェクトクラス, 66

LDAP/SS
- テーブルL
  - Alternate Servers, 74

LDAP/SSL
- admin groups, 73
- alternate servers, 73
- custom groups, 73
- operator groups, 73
- user domains, 73
- Web インタフェースのテーブル, 72
- イベントクラス, 76
- 証明書ファイルのアップロード, 72
- 設定, 68
- テーブル, 72
  - Admin Groups, 73
  - Custom Groups, 74
  - Operator Groups, 73
  - User Domains, 74
- 認証および承認のトラブルシューティング, 75

O

Operator の役割, 51

R

RADIUS
- 設定, 78

root ユーザーアカウント, 19

S

Secure Shell (SSH) の設定
- 新しい鍵の生成, 39
- サーバーの再起動, 39
- 設定, 38
- 有効化または無効化, 38

Secure Socket Layer (SSL) 証明書
- 証明書のアップロード, 37

SMTP クライアント, 107
- 使用可能への切り替え, 107

SPARC サーバー
TPM と LDom の状態の管理, 145
SSH 鍵, 39
削除, 55
サポートされる転送方法, 53
FTP, 53
HTTP, 53
HTTPS, 53
SCP, 53
SFTP, 53
TFTP, 53
ブラウザ, 53
設定, 52
追加, 53

W

Web インタフェース
概要, 1, 2
コンポーネント, 6
サポートされているブラウザ, 3
ボタン, 7

い

イベントログ
カスタムフィルタ, 76
出力のフィルタリング, 91

く

クロック設定
設定, 89

け

警告
電子メール通知の生成, 107
警告ルール
作成または編集, 105
使用不可への切り替え, 106
警告ルールの作成または編集, 105

こ

コンポーネント
監視, 87
サービスへの復帰, 84
状態の情報の表示, 82
取り外す準備, 83
有効化および無効化, 84

し

識別名 (DN) 形式, 62
システムインジケータ, 88
システム識別子
割り当て, 32
システム識別子を指定するフィールド, 32
システムの場所を指定するフィールド, 33
システムの連絡先を指定するフィールド, 32
消費電力
監視, 112
個々の電源の監視, 114
システムの監視, 113
証明書の削除, 72
証明書のロード, 72
シリアルポート、内部
ボーレートの設定, 34
シリアルポート出力
ILOM Web インタフェースを使用した切り替え, 35
シングルサインオン
設定, 46
自動 IP アドレス, 26

す

ストレージコンポーネント
監視, 95

せ

静的 IP アドレス, 27
セッションタイムアウト
設定, 47
リセット, 47
センサー測定値, 88

た

タイムゾーン設定
設定, 90
表示または設定, 90

と

ドメインネームサービス (DNS)
表示と構成, 33

ね

ネットワーク設定
　表示と構成，26
　保留および有効なプロパティー，25

ふ

ブラウザおよびソフトウェアの要件，2
プロファイル
　選択，48

ほ

ホストの電源状態
　制御，139, 140
ホスト名
　割り当て，32
ボーレート
　設定，34
ポート ID，64

ゆ

ユーザーアカウント
　root，19
　削除，51
　設定，46, 50
　追加，47
　役割の割り当て，47
ユーザーセッション
　表示，52
ユーザープロファイル
　変更，51

り

リモート syslog，94
リモートホスト
　管理，137
　電源状態の管理，139